

マライシアの農耕系譜

古川 久雄*

Genealogy of Agriculture in Malaysia

Hisao FURUKAWA*

- | | |
|------------------|-----------------------|
| はじめに | 2-1 スンバの畑 |
| I イモ農耕 | 2-2 水田耕作 |
| 1. ニューギニア本島 | 2-3 巨石墓と葬儀 |
| 1-1 湿地のイモ, 乾地のイモ | 3. 漸移帯の農耕法——小結 |
| 1-2 イモ栽培の技術 | III 湿地の無耕起稲作 |
| 1-3 焼畑 | 1. 古代中国の下湿地水田 |
| 1-4 交替市場 | 2. 島嶼部の湿地無耕起移植稲作 |
| 2. トロブリアンド島 | 2-1 バリト川の湿地稲作 |
| 2-1 イモ栽培の儀礼 | 2-2 バタンハリ川の湿地稲作 |
| 2-2 イモ栽培の技術 | 3. 湿地無耕起移植稲作——小結 |
| 2-3 イモ栽培は子育て | IV 牧畜・穀作複合の中の稲作 |
| 3. ソロモンおよびトンガ | 1. マダガスカル概観 |
| 3-1 ガダルカナル島の焼畑と漁 | 中央高地 〈メリナ・ベツィレオ〉 |
| 3-2 トンガタプーのイモ栽培 | 東部雨林 〈ベツィミサラカ〉〈タナラ〉 |
| 4. イモ栽培——小結 | 〈アンタイモロ〉〈アンタヌシ〉 |
| 4-1 排水・移植・短期休閑 | 〈ベザヌザヌ〉 |
| 4-2 土器の問題 | 西部サバンナ 〈ツミヘティ〉〈サカラヴァ〉 |
| II 東インドネシアの農耕 | 〈マハファリ・マシュクール〉 |
| 1. サヴ島 | 〈ヴェズ〉〈タンルイ〉〈バラ〉 |
| 1-1 雑穀栽培と儀礼 | 2. 畑作的稲作の2類型 |
| 1-2 パルミラヤシの利用 | 3. 畑作的稲作——小結 |
| 2. スンバ島 | |

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

This study describes the plowless agriculture characteristic to the tuber and rice culture of the trans-equatorial zone. Although various types of plow and harrow are in use today, their introduction is rather late. In Java the plow came into general use in the Dutch time, even though it is mentioned in epigraphs and illustrated in the carvings of the eighth to ninth century. Common cultivation technology before the Dutch period presumably consisted of tillage by digging stick and paddle-shaped hoe, weed cutting by use of a long knife, and soil preparation by buffalo or cattle-trampling. This surmise is based on the fact that these technologies and tools are still in popular use in Malaysia, the trans-equatorial zone from Madagascar, through Indonesia, to Melanesia, Micronesia and Polynesia. Together with these ancient traditions, ancestor souls and earth spirits are still often invoked for permission to open the land and for successful cultivation. Various rites, offerings and omens are observed, some of which are very similar in notion and form to those surrounding the worship of Osiris, the Egyptian god of crops, who returned after death. The concept of revival in funeral rites, megalithic altars and graveyards, some of which are similar to the terrace pyramids of ancient Egypt and Ziggurat of West Asia, are broadly distributed in Malaysia. The coexistence of plowless agriculture on one hand and traditions that originated in West Asia on the other suggest the possibility that a plowless zone and plow-cultivation zone have been in contact for several millennia. The author surmises that the trans-equatorial cultural zone was formed through this wide-ranging contact.

The oldest form of agriculture in the plowless zone is probably tuber-cropping. Its distribution in the Neolithic era would have been much broader than it is at present, probably occupying the whole of the Old Tropic Zone. Later, grain-cropping of wheat and barley originated in the Mediterranean-Central Asian flora belt. Thus, two contrasting cropping systems were established in the Old Worlds: tuber-cropping with use of the digging-stick in the trans-equatorial zone, and grain-cropp-

ing (barley and wheat) in the dry steppes. Propagation of the concept of grain-cropping to other parts of the world led to millet becoming a cultivated crop in the tropical savannah. Rice was also cultivated as a kind of millet suited to wetland conditions. Secondary centers of grain-cropping were probably established in several locations in the Old Tropics in the seventh millennium B.C. In these secondary centers, the original design of grain-cropping must have undergone several transformations. Originally it was characterized by the concept of mass production and consisted of such technologies as cattle-draft plowing, broadcasting, harvesting by sickle, and threshing by animal-trampling. On the other hand, tuber-cropping evolved very different practices: meticulous care in preparing planting holes and beds, repeated transplanting, and rearing each tuber as if it were a human baby. Tuber-cropping carries the concept of child-rearing. The rice cultivation which originated in the Old Tropics of Malaysia inherited some of the tuber-cropping technologies, that is, transplanting and ponded cultivation. The rice culture which was established along the middle and lower reaches of the Yangtze river at the end of the seventh millennium B.C. is considered to be part of this.

The introduction and expansion of grain-cropping of barley and wheat, millet and rice into the Old Tropics led eventually to the tuber-cropping zone being split into eastern and western cores. The propagation of grain-cropping into the Old Tropics with other elements of material culture occurred in successive waves and produced several variations. This essay aims to provide criteria for distinguishing the genealogy of these various cultivation technologies.

The term Malaysia is preferred in several respects. First, it is used to avoid confusion with the terms Malay and Malaysia, which are understood in many cases to represent a single cultural ethnohistory. Actually, the trans-equatorial zone has been developed by various elements of people and culture. Second, it is a convenient term for a vast geographical region, like those used by scholars of flora geography.

In this essay, it is used to include Polynesia, Melanesia, Indonesia, and Madagascar.

Chapter one describes the tuber-cropping of the New Guinean highlands, the Trobriand Islands, and the Solomon and Tonga Islands. Chapter two describes the cultivation and rituals in Savu and Sumba Islands, which still show a strong influence of tuber-cropping traditions in their rice cultivation. Chapter three

describes the rice culture in the wetlands of Sumatra and Borneo from the viewpoint that this is the incipient form of rice culture established in the Yangtze river basins of the seventh millenium B.C. Chapter four describes the features of the rice culture of Madagascar, which underwent peculiar modifications on encountering the pastoralism-grain culture complex.

は じ め に

この一文で書こうとするのは、環赤道海域帯に特徴的な無犁耕耕作，殊にイモと稲栽培に現れる諸種の農耕技術及び関連した生活文化である。勿論，現在は多種の犁や耙も使用されるが，その導入は比較的最近で，インドネシアの場合，8，9世紀のジャワの碑文や石彫に現れるが，その一般化はオランダ統治以降に生じている。それ以前の農耕は犁を使わず，掘棒や櫛型鋤，山刀による草切り，水牛や牛による蹄耕であったと思われる。というのはこれらの方法が現在も尚広くこの地域に行われるからである。また，祖先霊や地霊に対する尊崇が生きており，開畑，農作業始めにあたってこれらに許可を求め，栽培の成功を願う儀礼，供犠，卜占がくり返され，そうしたものの中にはエジプトのオシーリス神話の死してよみがえる作物の神の概念に類似した構造と呪文をもつものがある。葬送儀礼における再生思想，西アジアのジグラトやエジプトの段台ピラミッドに似た巨石墓域もしくは祭壇はマダガスカルからインドネシア，メラネシア，ポリネシア，ミクロネシアに広く分布する。こうした生活文化の類似を視野の端に入れて農耕法を考える時，この無犁耕農耕地帯と犁耕穀作地帯の間に長期にわたる相互交流の存在を認める視点がありうる。その交流の結果，環赤道海域文化圏が形

成されてきたという感じを抱いている。

農耕の文化層という点でこの地域の最古のものはイモ農耕だろう。イモ農耕の新石器時代における広がりはこの分布より相当広く，一昔前の植物地理学でいう旧熱帯区〔シュミットヒューゼン 1968：17-38〕一帯に存在したと考えられよう。やがてその北側に位置する全北区の地中海—中央アジア植物系区に麦栽培が発生し，ここに掘棒・櫛型鋤によるイモ農耕と，犁耕による麦農耕の二元対立が生じる。穀作思想は旧熱帯区に南下してサバンナで雑穀を栽培化せしめ，更に雑穀栽培は湿地で稲を栽培化せしめた。穀作二次センターは紀元前七千年紀には旧熱帯区のいくつかの場所で成立しただろう。その際に犁耕・散播・鎌刈り・家畜の蹄による脱穀という一連の大量生産思想に基づく技術は侵入先でいくつかの変形を受けた。アフリカのサバンナにおける鋤耕または掘棒点播，石叩き脱穀はその例だが，マレーシア旧熱帯のイモ農耕圏との接触で生じた稲作はより根本的な変化を生んだ。掘棒で穴をあけ，移植を繰り返し，1個1個のイモをいつくしみ乍ら育てる子育て栽培思想のイモ農耕の影響下に稲作は移植という技術を取り入れた。同時に湿地雑穀としての稲の特性を生かした雑草防除法を組み合わせ，水田移植栽培という技術を生んだ。紀元前七千年紀末に長江中下流域で発生した稲作はこうしたものだったろう〔古川

1990]。こうして成立した麦、雑穀、稲という穀作農耕が旧熱帯区に侵入を続け、分布域の拡大をはかるにつれて、イモ農耕圏は次第に東西に退いた。穀作農耕の旧熱帯への伝播は何回もの波で行われ、その内容も変異に富む。その農耕の系譜を考える材料を整理する試みが本小論というわけである。

マライシアといういささか古めかしい呼称を使ったのは、出来るだけ既成の文化的意味を担わない、地理的広がりとしての場の意味に限定された言葉を選びたいとの意図からである。記述の地域的広がりには先に述べた植物地理学でいうマレーシア旧熱帯主要部を占めるポリネシア、メラネシア、インドネシア、それにアフリカ旧熱帯との漸移地区であるマダガスカルを含んでいる。

第Ⅰ章はマライシア地域のイモ農耕の様子をニューギニア本島、トロブリアンド島、ソロモン及びトンガ諸島についてかいま見る。第Ⅱ章は狭義のマライシア核心域の代表例として、サヴ、スンバ両島の農耕と生活文化の一端を述べる。第Ⅲ章はインドネシアの湿地稲作をかつての長江中下流における稲作の原始形態とする視点から報告する。第Ⅳ章は西アジア的な農牧複合にとりこまれた稲作形態をもつマダガスカルの例を述べる。

記述の材料はスマトラ、ボルネオを除き昭和 61 年から 63 年にかけて行われた文部省科研費（海外学術調査、研究代表者 高谷好一）による「マレー型農耕文化の系譜——内発的展開と外文明からの変容」研究の調査旅行で得たものである。調査の全期間、古川は高谷好一と行動を共にした。マダガスカルにおいては、前田成文、加藤剛、田中耕司、深沢秀夫と一部期間行動を共にし、全期間の通訳はラコトマララ氏にお願いした。スンバ、サヴでは BAKOSURTANAL のアリス・ポニマン氏が共同研究者として参加した。これらの共同研究者から現地で得た深い教示に深

く感謝したい。記述のいたらない点、解釈や仮説の不備はすべて私の能力不足に起因する。記して御寛容をお願いしたい。尚、マダガスカルに関する調査報告は『東南アジア研究』26 巻 4 号に特集され、調査者による座談会がある [高谷ほか 1989]。

I イモ農耕

1. ニューギニア本島

1-1 湿地のイモ、乾地のイモ

ニューギニア高地は火山灰と火山岩に由来する火山性土地帯である。ポカポカとしたクロボク土や風化の進んだ褐色のローム土が広く分布する。高地の中心マウント・ハーゲンから西へ走るとギルウェ、イアマヴァ、ドマなど海拔高度 4,000 m 前後の火山がそびえている。所々に石灰岩の絶壁が 1,000 m 程切り立つ。人間の居住空間は 1,500 m から 2,600 m 位の高度に広がっているが、2,000 m 前後が晴れ間が多く、蚊の少ない空間で、最も住み易い。2,500 m を越えると高木林が矮性化し始め、平坦地にアルパイン・メドーが現れる。アルパイン・メドーの湿地は堆積した火山灰が白粘土に変質し、その上に泥炭が堆積している。そして *nangu* と *tubo* という 2 種類のヘゴがパラパラと立っている。寒くていつも霧のかかるこうした高地は居住適地でもなく、作物も育ちにくい。イモ畑は 2,000 m 付近に最も広い。

ドマ火山の西麓のタリ (Tari) に小さな火山性盆地があり (図1参照)、そのフリ (Huli) 族はドマ火山の噴火伝説を伝える。それによると 10 世代前にドマ火山の山腹から溶岩と水が噴出し、大きな扇状地を作った。タリ盆地の人々が多数死んだが、今はその扇状地がフリ族の居住地と畑地である。1880 年頃には *bingi* と言われる火山灰降下現象があった。これはドマ火山由来ではなくて、遙

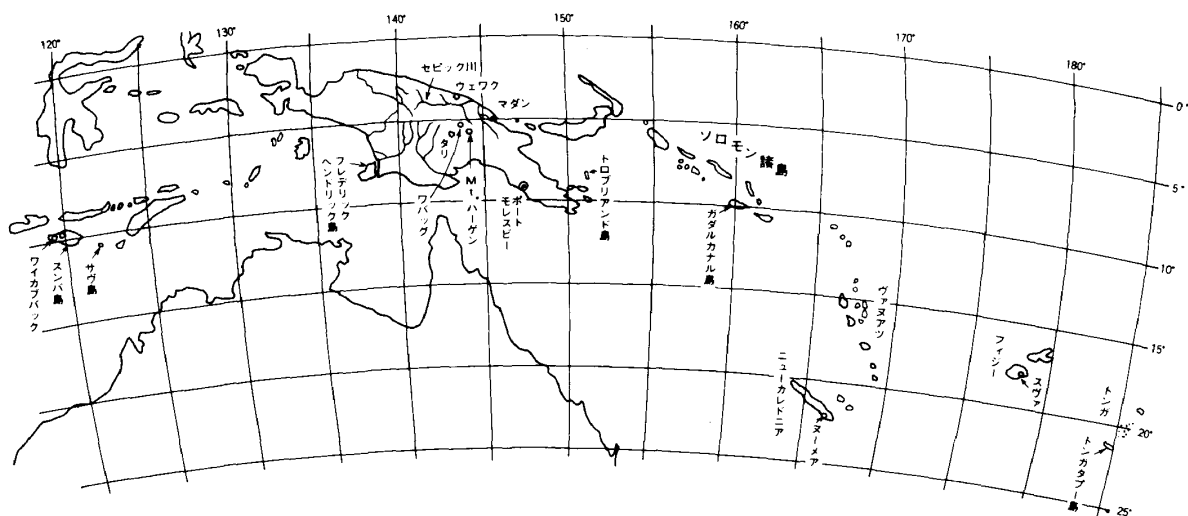


図1 東部インドネシア、メラネシア、西部ポリネシア位置図

か 500 km 東方の海上、ニューブリテン島の西にあるロング火山島の火山灰である。つまりニューギニア高地は近くの火山だけでなく、こうした遠方の火山灰も飛んで来る。

日本でもそうだが、排水が良くて膨軟な火山性土はイモの栽培に向いている。ニューギニア高地のイモ畑を見ると、深くて幅広の主排水溝を縦横に何本も掘り、その間に大小の畝を立てる。ところが大きな降灰が生ずるとこうした排水溝や畝は埋没してしまう。降灰がなくても表土のクロボクがどっと流れて排水溝を埋めることもある。こうして時期の異なるイモ畑が何層も重なって埋没する。考古学的発掘で流れこんだクロボク土をとり除くと、排水溝ネットワークで囲まれた昔のイモ畑が掘り出される。タリ集落の近くの切り通しで我々はこうした埋没イモ畑が少なくとも2枚重なっているのを見た。下の遺構は畑がロームでおおわれ、上の遺構は塚状の畝と深い溝がある。これら全体は更にロームで覆われている。

マウント・ハーゲンのクック（Kuk）茶園を開く時にこうした畑の遺構が発見されている。そこは湿地だったので、泥の中から先端

の尖った櫛型鋤（図2）が発見されている。鋤身部分は大きいもので1.2 m、小さいものでも0.5 mもある。Golson [1977]によると、ここには5枚の遺構が積み重なっている。最古の層準は9,000年前、その次が6,000年前の年代を与えられている。最古の層準でも幹線排水溝は長さ1 kmに及び、幅2 m、深さ1 mの大きなものである。ここではすでに豚の飼養が行われていた。6,000年前の層準には畝が確認され、畝間と排水溝に水を溜め、また排水を行なったと考えられている。ここまでは湿地でのイモ、つまりタロイモが主な作物と考えられているが、4,000-2,500年前の第3層準では有肩の石製掘具が発見され、乾地のイモ、つまりヤマイモ栽培も始まったと推定されている。更に第4層準は現在の排水溝ネットワークに囲まれた耕地と同程度の広がりを示し、幹線排水路と畝間溝が明瞭になる。この畑は1,200年前と推定される火山灰の降下で埋没したために放棄され、最表層は400年以降の畑であるという。

1-2 イモ栽培の技術

現在のイモ畑を見るとマウント・ハーゲン

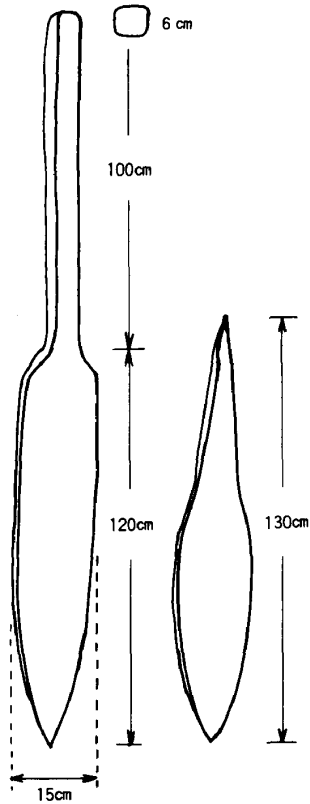


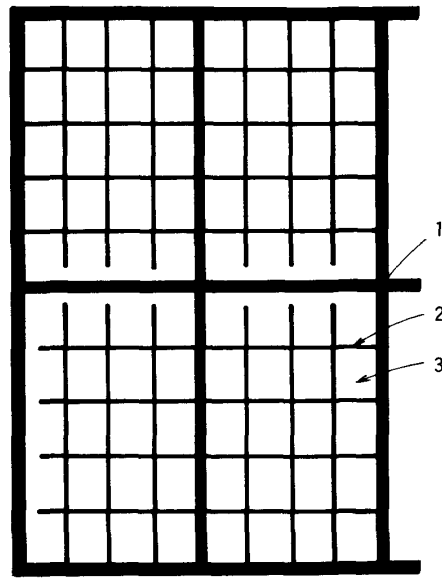
図2 マウント・ハーゲンのクック遺跡で発見された櫛型鋤

地区では $2\text{ m} \times 1\text{ m}$ 位の短冊型の畝が規則正しく並び、 20 m 間隔に幹線排水路が配置されている。畑を開く時は丈の高いススキ原を刀で切り、乾かして焼く。そして斜面と平行及び直角の方向に深い溝を掘る。溝の深さは傾斜勾配によって変わり、平坦地では 70 cm と深く、傾斜地では 40 cm 位と浅くなる。溝掘りは男の仕事で、使う鋤も大型で重い。畝にサツマイモつるを植え付けるのは女性の仕事である。植え付けには小型の櫛型鋤（とはいえ柄が 1 m 近くもある）を片手で握り、土をはぐし乍らツルを植える。一度植え付けると収穫時にツルを切って植え継ぎ、7年、時にはそれ以上も植え続ける。収穫時に短い尖り棒を使うのは沖縄やルソン島中央山地とよく似ている。土が堅くなると、収穫時、畝間に草の刈敷きを置き、畝を半分には裁

ち割り、刈敷きを土に敷き込む。前作の畝間溝が畝に、畝が溝になる(図3)。畝の切り返しは豚を利用しても行われる。豚耕といえよう。収穫後の屑イモが残っている畑に豚を繋牧する。豚は屑イモを探して長い鼻で土を掘り返す。この方法で畑の全面耕起、緑肥の敷きこみが可能である。この光景を見るとイモ栽培は起源が古いと思わざるをえない。豚が掘る位だから人間が掘らないはずがない。食い残りが土の中に埋もれて放置されれば、それは再び新芽を出し、地中にイモをつける。イモ栽培は採集と栽培の区別が判然としない。しかし、排水溝ネットワークが出現すればそれは明確に意図的栽培だ。それが $9,000$ 年前には始まっているというわけだ。

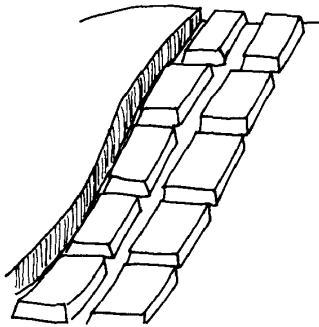
町から離れて山間部の谷に入ると丸い塚状の畝が増える。これも排水との関係で2種類に分かれる。深い排水溝を掘ると小さい塚状畝でよいが、溝を掘らない場合は直径 2 m 、高さ 70 cm 位の大きな塚状畝を立て、その上部に 10 株程のサツマイモを栽培する。6カ月程して収穫するが、収穫の状況によって植え継ぐ場合と畝間に刈敷きを入れて切り返す場合がある。こうして同じ畑に何年も植え続ける。マウント・ハーゲンの場合はことに土が肥えているので、長期間、多種の作物の輪作を続ける。多いのは1年目ピーナツ、2年目トウモロコシ、3年目ヤサイ、4年目ジャガイモ、5年目サトウキビ、6年目が豆、7年目以降サツマイモといった相当商業的輪作である。

こういう状況を見るとイモ栽培はいわゆる焼畑ではない、常畑耕作だという印象が強い。景色の中には二次林があり、ススキ原が作付け地とモザイクになっているので、休閑地があることは確かだが、作付け期間が相当長期間継続する。それを可能にする為、排水溝を掘り、畝を立て、刈敷きを入れ、畝を切り返すといった手当を行う。もう少し正確に

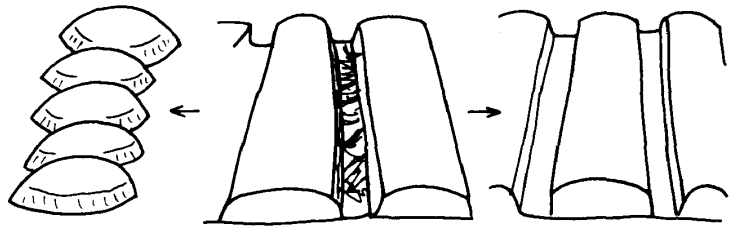


A 幹線排水路と畝溝で区画されたイモ畑

1 排線排水路 2 畝 溝 3 短冊型畝



B 斜面の短冊型畝



C 畝間に刈敷を入れて切り返し、大塚畝を立てたり、前作の溝に畝を立てる。

図3 ニューギニア高地の耕地

言うといも栽培の中にも粗放なものから集約的なものまで数段階の発展形態がある。このことは山麓崩積地に一作か二作で移動する純然たる焼畑があることから判る。そうした焼畑地は如何にも雑然としている。例えば北西部のワバック (Wabak) 盆地にはこうした短期植付けの焼畑地をしばしば見る。周りにジュズダマを周縁作物として植え、畑には排

水路も畝立てもなく、センニンコク(穂が40 cm 程立つ *Amaranthus*)、タロイモ、2種のヤムイモ、バナナ、シカクマメ、サトウキビなどが雑然と植わっている。この地域では深い排水溝を掘った畝畑でも、バナナ、タロイモ、サトウキビが混植されていて焼畑の様式を残す。こうして見ると、イモ栽培にも焼畑から常畑段階まで、数等級あり、イモ栽培

としての農耕文化があることが判る。

ニューギニア高地でこうした農耕文化の存在を感じしめるもう一つの作物はサトウキビである。常畑や焼畑のサトウキビもあるが、そういった生産量目当ての栽培とちがい、村の広場でしばしばびっくりする程のサトウキビを見ることがある。それはサトウキビの林という方がびったりする程である。高さは5～6m、しかも何本もの茎が縛り合わされているので一株が太い。直径40cm近いサトウキビの木に見える。茎10本程をひとまとめにして副木を当て、その上から下葉でぐるぐる巻きにしている。栽培法は、花穂が出る前に切りとった上部1mの頂芽を2、3本ずつ1株に植える。2、3年の間に分蘗が10-15本出る。分蘗をよくのばす為親株は適当な時期に切りとる。その後、株全体を下葉で巻く。こうして高さが5～6mに達するとやがて花穂が出る。その前に収穫し、糖分の少ない頂部は前述のように挿し穂として使い、下部は食用にする。穂が出る迄に3年もかかるというから、基本栄養生長性の強い品種を選択しているのだ。

株をなぜ縛り合わせるのか聞くと、カタツムリが入るからだという。倒伏防止の意味もあるだろう。しかしこうした技術的な意味もさること乍ら、本当の意味は別の所にあるだろう。後で述べるがトロブリアンド島では収穫したヤムイモを大きな円錐状に積みあげる。ひとつのイモは直径20cm、長さ30cmもの砲弾型で、このイモを人間の背丈程積み上げた様は実に見事であり、この立派な収穫を得た人間の努力、功績が展示される。林のようなサトウキビ園もこれと同じで、努力の成果を誇示する社会的な意味がきわめて強い。

この種の例をもうひとつ挙げよう。それは儀礼用の巨大なヤムイモ作りである。例えばセピック (Sepik) 川流域のマプリック

(Maprik) 集落の精霊神殿で聞いたヤムイモ作りの話は面白い。ヤムイモ祭に参加する男達は家族と離れて、植え付け期の1月から収穫期の8月まで畑の小屋で独り暮らしをする。ヤムイモ作りに最も肝要なのはタネイモと植え穴作りである。タネイモは前作のヤムイモの中で大きくてよく充実し、傷のないものを選び、家の暗所に置く。我々はタネイモを見る機会があったが、大きさは40cmを越え、すでに芽が70cmも伸びている。長い根も伸びてイモを包みこもうとしている。芽がしっかり堅くなってから植えることが肝心で、そうでないと軟らかい芽は蟻などに食われてしまう。つぎに植穴を掘る。これは直径1m、深さ6～7mの穴を尖った掘棒と櫓型鋤で掘る。そしてかねて用意してあった甘土を満たす。甘土は表土に刈草やリッターをまぜてよく熟成させた土である。準備の整った植穴に先ほどのしっかり発達した大きなタネイモを植え付ける。穴の中心から少しずらした位置に、芽を穴の中心に少し傾けて植え、浅く覆土する。そして支柱用の木枝を立てる。Malinowski [1935: 84-158] の調査時のトロブリアンド島では、この支柱は三角錐型に立て、しかもその支柱同士は畑全体の地面に格子状に敷いた小枝で接続され、支柱に降臨した生氣はこうした連絡路を通して畑全体に伝えられる。そうしたアニミスティックな信仰と固く結びついている。

1月に植え付けて8月頃に収穫である。ヤムイモ祭に参加した男達の晴れ舞台が始まる。掘りだしは最も細心の注意が必要である。イモの植え穴の1m外から土をとり除き始める。イモが姿を現し始めても周りの土を全部とり崩しはしない。一方の側壁は土を残しておき、イモの保持に使う。イモの長さは3mを越える巨大なものである。こうした注意が必要になる。保持壁を残して全長を現したヤムイモを取り上げるには特別の工夫が

いる。長い竹竿を用意し、何本も輪状のロープを吊り下げる。この吊り輪つき竹竿を巨大なイモの脇に差し込んで、保持壁の土を順次とり除いて吊り輪の縄でイモをしっかりと縛りつける。こうして、ヤムイモを吊るした竹竿を数人がかりで精霊神殿前の広場に運び、長さを競う。優勝のヤムイモは直径 30 cm、長さ 3 m を超えることがふつうである。コンテスト期間、この広場では踊りが続き、優勝者に贈られる多数の豚が供犠され、共食が行われる。そして優勝者のイモ運びに使われた竹竿は神殿内部に保管され、人々は彼のなし遂げた功績を記念するのである。

ニューギニア高地で重要な木本栽培作物にパンダンがある。果実の長いパンダンと丸いものがある。珍しいのは *mareta nega* という果実の長い方である。これはろくすっぽ商品のない女達の露天市場でも、ベートルナッツ、キンマと並んでよく売られている。50 cm 程の長い果実の中心に芯があり、それを果肉が包み、外表面に小粒の種子がイボイボ状に多数つく。種子は初め黒いが熟すと赤くなる。この果実を火喰鳥の骨で作ったナイフで切り裂き石蒸し料理をする。赤い種子が栽培目的物であり、油を含んだ脂質食物である。種子は石蒸し料理をした後、しがんでサネを吐き出すか、水を加えて手で揉み、出てくる液をとるという。吉田 [1988 : 87, 104] によると、焼石の上に切り裂いたパンダナスの髓をのせ、固い赤い種子のついた部分を水で洗ったものをのせ、その上に葉をかぶせ、重しをして蒸すという。その後、その種子のみを容器に集め、水を加えて揉み出す。得られた液をブタの骨のスプーンですくい、口の中でしがんでサネを吐き出す。この汁に焼きバナナやイモをつけて食べるとうまいという。吉田の記述で面白いのはセピック川上流のイワム族の場合、メラネシアで一般的だと思っている石蒸し料理がバンダナスに

ついでのみ行われ、バンダナス以外でこの方法を使うことは珍しいという。普通イモやバナナ、パンノキの実などは直火で焼くか、焼石を中に入れて葉で包んで焼くという。

1-3 焼畑

東南アジアの山地民の行う焼畑農業を山地民の主要な生業とみて、閉鎖された空間における採集狩猟から内発的に発生した農業技術とする見方がある。そして人口密度の増大が焼畑空間の不足を来し、移動を必然化せしめる原因と言われるが、しかし、現在のボルネオを例にとると、ここは 10 人/km² 以下という小人口空間である。

私は別の見方をしている。ボルネオのダヤク族を例にとると、彼らは金とか、沈香など文化中心地域、例えば中国で重用される何か付加価値の高い産物を採集に来た人であり、そのアソ模様やヒゲの多い渦巻文などが春秋戦国の揚子江流域出土のものとよく似ていることからすると、当然稲作を知っていてボルネオへやってきただろう。ボルネオ内での移動は従って、よりよい鉱床を求めて、あるいは沈香のより豊富な地域を求めて行われたものだろう。その移動生活と森という環境に適合した方法が移動焼畑耕作だと私は理解している。焼畑地を求めて移動するのでなくて移動する生活が先にあり、多くの選択肢のなかから、それに適合した方法として焼畑耕作が選択されたのだ。

ニューギニアでは移動の原因としてきわめて明確な理由がある。それは部族テリトリーの維持の為にを行う移動焼畑である。セピック川下流部の町ウェワック(Wewak)から内部のバグウィ(Pagwi)へ向かう道沿いで、町に程近いシブラング(Si Brangu)村で聞いた話を記しておこう。この村は独立ミッションでニューギニア女性と結婚しているドイツ人が経営する旅行者用山小屋のすぐ背後にある。

村は深い緑で覆われた前山の小高い丘の上

にある。樹高は20-30m とさ程高くない林が一面にひろがっているが、すり鉢型斜面のあちこちに彼らのいうガーデンがある。焼畑である。村は今は移動しないが、30 年程前迄はこちらの丘、あちらの丘と移動した。それぞれの村はある広がり領域を生活空間として持っている。ある一時期をとると畑はその一部分を占めるにすぎないが、使っていない土地も村人の生活にとって潜在的に必要な空間である。この領域は隣村の領域と接しているが、明確な境界線はない。領域に対する占有権は村人がその領域内で村を転々と動かし、万遍なく領域に対する使用痕跡をとどめることによってのみ守られる。村の位置を固定して活動がある地域に偏り、等閑視された地域が生ずると、そこに他村の人間が入り込む。更には他村の領域になってしまう。こうして自村の領域を維持する為に以前は3、4 年に1 回、村の位置を変えたという。

彼等のガーデンを見よう。以前は全村で開いたが、今は2-3家族単位で共同作業を行う。畑地は今も3 年で移す。以前の慣行を聞くとガーデンを開く時、まず畑予定地で1 列の木を伐り指導者が夢占いをする。夢見が悪いとそれは誰かの呪いか、あるいはそこで村人の誰かが死んだ場所であり、その死霊が伐開を喜ばない証拠だと判断され、その人間或いは死者の一族を見つけてその場所で共食をする。呪いが解ける、あるいは死霊が了解のサインを出したかどうかは再び夢占いに頼る。しかし部族戦闘の際に村人の戦士が死んで横たわった所だと、そこを中心に直径数 km の範囲は伐開しない。やむをえない理由で伐開する時は2,000-3,000キナの高価な真珠母貝を村の財産として寄進し、また、ムササビと豚を多数供犠して共食の必要がある。

時期にも制限があり、1 月から4 月までが上りの季節で伐開植え付けが許されるが、4 月以降は植え付けてはならない。7 月から

12 月は下りの季節で収穫のみが許される。伐開はまず草や灌木を伐り、2-3週間乾かした後に高木を伐り倒し、4 日後に焼く。但しパンの木などは伐らずにおく。焼け残りの整理が終わると村の長老達がショウガ、キンマを噛みながらガーデンのまわりを行列して歩き、所々、唾を吐く。こうしてガーデンを浄化する。その後、赤土で作った高さ10 cm の円錐形の土塊に指導者が息を吹きかけガーデンの一部に植え付ける。そこはいわゆる斉囲となる。またこの行為によってイモの生育促進と豊饒を祈る。

以上の伐開、植え付け儀礼の後、タロイモ、ヤムイモを各自の区画に植え付ける。生育までの間に虫ばらいが行われる。虫はやはり誰かの呪いによって現れるので、その人間を見つけ出して、聖なる木の葉 (*Lagerstroemia* spp.) でお祓いをする。また死者が悪さをしないよう、やはりその木の葉に供物をのせて川に流す。

生育期間中、女性がガーデンで小用をするやと野豚が作物を荒らす。ガーデンで性交を行うことも同様に野豚による被害を招く。月経中の女性がガーデンに立ち入ることも厳禁で、その期間の女性は月経小屋で暮らす。料理も洗濯もせず、他の女性が面倒を見る。

現在のガーデン植え付け法は、まず地方種のタバコの種子をばらまき、次にケイトウの種子をばらまく。両者共短期間で収穫する。ケイトウは種実用ではなく葉野菜として利用する。更に続いてタロイモ、ヤムイモ、サツマイモ、バナナ、サトウキビ、パパヤ、トウモロコシ、ココヤシなどを植え付ける。ヤムイモは既述のように、家中の冷暗所に保管してしっかりした芽の出たタネイモを植え付ける。ヤムイモは4 種ある。トゲがあり、ツルが左巻きのもの (*mamy* という) が2 種、トゲがなくツルが四角で右巻きのもの (*yam* という) 2 種である。*mamy* は食味がねば

く、yam はサラッとして水っぽい。植え付け法もことなり、mamy はイモ全体を植えるが、yam は芽つきの切片を植える。

食用のタロイモは2大別される。Colocasia を moi といい、茎が紫色と緑の2種がある。どちらもオヤイモ型である。伝統的な moi の外に、Xanthosoma が導入種としてあり、ホンコンタロと称されている。これはコイモをたくさん付ける。ヤムイモは収穫しないで長年放置しておくといくどん生を続け、大きく伸びたイモはいつでも食用になるが、タロイモの類は長期間放置するとエグくなって食べられない。地上部を切り、萌芽を出させて株を分け、植え直しをする必要がある。

ガーデンにはこの外に、トロロアオイの類、トマト、キウリ、カカオなども植えられている。それ以外にドクダミの葉、ツクサの若葉、ニューギニアの高地でもよく見かけるパンダンの長い赤い実、なども食用である。薬用のバナナもある。これは果実が上向きに立つ種類で、種子はなく、果実は短く太い。皮が赤と黄色の2種ある。熱病、マラリア、性病に効くという。似たバナナをアンボンでも見たことがあるが、そこでも同じ効用を聞いた。これは *Musa troglodytarum*、フエイバナナといわれるものだ。これの原産地は Solomon 諸島からニューカレドニアへかけてのメラネシア地域と考えられている。

まわりの林を見ると、栽培か自生か判らないが、パンの木が多い。これには2種があり、葉が小さく、種子も果肉も食べられるもの(woliという)と、葉が大きく種子のみを食べるもの(hanという)である。この二種のパンの木も東インドネシアの広い地域に伝播している。

少し湿った谷間にはサゴヤシがたくさん生育しており、サゴ洗いを行なってサゴデンプンを利用する。サゴヤシの葉や葉柄は建材と

して重要でこの村の家は高床の立派なものだが、柱と床を除いて、すべてサゴヤシの各部分を利用している。屋根はサゴヤシの葉と葉柄を綴り合わせた、インドネシアでいうところのアタップ、壁は葉柄の太い部分を割り開いて重ね合わせて並べたり、細い部分を並べる。床はニボンヤシ(limbuという)の幹を割り開いたものである。ついでに述べておくとニューギニア高地の家は全く様相が異なり、基本的に平土間である。カヤ葺きの屋根が地面近くまで垂れ、壁は樹皮を並べたものが多く、屋内に人間と豚が共住する。ゴロカ、マウント・ハーゲン地域だと男家と女家に分かれ、屋根に赤いドラセナか蘭を飾る支柱がたててあり、装飾的要素があるが、エンガ(Enga)地域だと大きなサゴ虫のような感じで、その中に男も女も豚も共住する。片側が隅丸方形で、後部へ高くなる屋根から薄煙が立つ。そのたたずまいはいかに土着的であり、それだけにセピック川流域や沿岸部の大きな高床家屋は外来文化が混淆していることを強く印象づける。

ところで既述した伐開儀礼だが、東インドネシアやトロブリアンド島の儀礼は詳しい報告がある [Woengsdregt 1928; Malinowski 1935]。私の簡単な報告は伐開植え付け時のもののみ描写をしたにすぎないが、伐開に対する死霊の同意をとりつけることが重要な要素であることは簡単な既述の中にも現れている。ここで面白いと思うのはトロブリアンドの報告などには出てこない点だが、部族戦争、あるいは村と村の戦争は今もニューギニアでは日常的である。例えば豚耕を行うタリの村では家々は土堀に囲まれ、そこには鋭く尖らした逆茂木が埋め込んである。侵入した敵はこの土堀の間の細い道を通らざるをえず、村人は土堀の上から侵入者に攻撃を加える構造になっている。村のたたずまいそのものの中に部落戦争の存在が明瞭である。セ

ピック川上流では 1956 年、最後の大規模な部族戦争が行われたことを吉田が報告している [吉田 1988]。タリヤワバックでは我々の旅行中の 1988 年にも部族戦争が行われている様子だった。ウェワックのシブラング村の村人達も 30 年程前までは部族戦争をしばしば行なったという。他村を攻撃する際は夜間に包囲し、朝、小用に出てきた男を投槍で殺す。大混乱になった村の中へなだれこんで、槍で人々を刺すのだという。投槍による対戦で重要なことは、投槍を構えた相手の手の甲を見ることで、それによって投槍の方向が判るから、その外にでる。フットワークを交えながら語る 50 年配の村人の様子を見ると、満更嘘でもないと思われる。私がそこに感じたのは戦闘こそ男の仕事、農作業は女の仕事にすぎないという彼らの価値観である。農業に一見関係なさそうな点に私が興味を持つのは、インドネシアの人々の持つ農業観が本質的にそれと似通っているためである。といってもインドネシアの場合は戦闘と農業の対比ではなくて、生業におけるハレとケという対比で現れる。例えば南スラウェシのブギス人が故郷の小さな水田社会を出て、スマトラの湿地林開拓で苦労の挙句大精米業者になることをめざしたり、魚の大仲買業者になることが彼らにとってハレの舞台であり、自村に居て多少の収量増大を行うことにはほとんど関心を向けないといった例である。ハレの栄誉の為には最新の精米機を湿地林の中へ導入するし、最も効率的な漁網や最新のエンジンすら導入する。それが周囲に広がる深い林や、ネジ作りの満足な鉄工所すらないという状況といかにチグハグであろうとそんなことはささいなことである。その結果、そこには発展段階の極めて異なった技術、道具、装置が混在することになる。幸運なる冒険者がそうした企画で成功を納めると、幸運の分け前にあずかろうと様々な人々があちこちから参

入する。そこには中国人やアラブ人やインド人などすら加わる。こうした異人たちをも含めた人々の移動と混淆の場、そして様々な発展段階の共存、これがマライシア世界の特徴だと私は思う。マライシア世界の農業の形成過程はこうした異質な人々と異質な技術の渡来とその共存と混淆を示している。

1-4 交替市場

セピック川下流部の主食はヤムイモコンテストを行うマプリックがヤムイモであるのを除くとサゴデンプンである。セピック川から内陸に入った湿地帯に住む人々はワサラ (Wasala) と総称され、湿地帯に自生するサゴヤシからサゴデンプンをとる。他方セピック川沿いに住む人々はガニ (Gani) と呼ばれ、彼らは漁業のみを行う。ワサラとガニは各地で市を開き、サゴと魚を交換する。市は両者の村々の中間に設けられる。そうした市の一つを訪ねた。バグゥイの下流数 Km 付近で左岸へ支流を入る。雨季の 6 月で支流の水位は高く、水面は岸とほとんど同じ高さである。水路にはヨシと水生の *Saccharum* が茂り、すごい蚊幕が立っている。スピードボート (といってもくりぬきカヌーに船外機をとりつけたもの、長さ 10 m、幅 60 cm) で 30 分程遡航したところに市があった。市場は週に 2 回、決まった曜日に開く。岸の林を切り開いた広場があり、300 人程の女性がそれぞれの商品を自分の前に並べ、いわば小さな店を出している。まわりはぐると 1 列に並び、真ん中に 4 列が並ぶ。おおよそ、魚屋とサゴ屋が向かい合っている形である。他に、キンマの葉、サゴ虫の串刺し燻製、クスクスのロースト、キャッサバの葉、オクラの葉、パパヤ、バナナ、タロのオヤイモ、ヤムイモ、生でかじるサトウキビ、サツマイモのてんぷらなどと雑貨衣服が少しある。魚屋の商品はほとんどがティラピアを開いた燻製で、他に川エビ、カメなども並ぶ。この市で

今まで見たことのない初めての経験をした。物々交換の市なのである。始めはお金で買う時間がある。5, 6人が雑貨を少しばかり買う程度で、この時間はすぐ終わる。人間が多いのにも拘らず活況のない市だと思って様子を見てみると、やがて1人の帽子をかぶった背の高い男が演説を始めた。市の指導者である。演説の内容は、サゴの品質について文句をいう者がいるのは困ったことだ。魚とサゴの交換が滞ると流域全体の人間が食料不足に悩むことになる。文句をいうな、という内容らしい。その時になってもまだ私には演説の意味がよく判らなかった。男が喋り終えるや否や、光景は一変した。アンギン袋を頭に引っかけた女達がぬれサゴデンプンの塊を持って立ち上がり、燻製魚を並べた女達の方へ突進する。サゴデンプンの塊は食パン2斤分位の大きさだろうか。直径30 cm程のカゴにつめて運んできたサゴデンプンをまず高さ20 cmに切り、この円筒状サゴを糸でミカン割りに6等分した塊である。サゴのこの塊1個でティラピアの燻製1匹と交換する。魚屋の女達はじっと待ち、差し出されるサゴ塊を見て、すばやく、適切な燻製魚を差しだし、サゴを受け取る。魚もサゴも皆同じように見えるが、細かい差があるのだろう。時には魚屋が交換を拒否することもある。その他、交換は40 cm長のサトウキビ茎2本、バナナ5, 6本、パパヤ1個などと、燻製魚1匹で行われる。こうした交換があらかた終わると、魚屋の女達も立ち上がり、キャッサバの葉、キンマなどの野菜、嗜好品を探しにいく。いいバナナや、タロ、ヤムイモがあれば燻製魚で交換する。

200～300人の女達がひしめき合い、市場で食事材料を仕入れる様はどこでも変わらない市場風景だが、ここでは完全な物々交換形式で交換が行われることがまことにユニークである。それと市場につきものの喧噪さがな

い。呼び込みのかけ声も、値段の交渉も、社交的おしゃべりも、ののしり合う喧嘩も、そうした喧しさが一切ない。交換はほとんど瞬時に行われる。生活の為の基本材料を求め合う真剣さが瞬時の交換を可能にしている。そしてきわめて静粛な雰囲気市場全体を支配しており、1時間程で交易は終わる。サゴ屋の女達は数人ずつのグループで、燻製魚を入れたアンギン袋を額にかけて、小道を森の奥へ、湿原の彼方へ消える。魚屋の女達は岸辺にもやっておいたくりぬきカヌーにぬれサゴの塊、野菜、サトウキビの茎などを積んで權でこぎ下る。市場の帰り道で女達は初めて饒舌になる。一晩の宿を提供してくれた魚屋の女は、ココヤシガラの蚊やりを焚き、權をあやつり乍ら、夫や家族とおしゃべりを楽しみ、本流へ出ると鼻唄もまじる。広い水面には黄色いカゲロウが無数に群れる。これもうまいよと無駄口をたたき乍ら家路をたどる。

ぬれサゴの料理法だが、セピック川中流部のパグゥイ、シャンプリ(Chambri)湖地域の方法は、吉田が上流部で述べている方法と違う[吉田 1988]。吉田の報告だと、東インドネシアで *popeda* というクズ湯状にねった後、それを干したサゴダンゴが主食のようなのだが、パグゥイ周辺だとベタ焼きが多い。東インドネシアで *sinore* という食いだ。炉の上に直径40 cm程の大きな土鍋を置き、ヌレサゴを少し乾かしサゴ粉を入れ、1 cm厚さに伸ばして、ココヤシ殻で軽く押さえる。ベタ焼きの下側にコゲ目がつくが、上側はまだ殆ど白い粉のまま。そこをぬれた布切れでなで、土鍋からおろして二つ折りにし、全体にサッと水をつけて形を整える。これで出来上がりで、そのまま食う。一時に相当量焼くので、残りは天井からつるしたアンギン袋に入れておく。

土鍋はこの地域ではエイボム(Aibom)が土器作りの中心で、戦前からサゴ焼きに使っ

ている。エイボムの土器は土鍋以外にもこの地域の生活に重要な道具を供給する。一つはサゴ保存用の壺である。大きい壺は高さ 60 cm で、そこにぬれサゴを入れ、上に水をはって長期保存を行う。これは比較的広口の壺だが、細口の水壺もある。他に野菜や魚の煮物用の深い土鍋、蚊やり用の穴あき薫蒸炉、それに高床の上で使う炉を作る。この炉は口蓋が縄文土器（例えば加曾利 B）のように波型である。こうすると風の息が生じて火勢が強くなる。そして口蓋直下の内壁に三角凸帯を全周に張り付ける。薪と炉壁の間に空隙が生ずるので燃え易い。エイボムの土器はいわゆる叩き技法で作るが、器壁に凸帯をはりつけて人面や円紋を作ること、深い条紋で描かれたワラビ手紋、黒い磨製土器に仕立てることなど、全体に縄文土器にきわめて似た雰囲気を持っている。そういえば成人儀式に使う円筒状のかぶりものも、そこに描かれたり、彫り込まれる面、下部に長くたらしめた黒いサゴヤシの毛など、全体の様子が秋田のナマハゲのかぶりものによく似ている。ついでに触れて置くと、セピック川流域の Haus Tambaran（精霊神殿）は高床で極めて大型の木造建築物である。成人儀式を行い、またその為のマスクや彫刻、楽器類を保管しておく聖なる建物であり、同時に「男の家」でもある。その構造は 20 m × 10 m 程の方形平面がふつうで、屋根を支える真中の 3 本の主柱は直径 60 cm、高さ 10 m もある。それを立てる時には人柱が捧げられた伝説がつきまとう。両側壁には片側 5-6 本ずつやはり大きい柱が立ち並ぶ。その偉観はエジプトの列柱神殿に似た印象を与える。これを見た時に私の頭をよぎった印象は、縄文前期に出土する柱穴とそれから復元される大型建物もこういった精霊神殿と似た構造と目的をもっていたのかもしれないということである。縄文前期の栃木県の聖山公園遺跡の大型建物、山形

県押出遺跡の縄文前期の湿地に張り床をしてたてられた円錐形の木造家屋、石川県の近森遺跡（縄文後-晩期）の円形列柱、能登半島の真脇（縄文前-後期）遺跡のトーテムポールなど、独断的感想だが、現在のニューギニアに見られる生活家屋、精霊遺構の類が多いようだ。

ニューギニア本島でも内陸部と沿岸部では同じ根菜栽培社会であっても生活ぶりは相当異なる。より自給的で土着的な生活を営み、男は部族戦争に生き甲斐を見いだしている内陸部に対し、沿岸部の人々は生産の分業化が進み、交易による物質獲得が生活の重要な支えになっており、人あたりが柔らかで、より商人的である。ミルン湾には島々を *lakatoi* 双胴船でまわることによって相互にはなれた島々の絆を強める *kula* 交易の話が残っているし、今も現に行なっているという人々もいる。海というハイウェーを介して外に開かれた世界である。同時に、その地理的位置故に、島々はまた異国の王の支配下に膝まずき、奴隷狩の恐怖にさらされ、海産物を求めに来る中国人商人の基地ともなってきた。次に、海域世界の特性のより顕著なメラネシア、ポリネシアの島々の生活をイモ栽培と漁法の話を中心に、見てみよう。トロブリアン、ソロモン、フィジー、トンガの島々をかいま見る。

2. トロブリアン島

2-1 イモ栽培の儀礼

トロブリアン島はニューギニア本島の尻尾の北側にある平坦な隆起珊瑚礁の島である。ロスニア (Losuia) の町を歩く人々は長さ 1.5 m、直径 20 cm のヤムイモに副木をあてココヤシの葉で包んで運んでいる。主食はやはりヤムイモとタロイモである。トロブリアン諸島で最も大きなキリウィナ (Kiriwina) 島は人類学者マリノフスキーのイモ社

会に関する2冊の詳細なモノグラフで有名な島だが、ヤシが豊かな緑陰を作り、愛嬌のある人々が住む観光地でもある。家はバリ島の米倉によく似ている。マリノフスキーはこの島の北部、最高首長のいるオマラカワ(Omarakawa)村で26カ月間、詳細な調査を行なった。

彼の報告 [Malinowski 1935: 84-158]を見ると、畑の準備から植え付け、収穫に至る約10カ月の間、各段階を追って、煩雑な迄の儀礼、呪文が繰り返され、栽培という営為が祖霊への感謝と恐れ、作物の注意深い観察、そして、村人を結び付ける絆の一層の強化への配慮、この三つがないまぜられたものとして組み立てられていることがよく判る。マリノフスキーの報告を簡単にいかつまんでみよう。イモ栽培は儀礼を司る畑呪師により段階を追って進められる。畑呪師は今年の栽培の為の寄り合いを召集し、首長に畑場所を提案させる。場所が決まると、そこで始耕祭を行う。それは最も重要な儀礼で、祖霊へ供物を捧げて畑を開くことの通知と畑浄化の呪文を唱える。豊作祈願や、野豚祓いの呪文も唱える。この儀礼は村全体の斉囲となる畑で行う。この後、村人は各自の畑予定地で同様の儀礼を行う。畑のヤブ切りも共同で、斉囲で共同にまず行い、後に各自の畑予定地で行う。畑を開く場所はいわゆる長期休閑ではなくヤブなので、伐開は草と灌木の枝を切り払う程度である。これは東南アジアの二次林を伐開する焼畑とは異なる。灌木や、古い支柱は焼かずに、脇へ片づけて、今回のヤムの支柱用などに保存する。

次に植付け儀礼を行う。最初の日タロイモを、次の日にヤムイモを斉囲に植え、再度タロの儀礼的植え付けを行う。この後、火入れをした畑に散らばる燃えさしの小枝を片付け、トゲのついた古いヤムの根は危険なので、きれいに掘り起こし、共に焼く。畑の小

石も取り除く。この後、とりよけておいた灌木や、小枝を使って重要な作業が行われる。畑の表面にこれらの小枝、灌木を敷き並べて、畑を格子状に分画するのである。この格子の線を作る小枝の間に隙間があってはならない。それは全体として完全に連結した格子でなければならない。この作業が済むと畑全体を野豚から守る為に柵で囲む。そして、各自の畑の四隅に、3本の木をプリズム状に組み合わせた一種の依りしろ(*kamkokora*といわれる)を立てる。柵にも三角形の木を組み立て、底辺の中心に高い支柱を立てる。更に畑の中にヤムのツルをはわせる為に、できるだけ高い支柱をいっぱい立てる。これらの支柱、それに *kamkokora* のいちばん高い支柱は、畑を格子状に区分する横木と接触する。こうして畑全体が依りしろとそれに連結した格子と柵で完全な魔力の働く空間に包まれる。この作業も勿論、村全体の斉囲と各自の畑で行われる。準備が終わると、数回掘り棒を30cm程土に突き立て、石灰岩に当たるとそれを掘りだして、タネイモを植える。

植え付けが終わると、日を追って各種の発育儀礼が行われる。発芽が早く進むように、葉が早く伸びるように、イモがたくさんつくように、根がしっかり張るように、という次第である。こうした儀礼の際には様々な呪文が唱えられる。呪文の内容で私に面白く思われるのは、イモがたくさん付くことを願う呪文が、「イモよ戻ってこい、我らに戻ってこい、しっかりと戻ってこい」という内容であることだ。短絡的といわれるかもしれないが、すぐ思い浮かべるのはオシーリス神話である。よこしまな弟セトによって14の切片にばらばらに切り刻まれ、エジプトの沼地にばらまかれたオシーリスの身体を妻のイーシスが探し出したが、生命のない屍のまま横たわるオシーリスを前に、イーシスとその妹ネプティスの2人が唱えた悲嘆の言葉が知られ

ている。「汝の家に來たれ、汝その心たしかなる者よ、汝の妹に來たれ、汝の妻に來たれ（後略）」（フレイザー『金枝篇』[1951：3巻，80-124]）。2人の悲しみを見た太陽神ラーが豹頭のアヌビス神を派遣して、オシーリスの身体をつなぎ合わせ、再生を願う儀礼の後、オシーリスを蘇生せしめたという話は『金枝篇』の中でもとりわけ魅力的な部分である。穀神のオシーリスの死と蘇りに関した神話と儀礼、そして世界各地に見られるその変形を収録することが『金枝篇』というこの大著の唯一のモチーフである。トロブリアンドのイモ作りで唱えられる「戻って来い」というこの呪文は古いイモから新しいイモが生まれ出る為に唱えられ、イーシスの唱える呪文と、状況もその願いの内容も合致している。マリノフスキーが当然フレイザーの大著を頭においていたであろうことは、次のように書いていることで明瞭だ。「帰ってこい」というこの言葉が作物の帰還、古いイモから新しいイモへの蘇りの進行を示す何物かを伝えるものかどうか、確証を得ることはできなかった」と。

極めてよく似た想念、つまり作物の収穫を作物霊の帰還ととらえていることを示す習俗は東南アジアの稲作の中に例が多い。例えばボルネオのイバンの焼畑陸稲倉入れ儀礼では、ロングハウスの床上で供物を捧げ、稲魂迎えの呪文を唱え、筵に稲穂を包み込んで稲魂が逃げないようにする。しかし畑にはまだ稲倉への道が判らなくて、うろうろしている稲魂がいるかもしれない。そこで呪師は畑の斉囲に出かけ、供物を捧げ、はぐれた稲魂に帰還をよびかけ、煎り米を投げて、「稲魂よ、みんな帰ってこい」と唱え乍らロングハウスに戻る。

収穫を死からの蘇りとしてもっと明白な形でとらえる習俗はスラウェシのトバダ（To Bada）族に見られる〔Woengsdregt 1928：

179〕。ここでは稲刈りは女性先導者によって始められる。収穫において彼女の果たす役割から、この先導者は「死者の魂、死者」と呼ばれる。死者の霊たちはまだ生きている者を妬み、たえず生者を自分達の領域、つまり冥界へ引き入れようと狙っている。タブーを守ることによって死霊から守られていないふうの人間が耕地へ入ると死者の霊に病気にされてしまう。そして稲魂も逃げてしまう。それで、先導者は死者であるように振る舞わねばならず、呼び名も「死者の魂、死者」とされる。斉囲の稲を摘み取る時の女先導者は死者なのである。白い嘆きの帽子をかぶって身を隠し、「霊たちの場所」と呼ばれる長い袖の下に稲を盗む手を隠し、死霊に、彼女が生者と関わりなく、死者の1員であるように見せかける。視線を死者達にとらえられないように遠くを見ず、静かに、かすかな動きで収穫をし、生者のような急な動きはせずにゆっくりと歩く。

この習俗は死霊を畏れ、敬う祖先崇拜の伝統を背景に、死霊の影響下にある稲米が、死者に扮した呪術師によって生者の側へもたらされる、死して蘇る穀霊という進行を劇的に演出していると思うのである。呪師が稲畑の斉囲で、稲魂に「帰って来い、帰って来い、帰って来い」と呼びかけることや斉囲に集まった（と信じられる）稲魂を村の稲倉へ運ぶ時に「さあ行こう、行こう、行こう、汝らの宮殿へ行こう、宮殿へ行こう」と呼びかけるこの種の事例は東南アジア全域に広く分布する。島嶼部については宇野円空の『マライシアに於ける稲米儀礼』（1940）が詳細なデータである。大陸部ではIzickowitzのラメット族のモノグラフ（1951）には、播種は霊を新たにする行為であり、「安全に戻って来い、行きて戻れ」という同じモチーフの呪文が多く、の儀礼で繰り返される。

同様の呪文は雲南にもあることを雲南民族

博物館の尹紹亭から教えられた。西双版纳の勐臘県、ラオスとの国境に近い海拔 1,300 m 程の山地に竜帕寨という基諾族の村があり、尹はこの焼畑農耕を詳しく調査している。ここでは陸稲を収穫する時に「さあ帰ろう、帰ろう、米倉へ帰ろう」と叫ぶという。基諾族はチベット・ビルマ語族だが、この習俗は稲作を行う他の氏、羌、百濮、百越、苗、瑤、壮侗語族にも広く見られるという。稲魂信仰が共通にあり、稲魂迎えの儀礼の際、花とローソク、赤糸を畑で供え、「村へ帰ろう、家へ帰ろう」と呼びかける。ラフ族の場合だと、稲魂が道に迷わないように、辻々に糸を目印として置いたり、米粒を道に落として行くという。これも東南アジアによく見られる習俗である。

雲南から東南アジア全域の稲作圏、そして更にメラネシアのイモ作圏に類似のモチーフをもつ農耕儀礼が存在することは大変興味深いことだ。しかも同様のモチーフは、フレイザーによれば、古代エジプトに、ギリシャに、フェニキアや西アジアにも分布していたとされる。彼はこうも言う。「古代エジプトの農民は、たとえ穀物を刈り取って貯蔵するにあたって密かな喜びを感じたとしても、この自然の感情を深い悲嘆の様子で包み隠してしまわねばならなかった。何故かというに、彼は穀物神の身を鎌でもって切断し、それを打穀場で家畜の爪にかけて粉々に砕いてしまったのではなかったろうか。穀物を刈るエジプト人が最初の一束に向かって胸うち嘆き、同時にイーシスに呼びかけるのが古代の習慣であったと言われている。この神への呼びかけはマネーロスという感傷的な詠歌の形をとったらしい。(中略)マネーロスという名は、死んだ神への悲嘆のうちにしばしば見えるところの『汝の家に来たれ』を意味する言葉から出たものと見られるのである」。ここに描かれた情景は、稲の収穫にあたってトバ

ダ族の女先導者が、収穫を始めた場所、「稲が傷を負う場所」に供物を置き、嘆きの帽子を深くかぶって、収穫の喜びを隠し、死者同様に振る舞わねばならない情景に何とよく似ていることだろう。

そしてまた、トロブリアンドのイモ生育儀礼で唱えられる「帰って来い、帰って来い、帰って来い」という呪文はイーシスとネプティスが発した嘆きの言葉、「汝の家に来たれ、汝の家に来たれ、汝を愛する妹に來たれ、汝の妻に來たれ」という呪文をほうふつとさせるし、雲南や東南アジアで稲魂に呼びかける「帰り来たれ」という呪文と相通ずる。もう一点挙げると、トロブリアンドで、畑開きの際に唱えられる最も重要な呪文は先祖の名をいくつも挙げた後、「道を示せ、道を示せ、道を示せ、地下へ、道を示せ」という文句の繰り返しである。これは雲南や東南アジアで稲魂が迷って帰り道を見失わないように、斉圀から村までの道に印をつけておくという習俗とかかわっている印象を受ける。

要するにエジプト、中国西南部、東南アジア、メラネシアに一つの共通の想念、作物が死から蘇るという想念があり、それは生育、収穫儀礼の中に共通のモチーフをもたらしている。関わる作物は麦、米、イモと違うにも拘らず、農耕儀礼の根幹部分に共通の呪文があるのは実に面白い。この環赤道帯に文化交流圏があったことは疑いえない。その農耕儀礼や呪文が各地域で別個に発生したとするには根幹的部分が似すぎている。現時点では、私は、エジプトで発達した精妙な葬送儀礼が穀神伝説と結びついた形で環赤道帯に伝播したのだと考えている。伝播先で、しかし、作物はことなり、米栽培地域に入ると麦の穀神は稲魂に変形し、またイモ栽培地域では祖霊に置き換えられたのだろう。

トンガにはオシーリス神話に類似した神話

があり [Ledyard 1982], また、フィジーには祖先がエジプトから来たという伝説がある。トンガの話はこうだ。トンガの至高神 Tangaloa ' Eitumatupu'a がトンガの女 Ilaheva との間にもうけた息子 'Aho'eitu が天へ上がって父 ' Eitumatupu'a に会いに行った時、天界での 'Aho'eitu の兄弟達は 'Aho'eitu を人目につかない場所へ連れ出して殺し、身体をバラバラに千切って料理し、食ってしまった。頭だけは食わないで投げて捨てた。地上から来た息子が居なくなったことに気づいた神 ' Eitumatupu'a は天界の息子達が彼を食ったとすぐ気づき、木の椀に嘔吐させた。息子達は 'Aho'eitu の肉も血も、すべて吐きだした。投げ捨てられた頭も探し出した神はこれも木椀に入れ、水を注いだ。そして *nonufiafia* という木の葉を木椀に入れた。やがて 'Aho'eitu の肉体は固まり、神が椀の水を捨てて暫くすると 'Aho'eitu が蘇り、起きあがった。喜んだ神は天界の息子達を呼び、'Aho'eitu を Tonga の王にすると宣言する。犯した不正を恥じた天界の息子達は 'Aho'eitu に従って地上に降り、その家臣となった。地上に降りた 'Aho'eitu は最初の神王 Tu'i Tonga となった。これがトンガ王家の伝説である。'Aho'eitu の出生には、またトンガの主食であるヤム起源神話も結びついている。彼が生まれた時、子供の食料を心配して、神 ' Eitumatupu'a は妻に土地が砂か粘土か聞き、砂だと聞くと、菜園の為の一片の粘土とヤムイモを天から投げたという。殺され、刻まれ、蘇った 'Aho'eitu つまり Tu'i Tonga はまた冥界の神 Hikule'o の地上における変身でもある。そして毎年収穫祭 *inasi* を主宰する神でもある。ここには死して蘇った神が、冥界を司り、収穫祭を司るというオシーリス信仰における三つの主要要素がすべて揃っている。

フィジーのエジプト起源説はスヴァ

(Suva) の町の西 5 km にある Fiji Cultural Center の案内人の話で、民間伝承である。真偽の程は別にしても、その民間伝承は大きな壁画に描かれている。フィジーの最高神 Ndengei は永遠不滅の神であり、また蛇に変身する神である。その祖先はエジプトから南へ下り、タンガニーカからカヌーで出港して、インド洋、ジャワ海、トレス海峡を経てフィジーへ来た。初め神々は山で、Ndengei をリーダーとして暮らしていたが、神々が Ndengei のオウムを誤って殺したことから、怒った Ndengei が大洪水をおこして、神々は低地に逃れて人間となり、漁、耕作、土器作りなどに汗することなくしては生きられないようになったという話である。エジプト起源の証拠は何かと聞くと、絵物語の伝統があるという。これは証拠としては不足だが、他に、つい最近まで人々がいつも持ち歩いた木製の枕、それにこれも最近まで部族戦闘で使っていた硬木のクラブが古代エジプトに由来しているのだという。木製の枕はサドルカーン型の頭を置く部分と、その下に 2 本乃至 4 本の脚を作り出した形で、これはたしかに古代エジプトの遺物中に見るし、ケニアのナイロート系遊牧民は今でも、この木枕を持ち歩いている。木のクラブは、エジプトの王が敵を打ちすえる図に見るものに確かによく似ている。フィジー人のエジプト渡來說を述べた文献も今のところ、私は知らない。しかし、ベルウッドが批判的にはあるが伝承・系譜が歴史事実に近いことを述べている [1989: 403] ように大いに有り得ることだと思う。

2-2 イモ栽培の技術

キリウィナ島北端のカイボラ (Kaibola) で 1988 年 6 月にかいま見たイモ畑を述べておこう。隆起珊瑚礁の上にゆるい起伏の台地が広がっており、所々に繊維用のパンダナスが立っている。台地の上はイモ畑や休閒地が

まだらだが、全体として林はない。谷筋にのみ 20 m 程の中高木が小さな林を作る。イモ畑にマリノフスキーの写真に見る魔力あるプリズムのカムココラは見あたらないが、支柱用の低木や長い柱が、畑にも休閑地にも一杯立っている。しかし東南アジアの熱帯多雨林に開かれた焼畑と景観は全く違う。マリノフスキーの報告に耕地を開いたあと、小石や不要な根は掘り出すとあったように、イモ畑は常畑に近いものだ。畑の掃除の為の火入れは常畑で植え付け前に雑草を刈って焼くのと同様と考えた方がよい。

昨年 9 月中旬に植えたヤムイモの収穫を見

乍ら聞く。畑では支柱に巻き付いたヤムの葉が直径 2 m、高さ 3 ~ 4 m の円筒状に繁っている。掘っているイモは食用の小型のイモ *taytu* で、ツルは左巻きで鋭いトゲが一杯ある。ヤムイモ作りで最も重要なことは何かと聞くとタネイモだという。随分当たり前の答だが、イモ掘り作業を見ていて、その意味はよくわかった。ヤムイモの株は 10 ~ 15 個のイモをつけている。*taytu* は小型であるとはいっても大きなイモは 1 個で 3 kg 程の大きさがある。上土を掘棒(*dema*)で取り除いて株全体の大きさを見、その外まわりに掘り棒をさしこんで細根を切る。掘り棒は図 4 に示

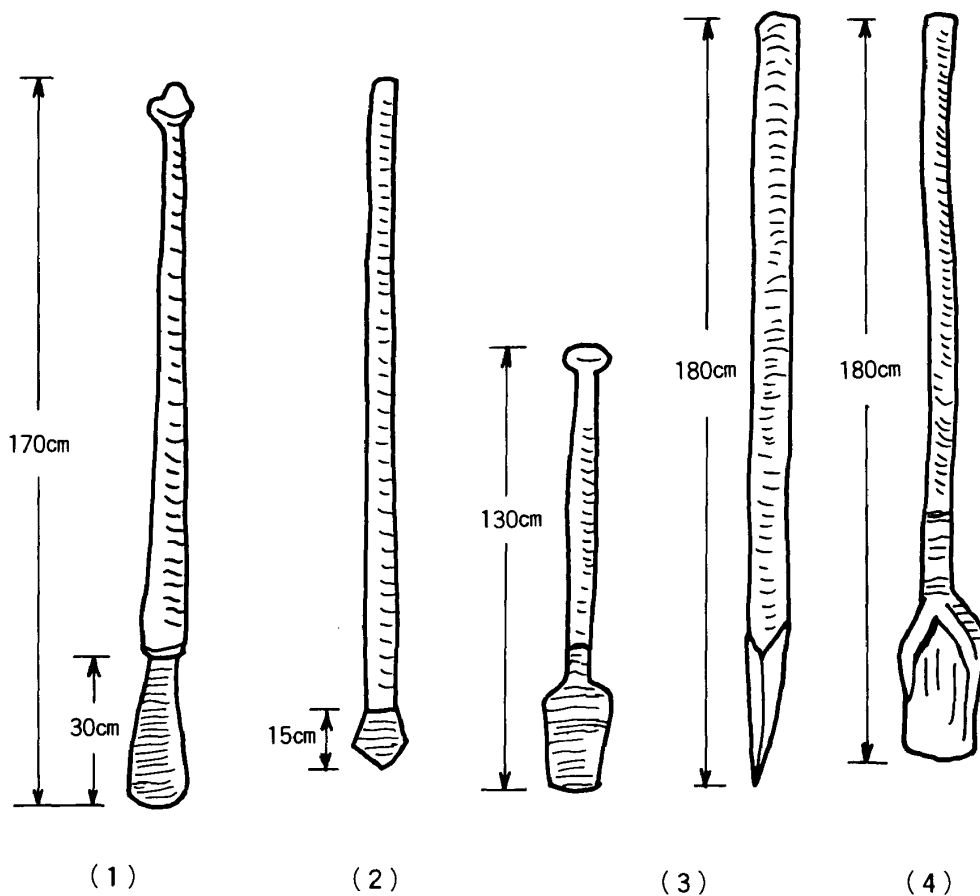


図 4 各種の掘棒

- (1) トロブリアン島
- (2) トンガタプー島
- (3) スンバ島、左は除草用 右は大塊耕起用
- (4) ニューカレドニアのシャベル (博物館展示品)

す形で、先端部に鉄のヘラが装着してある。細根を切るとイモ株の下に掘棒を差し込んで、ぐいとこぜり、同時に上端の茎をもって引き上げる。掘りあげたイモ株は野小屋の近くに運び、選別する。1株のイモの内、大きなイモの首の部分を丁寧にナイフで切る。1株から5～6個こうしたイモがとれる。これは食用である。残りの株には10 cm 程のイモがまだ5～6個ついている。この残りの株全体を1株のタネイモとして使う。重量で比べると収穫物の $\frac{1}{3}$ はタネイモに使うことになる。なるほどタネイモ作りが重要なわけである。

食用にするイモは付着土と表面のトゲをナイフで落とし、イモに磨きをかける。磨いたイモを野小屋にカゴで運び、大小2サイズにまとめる。そしてこれを丸い塚状に積み上げる。我々の訪れた畑では底面の直径が2.2 m、高さが1.5 mのイモ塚を積み上げた。大きいイモは外周部に、小さいイモは内部に、接線方向にイモを並べ、イモの層を作る。一層一層と積み上げていき、17層を積み上げた。相当な重量が最下層外周にかかり、崩壊の危険があるので、周囲に30 cm 幅で浅い溝を掘り、三重にイモを埋めこんで、横ずれを抑える。積み上げが終わると1 m ばかりの棒をイモ塚の下半分に20本程立てかけ、ロープで結束して飾る。磨きあげたイモを人間の背丈より高く積み上げたイモ塚は野小屋で1カ月間展示し、その後、村へ運ぶ。村は同心円状に2列の家並があり、内側はバリの米倉に似た校倉作りの立派なイモ倉である。その前に再びイモ塚を積み、展示する。但し野小屋のイモ塚とイモ倉前のイモ塚は意味が異なる。前者はイモ畑所有者の栽培努力を誇示するのだが、後者はイモ倉所有者が複数の係累から集めたイモを誇示する。

ヤムイモの植え方は掘棒を深く突き立てて深さ30～40 cm まで土をほぐし、次に掘棒

を斜めに差し込んで少し上へこじり、隙間を作る。野小屋の暗所に保管して置いて芽のでたタネイモ株を掘棒の刃の下にあてがい、掘棒をサッと引き抜く時に、その隙間へタネイモを滑り込ませる。ヤムイモは植え付ける時期が決まっているが、タロイモはいつでも植え付けられ、7、8カ月で収穫できる。ヤムイモと違って一斉に掘り上げることはせず、必要に応じて収穫する。食用にする場合、数本の茎を縄でしばり、その下に掘棒を差し込んで担いで村に帰る。植え付ける場合、葉を切り落とし、茎がオヤイモ球部に広がるあたりで生長点1、2層を茎につけて、球部を切り離す。球部は食用にし、茎は野小屋に1週間程置く。その間に切断面が乾き、生長点から短い芽が多数上向きに出る。これを植え苗として使う。掘棒を土に突き立て、直径50 cm、深さ30 cm 位の部分の土をほぐす。小石、木の根はヤムイモの場合同様とり除く。手で穴の土をかきだして、深さ20 cm 位に、上記の植え苗を植えて覆土する。2、3日で新芽が動きだし、地上に顔を出す。この萌芽を間引いて最終的に6～7株に仕立てる。

ヤムイモの生産量を粗く見積もると、我々の見た畑は60×100 m 程度で、タネイモが1,200株位という。1株平均6 kg として、ヘクター当たり11トンの収量である。ヤムイモの消費量は10人家族で1日6 kg というから、1人年間200 kg 強、10人家族の消費量は年間2トン強、生産量が11トンだから相当の余剰が得られるはずだが、トロブリアンド島には複雑な交換制度があって、村民全体の福祉を実現する為に個人の余剰蓄積を抑えるシステムになっている。交換システムを簡単にいうと、例えば畑の所有者はその収穫物をまず父親に、そして彼の姉妹にほとんど贈与してしまう。自分の食料は妻の父親と兄弟、それに自分の甥から贈与されたイモで充足することになる。父親は従って多数の勤勉

な息子を持っていれば、大きなイモ倉を満たすことができる。イモ塚誇示が二つの異なった場所で行われる理由はここにある。耕作者自身の功績は野小屋で展示し、その功績を集積しうる父親の威勢は村のイモ倉の前で展示するわけだ。要するに息子と自分の妻の親族が自分の為に働き、自分は父親と姉妹の家族の為に働く。但し、贈与に対しては必ずお返しをする。真珠母貝(*kina*)、アレカナッツ、豚、土製炉、ご馳走等で互いにお礼をし合う。それでも尚且つ、年月が経つと富と貧が明瞭になる。その不均一をならす為にヤムイモコンテストが3～4年に1回行われる。ヤムイモコンテストはまず誰か勸進元が1人必要である。彼は賞金を提供する。たまたま我々のインフォーマントをつとめてくれた男は翌年の勸進元になる予定であった。彼は500 キナの金額を用意するということだった。コンテストは参加者1人ずつヤムイモ収穫量(タネイモを除いたもの)を競う。勸進元は第1位に例えば100 キナ、2位に50 キナ、3位に25 キナという具合で第10位まで賞金を出す。他方賞金獲得者もまた、賞金に見合うお礼をヤムイモで勸進元に贈与する。ヤムイモコンテストは栽培技術向上に役立ち、また村全体の福祉にも役立つ。勸進元は出費の代わりに村人からの尊敬という形で功績を増す。このようにトロブリアンドのイモ栽培は儀礼と、生産技術と、社会的紐帯の強化が絡み合った形で今なお存在している。

2-3 イモ栽培は子育て

儀礼用の大きなヤムイモ作り、それに食料用 *taytu* 型のヤムイモ作り、その様子をニューギニア本島とトロブリアンド島で見た。いずれも、タネイモ選別に注意し、植え付け前に芽を出させておく。植え付けの際に行う念入りの儀礼は、祖霊に守られて立派な子供が生まれるのを祈るのと同じ意味があるように見える。ヤムイモの生長に重要な多数

の支柱を立てるが、単に支柱を並べることよりも、魔力を受信するプリズムを立て、その魔力が畑全体を包み込む配置を準備することが大事である。生育の各段階でも念入りの祭儀を行い、イモが無事に育つように祈る。そして収穫されたイモはきれいに飾り立てて人々に展示する。自分の育て上げた子供の成人式を祝う親の気持ちとまるで同じである。イモ作りは子育てである。

イモ栽培を他の作物栽培、例えば麦作と比べると、この特質は明瞭だ。乾燥農法の麦作だと牛に曳かせた犁で土を引っかき、麦を散播し、実ると鎌で刈る。それを牛に踏ませ、風選して、カメや袋に詰め込んで倉に貯蔵するか、害穴にバラで麦を蓄える。踏まれてバラバラにほぐされた麦ワラは家畜の餌として、蓄える。一粒一粒が小さいということもあるが、流れ作業による大量生産方式だ。人間の生活の為に如何にうまく自然を利用し支配しうるか、それを文化発展の尺度とする見方が内在する。他方植え穴に甘土を入れ、大事に保管して芽を出させたタネイモを1個1個植えてやり、支柱で繁茂を助け、イモを大事に掘り上げ、磨き立てて飾るイモ栽培は大量生産の思想とは程遠い。

ニューギニア本島の南側に鳥の脚のように突き出たフレデリック・ヘンドリック島のイモ栽培は子育てイモ栽培の様相を雄弁に示す[Serpenti 1977: 24-40]。それを簡単に引用しておこう。全面が平坦な湿地帯であるこの島では、掘棒一つで湿地に溝と畝を掘り分け、畝の上に浮き草と粘土を盛り上げた島畑を作る。その上に更に腐葉土で小塚を作り、イモの伸びる横穴を掘り、そこにしっかり根と芽のでたタネイモを横たえる。ヤムイモは湿りを嫌うので、人々は根が下に延びないように気を使う。どうするかと言うと、生育中に小塚を開いて、縦に伸びた根は横方向に矯正してやる。そして小塚と小塚の間に干し草

を置いて、根が伸びる空間を拡大する。草を盛りすぎるのもしかた危険である。分解熱で温度が上がりすぎるからである。そこで、イモの医者は草塚の中に手をさしこんで、適温かどうかを診る。高温にすぎると溝からすくった粘土を草塚によく混ぜ込む。もし温度が低すぎると水草を更に盛る。時々篩を通して黒い甘土を塚全体にふりかけてやる。こういう具合だから、イモの植え塚は水草、粘土、黒土の層が細かく重なり合っている。そして絶えず、根が下に向かわないで水平に伸びる手入れを怠らない。儀礼用の大きなヤムイモを作る場合は、時に、イモ全体を塚から抜き出し、脇芽を取り去って、1本の大きなヤムイモ作りをする。こうして、イモの形を整える。塊状や、沢山の凹みのある形や、蛇状に曲がりくねった形や、まっすぐ長い形に仕立て上げる。まことに子育て型イモ栽培であり、1本1本のイモを子供と同じように扱う。大量生産志向の麦栽培とは全く違う。

日本や、南中国にもこれと似た栽培思想はある。自然の木の形を好みのものに変えていく盆栽はそうだし、大きな木を移植する際に行う根まわしもそうだ。苗木や植木鉢の木を移植することはともかく、庭や森に生える大木を根まわしによって任意の場所へ移し変える技術はヨーロッパ人にとってたいへん珍しかったと見えて、明治期の日本を描写したモースの記録にもしばしばその記述がある。しかし、子育て型栽培思想の最大の表現型はなんと言っても稲の移植だろうと私は想像している。南中国、朝鮮、日本、東南アジアの稲栽培圏には元々イモ栽培が行われていて、子育て型栽培思想が確立していた。稲栽培は雑穀栽培の刺激を受けて多分長江流域で始まったと私は想定しているが、稲はイモ作りの随伴雑草だった可能性も考えられる。ヤムにしてもタロにしても、切片の植えつぎ、萌芽の移植、芽をつけた茎などの移植技術が行

われ、新しい穀物作物の稲に対しても移植技術が適用されたと考えられる。日本の稲栽培が初めから移植技術によって行われたとする見方は既に高谷が述べ [高谷 1986]、その原因を湿潤高温下で繁茂する雑草との競争に打ち勝つ為の生態的適応に求めている。私もこの見方は賛成だが、稲作以前の作物栽培もしくは半栽培としてイモ栽培を想定し、その移植技術を稲作が継承したと考えたいのである。継承した形は技術だが、もう一步想像を進めると、作物栽培は子育てであるという骨肉化した思想や文化を継承したと思われる。稲の移植栽培は大変な重労働である。腰を曲げて水田に1本1本苗を植える作業、これは水稻栽培の根幹であり、これなしには収穫は期待できない。インドネシアでは田植え初めに36株とか9株の苗をまず植えて、それを3叉の竹で囲んだ斉囲を作り、それを *mulai* と称して儀礼を行うが、この *mulai* は始まりの意味である。この習慣は極めて根強く、虫被い儀礼とか倉入り儀礼が全く消失してしまった農村でも、これだけは欠かさないのが普通である。田植えは稲作の一連の作業のムライ、始まりである。しかしその作業は重労働である上に、泥の上にはいつくばる形だから、例えば麦作の散播と比べると格好悪さでは有数である。ヨーロッパ人が水稻栽培に向ける批判的目も感嘆の眼差しも、その目はまず田植えに注がれる。今世紀の初めに中国、韓国、日本を旅行したアメリカの農業土木学者の記述は後者の例で、彼の感嘆はこの作業が4,000年も続いている歴史と、その中で無数の溜池、2,000年も存続している分水堰や水路、山腹を棚田に変えてしまうといった高度な技術が発達してきたこと、それにも拘らず、これらの営為が田植えという根幹技術を変えることには働かず、苗を安全に田植えするという一点に全ての技術を集約してしまうその伝統思想の強靱さに感嘆している

[King 1911: 97-117, 271-310]。麦作農民にとっては、田植えは驚異であり、謎なのである。田植えは結果的には生態的適応だが、田植えを選択した背後に、稲作以前の強固な文化伝統がなければならない。1本1本苗を植える作業は技術というよりも、その文化伝統の確認なのだと思う。その文化伝統は作物1個体ずつを子供として育てる慈しみの感情に根ざしており、更に広く自然界に対するアニミスティックな感情を基礎にしている。イモ栽培はアニミズムの充満した世界での農耕であり、アニミズム的思想を具象化した農耕文化を創り上げてきたと思っている。

3. ソロモンおよびトンガ

ニューギニアの東には南北に並んだ島々が幾筋かの弧状列島として現れる。最も内側にはニューカレドニアがあり、ニューヘブリデス海溝の東にソロモン・ヴァヌアツ弧、さらにフィジー島弧とトンガ、トンガ海溝の東にはサモア諸島といった具合である。ニューカレドニア、ソロモンまではメラネシアの文化要素が強い。外面に張り出しの多い壺だとか、ナマハゲ型のかぶりものとか、ミイラを作るといった文化要素である。フィジーもそうした要素は続くが、人間は相当ポリネシア的である。トンガに來ると、人々はモンゴロイド的容貌のポリネシア人が主体である。主食はどの地域もイモだが、ヨーロッパの侵入以来生業基盤や文化が大幅に変化してしまっている。例えばニューカレドニアだが、Barrauの農業調査報告[1958: 6-59]では、各種の掘棒でフレデリック・ヘンドリック島同様の島畑やニューギニア耕地の短冊型畝にヤムイモやタロイモを栽培し、また山地の斜面や谷間に水路灌漑を行なって畦で囲まれた灌漑タロ田(図5)を作ることによって有名だったのだが、全島を回って我々が発見したイモ畑は微々たるもので、菜園で小規模に植えられ

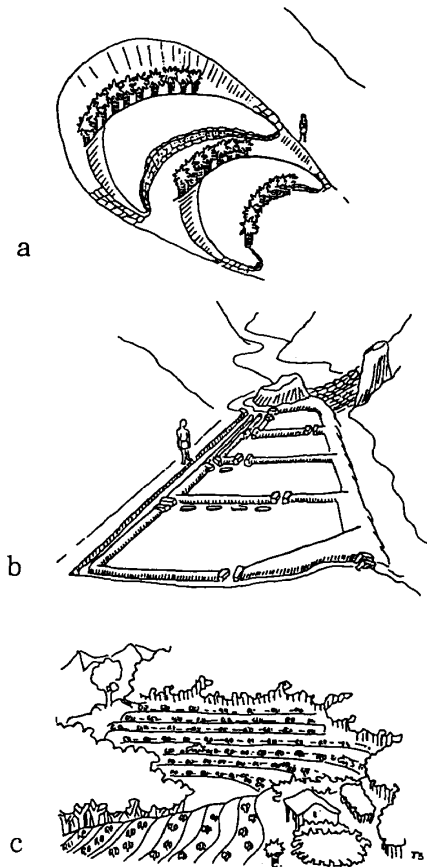


図5 Barrauの描いたニューカレドニアのイモ畑
a. 馬蹄形のヤムイモ畑
b. 谷間の灌漑タロイモ田
c. 斜面の灌漑タロイモ棚田
[Barrau 1958] より引用

るイモがほとんどだ。カナケ(Kanake)人の村には旅行者は入れないのでよけいそうした印象を受けるのかもしれない。

カナケ人を囲いこんだ村の回りには、緩傾斜谷頭部に周溝を巡らし、表面をゆるやかに盛り上げたイモ畑が少しばかりある。そこに taro du l'eau を植えるという。南岸の山地には至る所、かつての段畑の跡を見ることができる。土段もあるが石段組みの畦壁をもつ段畑もあり、時々 *Colocasia* や *Xanthosoma* が植わっていることもある。少々はだからイモ作りもあるようだが、長いフランスパンを抱えて歩くカナケ人をよく見かけるところから判断すると、イモ栽培はほとんど消失して

しまったように見える。ニッケル鉱山に雇われて稼ぐ賃金とフランス文化の押し着せをうけて完全にフランス植民地体制の中に抑え込まれている。イモ畑の代わりに目立つのは北岸一帯の斜面を占拠した *Melaleuca leucadendron* のヤブと、南岸の平地に広がる牧場、その中に聳えるフランス人植民者達の白亜の邸宅である。イモ栽培の調査は出来なかったが、東南アジアでは消えてしまった植民地の現実感覚を得るにはいいところである。

フィジーもヨーロッパ人との接触以来景観と人種構成が全く変わってしまった地域である。1804 年ヴァヌア・レヴ(Vanua Levu)島西部の乾燥地帯に白檀の木が豊富に自生していることが知られて以来多数のヨーロッパ人が押しかけ、10 年たらずの間に林を裸にしたことはよく知られている。更に 1840 年代にオーストラリアのクイーンズランドにサトウキビプランテーションが開かれると、南太平洋の島々から多くの原住民が奴隷として売られ、その交易は blackbirding として知られた。フィジー島にも 1860 年代、南北戦争のあおりでサトウキビプランテーションが欧米人によって開かれ、フィジーは blackbird の向かう土地となると同時に、乾燥地帯のヴァヌア・レヴ、ヴィティ・レヴ(Viti Levu)両島の西部はサトウキビプランテーションに変貌してしまった。Blackbirding が禁止されると、植民者達は代替労働力として多数のインド人を移住させ、現在、フィジーの人口中フィジー人の占める割合は 40% にすぎない。イモ栽培はあるけれども小規模な菜園での栽培として残る現状はニューカレドニアとさして変わらない。イモ栽培がまだかなり残っているソロモンとトンガの事例を報告しておこう。

我々が訪れたのはソロモン諸島の中で最も大きな島ガダルカナル島である。ガダルカナ

ル島は山地地形で年雨量が 2,000 mm 強の多雨気候の故に島は熱帯多雨林が覆う。しかし、沿岸低地部は 1870 年代に始まる欧米人によるココナッツプランテーションのためにココヤシ園が広い。ソロモンの最大輸出品はマグロなどの魚類、次が熱帯多雨林の丸太輸出で、この両者共日本が最大のバイヤーである。次がコブラやヤシ油で、金額的にはココヤシ産物はマイナー商品であるが、島民の生産するコブラがプランテーションのコブラ生産量と匹敵する程度に多いので、島民にとってもココヤシ園は大きな意味を持っている。ココヤシ栽培が広がる前の脂質食品はカナリウム(*Canarium*)属のナッツ、いわゆるカンランだった。ガダルカナル島ではカンランの実を食う習慣は儀礼食の中で残っている。果実を石で叩き割って種子を取り出し、縦長の細いくりぬき臼(*koba* という)に入れ、杵でついて、バナナ、焼いたタロ、キャッサバとつきまぜる。一種のプディングになる。カンランの種子を炉の上に置き燻製にすると長期保存が可能で、そういう古い種子は油が濃縮して旨いという。カンランとイモのプディング、それに豚肉のムーモ料理は焼畑の伐開を手伝ってくれた村人にご馳走として出す。Barrau はカンランの実以外にも各種のナッツ類、例えば *Inocarpus edulis* (タイヘイヨウグルミ)、*Terminalia cattapa* (モモタマナ)、*Aleurites moluccana* (ククイナット)などのナッツ類がメラネシアで大量に食べられることを報告している。ニューギニア耕地には脂質食物用のパンダヌスが栽培されることを述べたが、こうしたことから見ると、イモ主体の食事にとって脂質作物が重要な作物であることが判る。豚肉がいつも豊富に食べられるわけではないらしい。吉田によるとニューギニア高地と北部沿岸で、おべっかと脂肪という言葉は同義であり、これは最も価値のある食物は脂肪であることに由来す

るのだという。イモやサゴなど根菜食品はほとんど純粋なデンプン食品なので脂肪と蛋白を他の食品で供給することが必須となる。脂肪はパンダヌスの種子やナッツから、蛋白は魚から摂取する形が深い根をもっているようだ。漁法については後でふれたい。

3-1 ガダルカナル島の焼畑と漁

村は沿岸低地のココヤシ林の中に教会を中心に集まっているものが多い。隆起珊瑚礁の台地と低地は排水がよく湧水もあり、集落立地に適している。しかしミッションが入ってくるまでは村は散村形態であったという。珊瑚の奥や、そこから程近い丘の上に10戸程の小村が散在していた。ミッションが入ってきて、建設やプランテーションの労役、食料や生活用品購入などの為に現金をばらまき始めてから、人々はミッションのまわりに移住し、今では道沿いの村は教会を中心に形成されている。そうした村の一つ、島西端ランビ(Lambi)村で大洋漁業のキャンプを訪れた時、たまたま村への帰途にあった老人と知り合った。彼は元国会議員で、1977年の独立交渉の際にロンドンまで行った経験もある。彼の村コンビロコ(Kombiloko)はランビ湾に面した浅い湾入部にあり、前面には青い珊瑚が続き、伝統的な村の形を残している。教会はないが、村はやはりココヤシ園の中に埋もれている。

焼畑は50 m程の丘にある。道々、谷沿いにサゴヤシが幹を伸ばしている。ガダルカナル島でもサゴヤシデンプンを食料とする村もあるが、コンビロコ村では豚の餌にしたり、倒しておいてウロに生えたキノコや、サゴ虫を採集する。谷筋には野生のクワズイモ(*Alocasia*)も多い。ここでは *vila* という。*Alocasia* には食えるものと食えないものがある。食えないクワズイモは虫刺されの薬になる。茎の繊維をはがし、それをココヤシ殻に入れて海水を注ぎ、焼石を入れる。穴をあ

けたヤシ殻で蓋をすると、まもなく穴から蒸気が立ち昇る。その蒸気を虫刺され部にあてると良い。また野生のヤムがある。*bubu* という。これは苦いのでそのままでは食えないが、薄く切って流水でさらすと食える。

谷を抜けて開けた丘の急斜面に焼畑が点在する。焼畑は野豚よけの柵で囲まれている。その柵回りと入口の道沿いにショウガが沢山植えてある。これは呪術目的で、こうしておくで焼畑地に入る前に身体がショウガにふれて浄化される。また、呪いをかける時に呪いの言葉をショウガに話しかける。例えば、林を伐開するブルドーザーの力を奪ってしまえとショウガに話しかけると、数日後にはその効果が現れてブルドーザーが故障してしまうのだという。ショウガに呪術的力があるという信仰はセピック下流部の村でも見たが、メラネシアに限らず、稲作儀礼でも重要な呪術植物であり、インドネシアからマダガスカルまで広くこの信仰がある。

焼畑にはヤム、タロ、サツマイモ、キャッサバ、バナナ、サトウキビが植えられている。焼畑の伐開は10月頃にまず灌木と草を伐り、数日後に中高木を斧で伐り、乾くと火入れをする。焼け残りの枝を片づけて伐開作業は終わる。焼畑地は家族単位が基本だが、伐開作業には親戚を中心に協力する。他村の者が協力してもよい。また男女別の若衆宿があり、16歳になると子供達は親の家を出てそこで暮らす。尤も食事は親の家から持ち寄る。この子供達が伐開作業の共同労力として重要である。伐開時には儀礼と共食を行う。儀礼はやはり祖先霊への供養が主なものである。焼畑は丘の上に開くが、そこは昔の村があり、祖先霊が眠るところが多い。その眠りを妨げる恐れがあるので許しを乞うのだ。丘の上に居住したのは他島から来る首狩隊を避けるためだ。ランビ湾周辺は西のラッセル(Russell)島からの攻撃をしばしば受けた。

更に西のヴァングヌ(Vangunu)島と裾礁に抱かれたマロヴォ(Marovo)ラングーンの首狩族は有名だが、ランビ湾はその攻撃も受けたことがある。首狩族が乗り組む戦闘用カヌーは *gaun* と呼ばれ、ソロモン博物館で見ると両舷のそり上がった、丁度紅頭嶼ヤミ族のチヌリクランといわれる刳板組み合わせ構造船によく似ている[鹿野 1946:60 参照]。マロヴォの *gaun* は長さ 12 m 程で、それに 15 人以上が乗り組み、数隻の編隊でやってきたという。首狩隊は同時に女達をもつれ去る。こうした部族戦争があるので、襲撃を早く察知できるように丘の上に住んでいた。だからそこには戦闘で殺されたり、亡くなった祖先霊が沢山居る。焼畑伐開がこうした祖先霊を怒らせると作物は実らない。それで儀礼を行なって祖先霊の同意を得ることが必要である。その時には豚を供儀する。豚の血が流れて土にしみこむと祖先霊も伐開に同意し、実りも豊かになるという。50～100 年の古い林になると祖先霊とは別に、一種の精霊が住んでいる。その精霊に立ち退いてもらうために供儀がもう一度別に行われる。こうした儀礼を行なって伐開が許されるが、絶対伐開できないタブーの場所が 2 種ある。一つは首狩で取ってきた頭蓋骨を保管しておく首小屋のあった場所で、ここは部族の神に供儀を供え、祈る場所でもあった。もう一つは死者の死体を置いた場所。以前は死体を決まった場所に置き、肉が落ちると骨を集めて、村に作った石床の上に置く習慣であった。

伐開・整理が終わると、先の尖った、人の丈程の掘棒で植え穴を掘る。数回掘棒をやや斜めに突き立てスリバチ型に土をほぐし、最後の突き立てでグルッと円を描くように掘棒を回して穴を開ける。ここに作物を植え付ける。ヤムイモは大別するとトゲのないオヤイモ型とトゲのあるコイモ型とある。これらを 11-12 月に植える。ヤムイモの植え付けには

ツルをはわせる手筈が必要で、三つの方法が行われるが、どの方法にするかで伐開の方法も異なる。一つは全ての木を切り倒し、ヤムイモのツルは焼け残りの倒木や草ヤブの上を這わせる。最も手抜きをした方法である。少し入念な場合は、伐開時にかなりの木を残しておき、その根元にヤムイモを植える。立木は適当な高さで皮を輪状にむき、まきがらしをする。ヤムのツルは初め立木に巻き上がるが、そのうち木が倒れ、ツルは地表を這う。この方法の長所は木が腐って有機物が多量に供給されることである。最も念入りな方法は、伐開時にほとんどの木を伐り倒し、火入れ前に伐木を片づける。火入れの後、伐木を使って、高い支柱を立てる。これはトロブリアンド島の例に似ている。実りは最もよいがたいへん手間のかかる方法である。

ヤムイモの植え付け法は、大きなオヤイモ型の場合、1 個の芽出しタネイモを植える。コイモ型の場合は小さなタネイモは丸ごと、大きなタネイモは切片に切って植える。タロイモの場合は、生長点を 1-2 層つけて茎をイモから切り離し、この茎を植える。やはりオヤイモ型とコイモ型の区分があり、それぞれの中にまた多様な形質の品種がある。収穫は 6-9 月に堀棒で行う。コイモ型は *Xanthosoma* である。小川沿いには食えるミズイモがあるというのが詳細は判らない。サツマイモは直径 40 cm 程の小さな塚に 3-4 株を植え付ける。長い山刀で土を掘り、石や木の根などを取り除き、土をほぐして小塚を作る。サツマイモの植え付けは普通ヤムイモ 1 作の収穫跡に行う。6 カ月で収穫が始まるが、土がよければ 2～3 回植えつぎ、季節性が全くない。畑での作付期間を見るとヤムイモは一作毎に畑地を移す。従って収穫が終わる頃には次の畑を開く必要がある。しかし上記のサツマイモやバナナ、それにタロも 2-3 年は古い畑を利用することになる。焼畑地帯の景観は

ヤブと作付地で、休閑期間の短いいわゆる bush-fallow 型の景観である。

収穫物の料理法は、直接火で焼くこと、つまりローストが最も多い。しかし伐開協働者との共食や、祭宴の際には石蒸し料理法を行う。だから石蒸し炉は各家に備え付けられている。直径 50 cm 程の穴を掘り、まわりを丸石で縁どる。その中へ薪を積み上げ、相当量の小石を薪の上に置き、薪を燃やす。燃え尽きると焼けた炭の上に焼石が落ちる。この焼石を取り除き、炭の上にバナナやタロの葉を敷き、料理しようとするイモを置き、魚や豚肉とイモの包を置く。全体を葉で覆い、その上に焼石を積む。この炉を *umu* といい、料理法を *biti* という。ローストと石蒸し法以外に木椀で炊く方法、*popo* がある。木椀に皮をむき角切りにしたイモを入れ、水を注ぎ、中へ焼石を入れる。また竹飯ならぬ竹イモがある。イモを 2, 3 節の竹筒に入れ、水を加えて、炉に立てる。途中、竹筒を反転して竹が黒く焦げた頃になるとイモの調理は完了である。

焼畑にはこの他サトウキビが多い。しかしここではニューギニア高地とちがって茎をしぼり合わせることはせず、3～4 年もおくこともない。サトウキビは種類が多く、汁の多少、髓の硬さ、節間の長短、外皮の黄色、赤色、緑色などで多くの品種がある。サトウ作りは行わず、メラネシアで共通だが、皮を剥いて髓をしがむのみである。

次に漁について聞いたことを記しておこう。ランビ湾も南太平洋の島々の例にもれず、珊瑚礁が相当沖合まで続いている。漁の観点からするとこうした珊瑚礁の海は 3 地区に分けられる。リーフ、パッセージ、ブルーシーである。リーフは島を囲む珊瑚礁であり、干潮になるとバリアリーフと島で囲まれた浅い礁湖になる。満潮時で人の背丈位の水深である。この珊瑚礁には所々深い裂け目が

陸地近くまで切れ込み、珊瑚礁の垂直の崖が目の眩むような青い海底へ続いている。この裂け目をパッセージという。珊瑚礁が終わると途端に海はガクンと深くなり、濃青色の海となる。これがブルーシーである。住民の漁はほとんどが、リーフとパッセージで行われるが、カツオ釣りのようにブルーシーで行われるものもある。リーフの漁は次のようなものだ。

(1) 投げ糸。浜に立って 1 本針をつけた糸を投げて、ゆっくり引く。

(2) 囲い込み漁。*rabo* という植物の茎を叩きほぐした繊維で長いロープを作り、一端を浜で保持し、他端をもって男が半円状にロープを張る。ほぐれた繊維がシメナワの如く垂れて水中で音を出し、これに誘導されて魚は半円の中へ追い込まれる。ロープに沿って 2 ヒロ間隔で人が立ち、ロープを支える。ロープを真中で折り返して内側に最初より小さい半円形を作る。内側のロープを更に半分に折り返して更に小さい半円形を作る。半円形の弧の長さは $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{8}$, $\frac{1}{16}$ と短くなり、魚を追い込んで、モリやタモですくい取る。

(3) オトリ釜。*Malau* という植物の内皮繊維で釜を作り、その中へ *mamalau* という魚をオトリに入れてリーフに置く。仲間の *mamalau* が入る。

(4) 石積み誘導の刺網。パッセージの続きのリーフに石を積み通路を作り、その端に刺網を張っておく。潮が満ちると、パッセージを通ってリーフに上がってきた魚が通路に入り込み、刺網にかかる。

(5) 魚をリーフの石の間に追い込んで手づかみにする。

(6) 魚毒。*Kola* という植物の葉茎をつきもみ、その塊を袋に入れてリーフの魚だまりや岩の間にまく。この方法はパッセージに潜って岩の隙間でも行う。

(7) 竿釣り。貝殻で作った擬餌針をたらす。

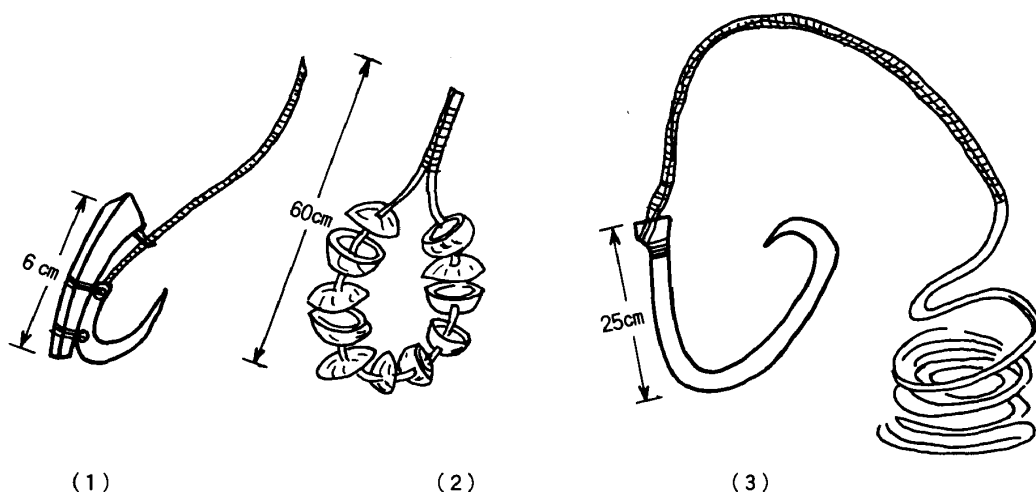


図6 カツオ漁用擬餌針とサメ釣針

- (1) ガダルカナル島、真珠母貝製台に亀甲製の針を固定する。
 (2) レンネル島のサメ呼び用ガラガラ。ココヤシ殻を枠につける。
 (3) マライタ島のサメ釣針。

- (8) 満潮時の流し針。褐色の羽毛をつけた擬餌針を糸につけて、カヌーでゆっくりと漕ぎ乍ら流す。糸の長さは50-60ヒロと長い。
 (9) 追い込みと刺網。1-2ヒロの網をパッセージに張り、カヌーに乗ってパッセージの内側へ魚を追い込む。
 (10) スペアガン。水中眼鏡をかけ、短いヤスを装着したスペアガンをもってパッセージに潜り、魚を打つ。単にヤスで刺す方法もある。

ブルーシーの漁は次のものがある。

- (11) カツオ漁。強い竹竿に *malau* 製のロープを結び、特別な針(図6)をつける。これは貝殻でゆるく湾曲した台を作り、亀甲で作ったもどりのない大針を糸で縛り付ける。カヌーの船底に竿を支える台を作っておき、水面を叩いたり、水をまき乍ら釣り上げた魚を手をふれずにカヌー内に落とし、連続的に竿を回して針を投げる。鰹の一本釣りと同じである。
 (12) 尻上げ漁。カヌーを櫂で漕いでゆっくりと進める。もう1人が尻を上げる。尻には

ロープをたらし、その端にくもの巣状に糸を張った枠をつけておく。尻の動きにつれて枠は水面を上下し乍ら進む。つられて魚が近寄りくもの巣網にひっかかると尻が落ちるので、魚がかかったと判る。

- (13) 擬餌針トローリング。羽毛をつけた貝製擬餌針を長い糸につけ、カヌーでゆっくりトローリングする。

ソロモン博物館にはマライタ島やレンネル島のサメ釣用の巨大釣針が展示してある(図6)。堅い木で作られた大きなu字型針に太くて長いロープが結ばれている。ソロモンでは今は行われていないが、昔はサメ漁が行われていたようだ。サメを呼ぶ為のガラガラも展示されている。トンガでは今もサメ漁を行う。二つ割りにしたココヤシ殻を多数輪に通したものだ。これを水中でガシャガシャと振ってサメを呼び、針に引っかかったサメとカヌー漁船の力競べの挙げ句、弱ったサメを引き寄せてモリや棍棒でとどめをさす。サメと人の関係は対立的な面のみではなく、サメを慣らして敵を攻撃させることも行われたという。ランビ湾にはサメ寄せの岩があり、呪

術師がここに立ち、豚を犠牲に供してサメを慣らしたという。海を舞台に部族戦争を行っていた地域にいかにも似つかわしい伝承だ。

サメを慣らす呪術師の超自然的力や、焼畑地を守りもするし、破壊もする祖先霊への恐れと崇拜などに象徴されるように、メラネシアに一般的なアニミズム、祖先霊崇拜がソロモンでは脈々と生きている。特にこの祖先霊、死霊への畏怖は人々の心にまだ現実に生きている。元国会議員の弟の話では死霊の住む島という信仰がある。一般的にはそうした島は *momoluna tidau* と呼ばれ、ランビ湾周辺ではマラパ(Malapa)島がそれに当たる。その島へ渡る死霊が海上を歩く足音を誰でも聞くことができるという。マラパ島には1人の老人が居て、死霊たちの世話をする。この老人に頼んである秘薬をもらい、それを服用すると死者と話ができる。同時にショウガをかむと死者に対面も可能である。死者との対面を終えて無事に死霊から解放してもらう為にまた別の秘薬を飲む。別に死の告知の木があり、その木の上に見える人は生きている。木の下を歩いていると見える人はその時、死に瀕している。またある鳥が窓から入って家の中を通り抜けるのは死者が出ることの告知、にわとりが時ならぬ時に鳴くのも死の告知だと言う。

死者の島の信仰はマリノフスキーがトロブリアン島でも記述している [マリノフスキー 1971: 129-138]。それによると死霊は死者の島トウマへ行き、そこで現世に似ているが、しゃべり、食べ、踊るのみという楽しい生活を送る。年老いると死霊は脱皮をする。そして黒々とした髪となめらかな無毛の皮膚をもつ若者になる。若返りの繰り返しに飽きると霊は胎児に再生する。トウマに洗水という井戸があり、その塩水で水浴すると若返る。繰り返して水浴するとどんどん若

返り、ついに幼児になり、流木、浮垢、葉、枝などに付着して海を漂う。若い女性たちが海辺で水浴をすると彼女等にとりついて妊娠させるので、女達は海辺で決して水浴しないと述べている。

こうしたアニミスティックな死生観、輪廻観、祖先崇拜の信仰はごく最近まで存在した。あるいは今も存在すると推定される部族戦争によって極めて現実味を帯びてこちらに伝わる。男達は農耕を基本的に女の仕事だと考え、男は戦士として祖先霊に守られて、女、子供を守り、村の領域を守り、祖先霊を守る。部族戦争でいつ死ぬかも判らないという現実が、超自然的な力や呪術、霊の輪廻と再生、死の告知の存在などを現実のものとして受けとめるアニミスティックな信仰を作り出しているように私は思う。

3-2 トンガタプー (Tongatapu) のイモ栽培

トンガ諸島は南太平洋の広大な海域を覆うポリネシアン・トライアングル(ハワイ諸島、イースター島、ニュージーランドを頂点とする三角形)の南西隅にあり環礁から成る島々だ。東側は深さ1万mを越すトンガ海溝が南北に走る。トンガ王国は紀元後950年頃と想定されるAho'eituの天孫降臨以来、ヨーロッパ人進出時代も独立を保ってきた数少ない王国である。環礁の島は3群に分けられ、その最南端の群の最大の島トンガタプー島に首都Nuku'alofaがある。清楚で開放的な小さな王宮はその海岸通りにあるが、19世紀半ばまで、王都は両腕を広げたような形の島の右腕中程、Mu'aにあった。ここには王達の墓、ランギが30個近くもある。トンガの王墓は古代エジプトのジョーセル王のもの程大きくはないが、段台ピラミッドであることは同じだ。似たような段台ピラミッドはタヒチ島やオアフ島、マーケサス島、クック諸島、ミクロネシアのヤップ島にもあるとい

う。ポリネシアやミクロネシア地域に段台ピラミッドがたくさんあることは面白い。

トンガタプーの産業はココナッツプランテーションで、最大の輸出物はココヤシ油だから、平坦な島全体がココヤシ園だ。土地は基本的に国王のもので、島民はその土地を借りる形でココヤシを栽培して、イモやバナナを栽培する。主食はイモなので島中に各種のイモが栽培されている。イモの勉強をするにはトンガを訪れるのがいい。まず初めにトンガの農林水産省の専門家を訪れて学んだイモの種類、栽培法を記録し、次に農民の行う栽培法を補足しておく。

トンガのイモは次の3種が重要である。ヤムイモ、タロイモ、カペ（クワズイモ）である。ヤムイモ（*uvi* と総称する）の主要な構成種は第1に *Dioscorea alata*（ダイジョ）で、蔓の断面は四角く、翼が張り出し、右巻きでトゲがない。イモの形は様々だが、オヤイモが真っ直ぐ地中に長く伸びるもの、オヤイモが丸く大きく成長するもの、コイモをたくさんつけるものと三群別される。次が *D. esculenta*（トゲイモ、トゲドコロ）で、蔓の断面は丸く、左巻きでトゲがある。多数の芽が伸びて、その先に長円のコイモをつける。この2者に比べると量は減るが *D. nummularia* がある。蔓断面は丸く、右巻きでトゲがある。イモは長円地下深くにつく。今は栽培しなくなったが、以前は栽培していたものに *D. pentaphylla*（アケビドコロ）がある。蔓断面は丸く、左巻き、トゲがある。イモは長円形である。他に野生のヤムイモ *D. bulbifera*（カシュウイモ）がある。蔓断面は円形、左巻きでトゲはない。イモは丸い。

タロイモの伝統的なものは *Colocasia esculenta*（サトイモ）で、これは *taro tonga* といわれる。オヤイモ型の大きなイモが1個肥大するものが主である。*taro tonga* は千

魋に弱いので最近 *Xanthosoma*（アメリカサトイモ）が増加してきた。これは *taro fotona* といわれ、フツナ島からの伝来種と考えられている。オヤイモも肥大するが、オヤイモにコイモが沢山つく。品種が極めて多い。

カペ（*Alocasia macrorrhiza*, クワズイモ）はタロに似るが長い大きなイモが地上に突出する形で肥大し、イモの長さは80 cm程にも達する。以上が主要なイモの種類だが、他にキャッサバ、サツマイモも栽培される。しかし祭礼用作物としてヤムイモが最も重要で、*taro tonga* がこれに次ぐ。*taro fotona*, キャッサバ、カペは儀礼用には使わない。

次いでこれらの栽培法を聞く（図7参照）。ヤムイモを作期から区分するとイモが丸い晩生種と、イモが長い早生種がある。晩生種は6、7月に植え、翌年の4、5月に収穫、早生種は5、6月に植えて11～12月に掘る。*kahokaho* という中間種の栽培法は特異で、6、7月に植えると12月には長いイモが2本成育する。その上部のみ残して下部を収穫する。すると残った上部の生長点が刺激されて短い丸イモが更に多数つく。それを6、7月に全量収穫する。

タネイモは切片を植える場合と丸っぽ植える場合がある。大きなナガイモをタネイモに使う場合は切片に切ることが多い。切片の切り方に注意して頭の方にマークをつける。植える時は頭を下向きにして、穴の中心から少しずらした位置に切片をおく。長円形のコイモ型のヤムを植える時は芽が少し伸びたタネイモを水平よりやや下向き加減に穴の上に置く。どちらの場合も高さ20 cm程の塚を盛って覆土する。植え穴は収穫するイモのサイズに従って長短があり、ヘラ付き鉄棒で直径30 cm乃至40 cmの真っ直ぐな穴を掘り、そこに甘土を入れる方法である。

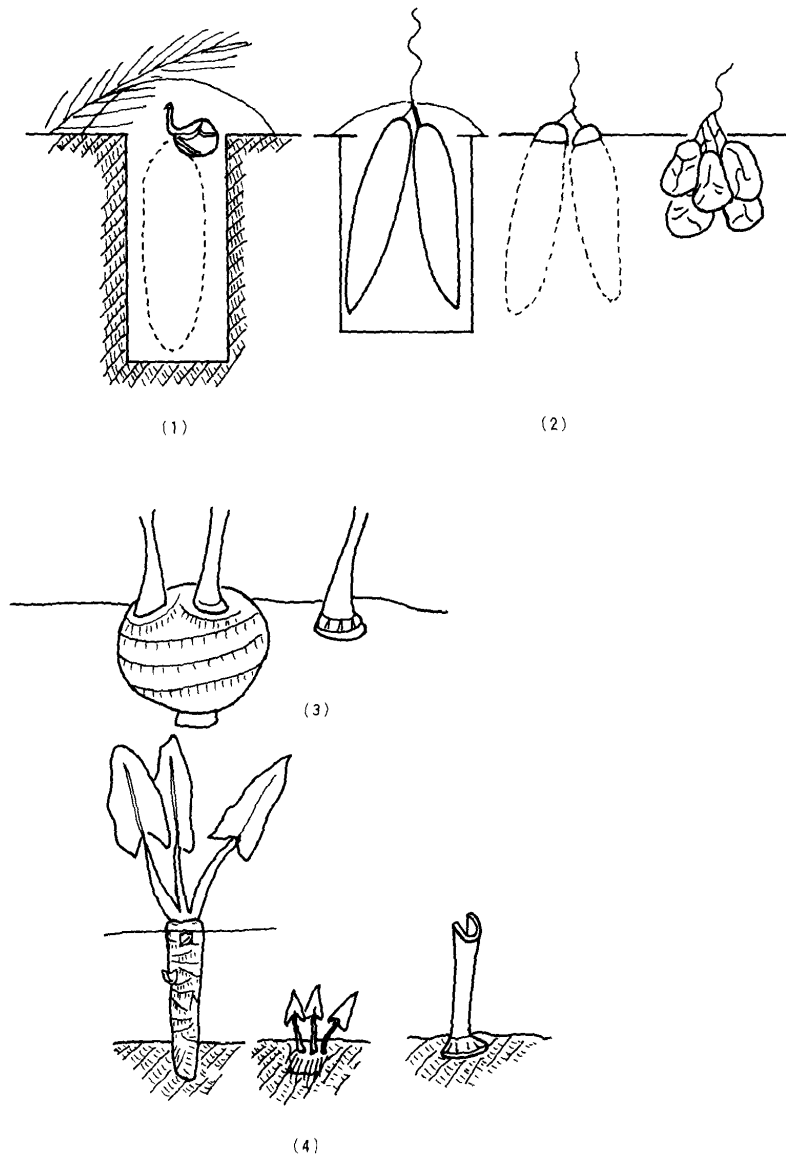


図7 トンガタプー島のイモ植え付け法

- (1) 早生種ヤムイモの植え付け
- (2) カホカホ種の2回収穫法
- (3) タロ・トンガのhead-set法
- (4) カベの収穫後地下部萌芽の株分けとhead-set法

Taro tonga の植え方は head-set 法と株分け法がある。head-set というのは他の事例でも述べたが、オヤイモの上部でイモを切り離した茎を、葉を切り捨てて植える方法である。株分け法は、オヤイモから分出した萌

芽を切り離して植え苗とする。*Taro fotona* はオヤイモも肥大するが、それにコイモが5-6個つく。その植え方はオヤイモの head-set 法、オヤイモを10個程に切った切片法、コイモからでた萌芽の株分け法と3種類があ

る。タロイモは作季は固定していないが、雨季の中心は10-12月なので、8、9月に植え、雨季に成育させるのがよい。

カベの栽培法も面白い。カベが十分成育すると地上部の長さが60 cm、地下部が20～30 cmになる。収穫時、地上部のみを収穫し、地下部は残しておく。地下部には多くの生長点があり、やがて萌芽が伸びてカベの小個体が多数成育する。この子株を植える。これも一種の株分け法だろう。他の方法はタロ同様の head-set 法が行われる。この場合は地下部も残さず全体を掘り上げて、イモ上部を少しつけた茎を植える。別の方法は切片法だ。この場合は植え穴マーク用にココヤシの葉を切って立てる。いずれにしてもカベの植え穴は浅いもので良い。植え付け時期は晩生ヤムと同じ6、7月だが、収穫まで1年から1年半を要する。

トンガタプーにはないが他の環礁に *Cyrtosperma* があり、また野生カベもある。ケレフェシア (Kelelesia) 島では飢饉の際に野生カベを食う。またエウア (Eua) 島にはミズイモがある。

さてイモ栽培の畑だが、我々は丁度ヤムイモ植え付け期の6月に訪れたので、植え付けの様子を見ることができた。島全体どこにも林はないので、林を伐開する焼畑ではない。しかし、かといって連作かというところでもない。やはり bush fallow system というべき畑作である。端的に言うとココヤシ園脇の高い荒草地の草を刈って焼き、畑にする。表層の土は堅くて大きい塊なので、これは鉄の掘棒を亀裂に差し込んでこじりおこす。そしてその下の石灰岩質の土に深い穴をうがつ。先端に小さなヘラのついた鉄の掘棒を垂直に打ち下ろし、土と珊瑚礫を掘り出す。もちろん全面耕起は行わない。植穴だけを垂直にうがつのである。土は表層に黒いレンジナ土があるが、これは浅く、下部はテラロッサ

の赤土である。植穴には黒い表土を詰め、その上にヤムイモを置き、黒土を盛る。そして塚の上に柴を置く。支柱代わりだ。今までの事例と違って支柱はほとんど立てない。風が強くて倒れるからである。蔓はだから柴や草の上を這う。1年目の畑は6、7月頃ヤムイモを主に植える。同時にカベ、バナナ、キャッサバを植え、少し遅れてタロイモを植える。2年目の4、5月の乾季にヤムを収穫するが、タロはもう一度植え継ぐし、カベの収穫は2年目の末までかかる。バナナは5年間収穫を続ける。こうした状況だから休閑の始点が明瞭でない。しかしヤムイモを中心にと考えると1作後は休閑期ということになる。休閑期間はしかし本来短く、30年程前でも5年位だった。今は人口増加の為に短期化し、連作もあるという。珊瑚礁の土は栄養的には肥えているので連作が可能なのだ。

ヤムイモ作りで何がいちばん重要かという質問を我々はトンガタプーで有名な篤農家にぶつけてみた。彼は1987年の農業祭に210 cmのヤムイモを出品した、その年の優勝者である。ここでも答は同じで、大きいタネイモを作ることだと言う。210 cmのヤムを得た際のタネイモは長さが90 cmだったという。黒土を詰めた植え穴にタネイモを少し斜めに植える。1986年9月に植え1987年9月に収穫した。肥料、堆肥、水やり一切していない。ただ植え付け時期を普通より2カ月程遅くずらしている。また彼は三又の支柱を立てるといふ。彼のヤムイモ倉を見ると、10 m×4 mの粗末な小屋に大量のヤムイモが積まれている。ヤムイモには葉腋に花が咲いて大きなムカゴが生ずることがある。タネイモとしてはムカゴが最上だという。

植え付け期間中、農作業を見学して歩く勤勉な旅行者は昼食の心配がない。昼近くになると、あちこちの畑で *umu* 料理の準備が始まる。土地の管理人が植え穴掘り、植え付け

作業に参加した人々に *umu* 料理を提供し、我々もその御相伴にあずかれるからである。焼石炉にタロの葉の包みを沢山置く。包みの中身は、ヤムイモ、タロイモ、料理用バナナ、ココナッツミルクをかけた魚や豚肉などである。鍋でココナッツミルク入りの魚スープも用意する。熱い内はどれも旨いが、豚肉料理を食うと、後で口から胃袋まで脂でベトベトして大変気持ちが悪い。

土地は基本的に国王の所有物であることは述べた。国王は土地を貴族達に分配し、貴族達は更に臣下に分封するという具合で、末端はどうなっているのかよく判らないが、土地の分封関係で国民全てが国王につながっている。収穫時には臣下は収穫物を寄進する。その時使われる重要なイモが例の長いヤムイモである。丸いヤムイモやタロ、キャッサバなども塚状に積み上げて寄進する。貴族は更にこれらの中から選ばれた立派な品物を国王に寄進する。トロブリアンドのイモ積み展示と同様の意味合いだ。トロブリアンドのオマラカワの最高首長とトンガの国王は極めてよく似た社会的結合関係の頂点にいる。ただ、トロブリアンドでは最高首長の統合力はパプア・ニューギニアという大きな国家成立の中で弱まっているかに見えるが、トンガ国王のそれは小さな独立国を保つことによって相当安定しているかに見える。

トンガの伝統的な家 *fale* は隅丸方形乃至長楕円形だ。砂と粘土で 20 cm ばかり張り床をし、低い敷居を跨いで入る。屋根はくりぬきカヌーの船殻に似たカーヴを描く。要するにカヌーを伏せた形をしている。古いものは屋根をニッパアタップやココヤシの葉で葺き、壁もヤシやパンダンのマットだが、最近のものは板張りやスレートも使う。しかし、形は変わらない。時にはダブルカヌー（双胴船）のように長楕円の家を二つ平行に並べて、間を屋根つき通路で結ぶ形もある。航海

民の習性が家の形に明瞭に反映されている。こうした家は緑豊かな生け垣に囲まれ、庭では女達がタバ布作りをしている。これは女達の重要な仕事だ。町でも村でも朝早くからタバ叩きの音が響く。タバ布の材料は生け垣に植えているカジノキ (*Brussonetia papyrifera*) である。カジノキは放っておくと割合高い木になるが、タバ布作りの為に絶えず萌芽更新をさせるので、直径 3 cm 高さ 2.5 m 程の密な生け垣を作る。これを切り、ナイフで縦に少し切れ目を入れ、皮をクルッと剥く。芯は薪にする。皮は 2 層からなり、ナイフをその間に差し込んで最外皮をはがし、柔組織の内皮を使う。幅 5 cm、長さ 180 cm の内皮がこれで用意される。これを暫く水に浸してから叩き台の上におく。叩き台は長さ 2 m の丸太で、両端にココヤシ殻と細い丸太を支点として置く。琴の共鳴板を叩くのに似てよく響く。叩き台の上に置いた内皮をビーターで叩く。ビーターは長さ 40 cm ばかりの堅い木製で、表面に波型溝が刻まれている。これで内皮を叩くうちに幅が 3 倍に伸びる。すると縦に二つ折りにし、15 cm × 90 cm 程の帯状にしたものを更に叩きのばし、畳み、叩きを繰り返して結局、25 cm × 120 cm の樹皮布を仕上げる。これがタバ布の単位になるが、もっと幅広のものを作るには、苦キャッサバの糊を両端に塗り、重ね合わせ部を叩く。タバ布で作ったスカートやシャツを着用し、葬祭時には更にパンダンの葉で織ったマットのようなオビを巻くのが正装である。

海に囲まれた珊瑚礁だから漁業は重要な生業だし、海産物は重要な食料である。市場には多種の魚や貝と並んでクラゲも売られている。トンガタブーの王立水産研究所で聞いた伝統的漁法を記して置こう。ここでもリーフでの漁が重要である。

(1) 蛸釣り漁。リーフの鋭い珊瑚で足を切ら

ないようにドーナツ状のワラジを履き、歩きながら蛸を誘い出す為に水中でおとり棒を振る。おとり棒の先端にはネズミを象徴する細工物を固定する。これは珊瑚石を砲弾型に切り、上面に宝貝の殻を貼ったものである。ココヤシの葉も棒の所々に挿す。蛸はネズミと喧嘩仲にあり、ネズミが来たと思って出てきて、おとりの細工物に絡みつく。それを突き棒でとる。蛸は天日乾燥して料理する。

(2) 筌。簡単な木組の上に丸カゴ状の筌を作り、中に泥と魚肉を混ぜた餌を置く。

(3) 囲い込み漁。ココヤシの葉柄を打って長いロープを作る。所々にココヤシの葉を残しておく。これを大勢で輪状にひろげて、次第に輪を小さくしてゆく。最後は袋網に追い込む。ガダルカナルと同様の方法だが、これは南スラウェシでも行なっている。

(4) 刺し網。リーフに刺し網を張り、かかった魚を干潮時に手づかみする。

(5) ボラ漁。エリをリーフに設置する。誘導柵はココヤシの葉を横に並べ、支柱をあてがう。

(6) 亀のワナ漁。浜で産卵後海へ戻る海亀を一種の刺し網で捕らえる。ココヤシロープで目の粗い刺し網を作る。浮きと錘りをつけ、リーフに立てる。亀は亀甲を利用し、肉は食う。

ブルーシーの漁は次のものがある。

(7) カツオ漁。ガダルカナル島で述べたものと同様の針を真珠貝と亀甲で作し、一本釣りを行う。

(8) サメ漁。ココヤシ殻を輪につないだガラガラを作る。これもツロモンと同様である。これを水中でガシャガシャと振る。その時呪文を唱える。Hina という名前の伝説上の美人が居るが、Hina、この輪を通れと呼びかける。目には見えないがHinaが輪を通り、その後を追いかけて来たサメも輪を通る。ガ

ラガラ脇にはキングスノットに結んだロープのワナがある。一匹目のサメはそのまま通すが、二匹目はキングスノットを締め上げて捕獲し、カヌーの中へ引き入れて棍棒で叩く。

他に岩礁の孔の中にいるヤシガニを煙で燻し出す。また岩礁やリーフ縁のアワビおこしを行う。パッセージやリーフ崖の下では潜水してヤスで魚を突く。

これらの漁法の内、蛸釣り漁やカツオ漁用の漁具はポリネシアに特徴的なものである。これらの貝製擬餌針はラピタ文化の早い段階から現れていたと考えられている。ラピタ文化は後にふれるが、沈線、貝殻腹縁文、刺突文などで飾られた土器で特徴づけられ、前1500年から紀元0年頃まで続いたと考えられている。

話は変わるが、物質文化の観点からして忘れてならないのはメラネシア、ポリネシアに現地の酒がないことである。イモ、バナナ、サトウキビなど材料は豊富にあるにも拘らず伝統的な醸造技術が全くない。理由は私には全く判らない。人々は酒の代りに *kava* を飲む。*Kava* はポリネシアでの呼び名で、メラネシアではフィジーだと *yanggona* または *yagona* という。高さ1.5 m程の低木で、茎は丁度キャッサバのように節高である。この茎を2節位に切って土にさして植える。日陰で湿りすぎず、乾きすぎない場所が良い。3年経つと根を収穫する。10年までは収穫可能である。根は褐色でやはり細いキャッサバのようだ。これを掘り上げて水洗し、乾燥する。店ではこの根を束ねたものを売っている。飲む時はこの根を石の上か *besi* という鉄木製の木椀の上で叩いて粉碎し、水を加える。皮の薄い褐色と髓の白色が混じり、米のとき汁に色をつけたようなもので、少し汚らしい感じがする。フィジーでは客を迎える際や祭宴時の *kava* 作法が発達しており、床上

にアグラをかいて車座になり、まず主人や長老が相撲甚句に似た歌調子で挨拶を述べる。人々は合間に手拍子を入れる。他の人々も次々と相撲甚句を歌う。味はほとんどないが、これは narcotic 麻醉性飲料で、根を噛むと舌や唇がしびれる。だから *kava* の効果は酒と反対でメートルが上がるのではなく、メートルが下がる。麻醉成分含量は島によって異なり、ヴァヌアツの *kava* は強いという。ヴァヌアツには *nakosara* と言われる野生 *kava* が生えている。これを飲むと胃が痙攣するということだ。

酒代りのもう一つの嗜好品はキンマである。ビンロウヤシの実に石灰をつけてキンマの葉に包み、クチャクチャと噛み、赤黒い唾をペッと吐き出す。インドから東南アジアでよく見るが、ニューギニア高地からメラネシアにも広く分布する。ポリネシアでは見ない。ビンロウヤシの実は薄片に切って干す。これを石灰、更にタバコも混ぜて筒の中へ入れて棒でつく。トロブリアンドでは父親や祖父の骨でこのつき棒を作り、その骨のつき棒をペロと嘗めて、キンマを噛む。麻醉作用はないが、一種の清涼感がある。

4. イモ栽培——小結

4-1 排水・移植・短期休閑

イモ栽培技術を麦とか米といった他の作物と比べた時の系統的な特徴を整理してみよう。その整理の結果をキーワード的に並べると、小見出しにあげたように排水・移植・短期休閑だと思う。まず排水だが、イモ作は畑作が前提だ。ニューギニア高地のクック茶園遺跡は幹線排水路と畝間の小水路で区画された畑が少なくとも紀元前 4000 年には確立していたことを示す。その作物は出土していないが、現在の畑地が同様なデザインをとり、そこに主にサツマイモが、そしてタロイモも植えられていることを見ると、紀元前 4000

年の畑にイモ、多分タロイモが主に植えられていたと想像できるだろう。この排水路はクック茶園遺跡のように盆地の低地部にあるイモ畑に限らず、初めにも述べたように、相当の斜面でも作られている。それはイモの生育する空間を膨軟にする必要から自然に畝や塚を立てる習慣が生じ、畝や塚の間の溝が排水路として機能することになった。そして年雨量が 3,000 mm を越えるニューギニアの多雨気候の下では、こうした排水溝で雨水を速やかに排水することは植え塚が地表流で流失されることを防ぎ、また過湿を防ぐ点でも実質的な意味がある。主排水路が傾斜方向に平行に伸びていることはすぐ気がつくことだ。

興味深いのは排水路の所々が土塊で閉じられていることだ。これは降雨の少ないある期間には排水路を閉じて水を蓄え、畝間灌漑を行う為のものだ。同様の狙いをもつ畑は例えばジャワ島の高地部でも見られる。ソロの東、ラウ火山の中腹 1,400 m 位に段台ピラミッド型で有名なチャンディ・チェト寺院がある。この高さになると雨量は 3,000 mm を越え、周囲の畑はやはり深い排水路を傾斜方向に平行に掘っている(図 8 参照)。主排水路から翼のように左右に溝が伸び、溝と溝の間の高い畝に豆、バワンメラ、サツマイモなどを植える。この畑のデザインはニューギニア高地のイモ畑と同じだと思っている。付言すると、この寺院のガーディアン石像は縮れた毛髪と大きい鼻、厚い唇をもって表現され、ジャワの考古学を始めたオランダ人学者達によってポリネシアスタイルと呼ばれる種類に属する。

戦前ミズイモ水田で有名だったニューカレドニアでわずかに見た緩斜面のタロイモ畑は、前図の畝幅を広くした形で、畝表面は凸状に膨らまし、周りに周溝をめぐるして、馬蹄型の周溝墓といった外観をもつものがある。また畝壁に横長に石を積み、短冊型の畑

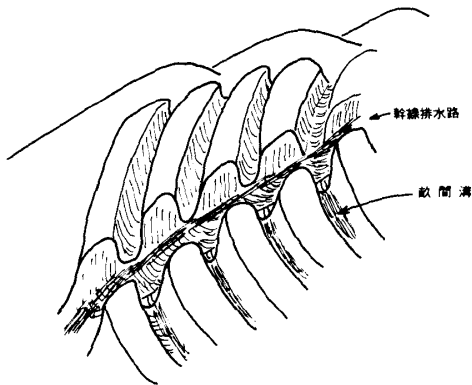


図8 ジャワ島ラウ山腹の畝畑
畝間溝の方が幹線排水路より深い。したがって畝間灌漑効果も生まれる。

に土を掘るものもあり、排水路の水流に対して畝の安定化を図っている。こうした状況からすると、ニューカレドニアのミズイモ田は乾季のきびしい西部に成立したものと考えた方がよさそうである。

タロイモは比較的、湿った土に許容度が高く、また季節性のない多雨気候に適応しているが、ヤムイモは過剰な水湿条件を嫌い、乾季の明瞭な気候を好む。従ってヤムイモの場合、排水を促進することは重要な意味がある。その点、季節的モンスーン気候でしかも排水の良い珊瑚礁島が広いポリネシア地域はヤムイモの栽培に適している。そこでは畝を立てる必要もない、植え穴を掘るだけでよい。

排水優先の慣行は、乾燥地帯で始まった穀作が灌漑を優先する慣行をもつことと全く逆で、全く異なる生態環境に胚胎したことを明瞭に示す。多湿な気候下に鬱蒼とした暗い森が繁茂する環境である。その意味では 3,000 mm を越える多湿気候のニューギニア高地がタロイモやカペを中心としたタロ系イモ栽培の中心を形成したのはよく判る。島でも 3,000 mm を越える多雨地帯、例えばヤップとか、ソロモンなどには *Cyrtosperma* のような湿地タロがある。ともかくこの環境では

林を開き、水が円滑に流れ去る準備さえすればよい。その為に、短冊型、丸塚型、周溝馬蹄畝型、珊瑚礁での深穴型、湿地での島畑型などの植え付け準備が行われる。この作業に必要な道具は、山刀と太い掘り棒のみである。掘棒は土掘り、土塊起こし、泥積み、植え穴掘りなどに使われるが、その目的の為に最小限の変形がおきる。それは尖った先端を少しばかり広げることだ。この変化は櫓型鋤のように 1 木から作り出すことでも、また扁平石斧を棒に装着することでも可能である。つまり尖頭の掘棒から櫓型鋤まで一連の変化系列のなかの道具とそれで掘る作業は、イモ栽培の指標農法と考えてよいだろう。オセアニアではイモ栽培以外はないからこの関係は極めてはっきりしている。しかし穀作が入ってきている地域ではそれ相当の変化を示すので判りにくい場合もある。例えばフィリピンのイフガオ族が使う *kahud* という櫓型鋤、これは泥をこね、畦ぬりに使うなど、今は主に水田用の道具だが、これはイモ栽培の時代の残存と考えて間違いなからう。人々は水田にミズイモを植えるし、水不足の棚田には短冊型畝を立ててサツマイモを作る。その時には櫓型鋤の肩を踏み、踏み鋤のように使う。東インドネシアのスンバで短期休閑畑をおこす時 *kahonga* という直径 10 cm、長さ 1.6 m 位の尖った掘棒を 1 人が 2 本ずつ持ち、4 人並んで大土塊を起こす。乾季におこしておく雨季の雨で土塊が砕ける。そこにハトムギ、トウモロコシを播き、またトゲドコロを植える。この掘棒と耕起法もイモ栽培の残存物と考えられる。マダガスカルは東岸山地と中心に水田が随分広い。その唯一の農具は *angady* といい、やはり櫓型鋤だ。水田の土をスンバと同様な方法で起こす。この場合もためらいなく、やはり畑のイモ作の遺存といえよう。掘棒でも北タイや雲南で使われる鳴子付きの長い竹竿の先端に小さなコテを付け

たものがある。これを斜めに構えて土をパッパッとはねのけながらオカボを播種する道具だ。これは系譜的に異なり、畑の穀作用農具だ。

次にイモ栽培では移植の技術が様々に発達する。イモを丸っぽで植える、切片で植えるという単純な操作以外に、*Colocasia* や *Alocasia* で見られる head-set 法、株分け法、トンガの *Dioscorea* のカホカオ品種で行う操作など、生長点の動き、生長の仕方をよく見据えた、収穫と植えつき技法だ。麦や雑穀だと、穀実の収穫は生長の休止であり、一年生の地上部は完全に枯れる。植物体が死んで残した種実を収穫する。イモの場合だとヤムイモはこれに少し似ていて、ツルは枯れ上がり、ヤムイモは乾燥期休眠に入り、人はそれを収穫する。しかしタロイモ類は相当異なる。オヤイモ型でも放置しておけば生長点から新しい個体が発生し、生長は半永久的に継承される。その生育相のある段階で子株を株分けして移植を行う。収穫も季節性がなく、ヤムイモのように一斉に収穫することはない。畑が倉そのものである。ビアク(Biak)島で聞いた話では焼畑にタロイモを一度植えて2、3年収穫を続け、その後休閑する。3、4年の休閑後ヤブを開くとタロイモが自然に芽を出すので、植えなくても収穫出来るという。古いイモは腐り、コイモがどんどん更新しているのだと。ただし、この方法は *bete* (*Colocasia*) ではダメで、*japan* あるいは *kladi* (多分 *Xanthosoma*) と *talas* あるいは *obir* (*Alocasia*) の場合に可能だそうだ。

要するにイモ栽培は作物の増殖、植え付け法として植物体の一部、あるいは若い植物体を移植するという技術を創り出す。そしてこれは、散播を行う麦、雑穀と全く違う。ところが稲は移植を行う。この点で稲はイモ栽培と麦・雑穀の中間にある。つまり、稲の移植はイモ地帯で始まった穀作技法ではなからう

か。これが私の言いたいことである。

最後の一点、イモ栽培は bush fallow (短期休閑) であるというのは既にいままで幾つもの例で触れた通りなので詳しくは繰り返さない。景観的にはむしろ短期休閑常畑という方が当たっている。焼く操作はあるけれども、木灰の施肥効果などは全く期待しておらず、火入れの最大の目的は草を焼くことだ。畑では畝を立て、溝を切り、また土中の小石を出し、木の根を抜く。そして常畑的に連作する。だから、本当に放棄された地域は完全な草原景観に変わってしまう。草の根網層が厚く発達して、木の種子が容易に根をおろせないと思われる。こうなると焼畑対象地から外されて、放置するのみだ。穀作地帯の焼畑だとこの人口密度で草原化することはない。イモ作が常畑的耕作法をとることと草原化が関係づけられよう。

4-2 土器の問題

我々が訪れたメラネシア、ポリネシアには、誰でもその違いが判る2種類の土器がある。その違いは現在のみならず、考古学的時代から引き続いている。石蒸し料理では土器であれ何であれ容器は何も要らない。それにも拘らず、過去に土器があったのは何故か。そこに興味がある。博物館で見ると2種類の土器はポリネシア型とかラピタ(*lapita*)土器といわれるものと、もう一つはメラネシア型とかマンガアシ(*mangaasi*)土器と言われる。これについて詳しくは例えばベルウッド[1989: 318-342]を見てもらえばよい。彼によるとその年代はラピタ土器が紀元前1500年から0年まで、マンガアシ土器が紀元前700年頃には始まったと考えられている。ラピタ土器の特徴は何よりもその文様にある。図9は私のスケッチだが、ヴァヌアツのマロ(Malo)島出土のものに見るように、細かな文様がヘラ沈線、竹管刺突、貝殻腹縁などで克明に描かれている。またトンガタプーの博



図9 ラピタ土器の文様と器形

左端はヴァヌアツのマロ島出土精製土器片で、貝殻腹縁文、竹管刺突文、沈線などが磨かれた器面に施されている。右の3例はトンガ国立文化センター展示の図をスケッチしたもの。釜、器台、壺、鉢など日常用土器の器形分化が見られる。

博物館のスケッチを見ると相当器形分化が進んでいる。ラピタ土器の文様はフィリピンのサフン、ベトナムのハロン文化との類似が注目されているが、時代的にラピタが1000年程古いので、結局その起源は専門家にもよく判らないようだが、中国東南部からベトナム、フィリピンへかけての地域からやって来た航海民がラピタ土器を持ってきたのだと信じられている。我々はフィジーのヴィティ・レブ島南岸のシンガトカ（Singatoka）で、砂丘裾から浜にかけて川口沿いに発掘された遺跡を見た。埋葬された骸骨の上にラピタ土器が置かれていたと言う。散乱した土器片は粗製で砂まじりの赤褐陶片が多い。それに沈線と貝殻腹縁文や布目文が見られた。この遺跡立地はいかにもポリネシアに植民した航海民にふさわしいものだ。今も作られている土器の中にもラピタ系の文様がある。例えばニューギニア北岸のマダン（Madang）郊外ヤボブ（Yabob）村の土器は赤褐薄手の土器を渦積法で作る。つまり粘土コイルを巻き上げ、その後 paddle-anvil で器形を仕上げ

る。その表面にラピタ文様を入れる。

面白いことに、ラピタ土器は紀元前後を境に作られなくなる。この間の事情は次のように想像できる。中国東南部を出発した航海者達はもちろん穀作、多分稲作を知っていた。そこでは土器技術も発達していた。メラネシア、ポリネシアへ入った後も、穀作を多少は行い、ラピタ土器を作り続けた。尤もオセアニア地域で米の遺物は出土していない。現地には当然イモ栽培が行われ、サゴの利用もあっただろう。ラピタ人はやがてイモ栽培に同化し、そして焼く、石蒸し、竹筒利用などで土器が不要になり土器文化は紀元前後に消失してしまった。

他方、マンガアシ土器はラピタ土器と全く異なる。セピック川のエイボムの土器がその代表的なものだ。最も明白な特徴は口縁部の波状凸起、タコ模様や人面を大きな突起で創り出すこと、突帯貼りつけ、などで要するに極めて縄文的な土器だ。フィジーのヴィティ・レブ島シンガトカの土器（図10）の作成工程は、赤土に川砂を混ぜた粘土を厚い円

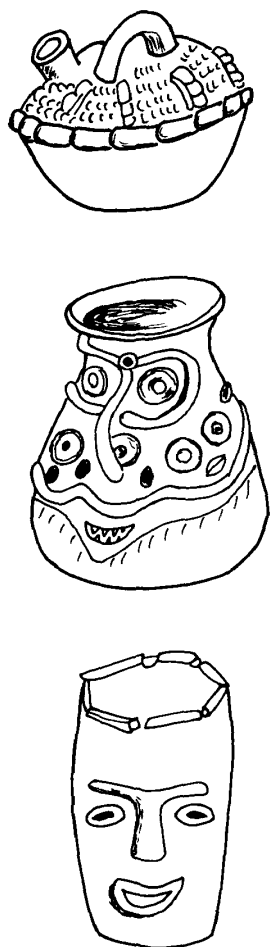


図10 マンガアシ土器

上段はフィジー、シンガトカの水差し。はりつけ凸帯に爪文をつけ、器面に貝殻腹縁文を刻む。中・下段はセピック川流域のエイボム産。中段はサゴデンプン貯蔵用。下段は水がめ。粘土ヒモをはりつけ、凸凹の多い器面に仕上げる。

盤状に作り、anvil石で真ん中を凹める。どんどん凹めて、paddleで叩き、碗型に成形する。同様のものをもう一つ作り、結合する。結合部分に突帯を貼りつけ、少しずつ回しながら爪先で刻み目を入れる。上碗にも突帯を縦に貼りつけ、その間に貝殻腹縁模様を入れる。その他の突起物は成形品をはりつける。これを3日天日で干し、1時間程野積みで焼いた後、ダマール樹脂を塗ると釉薬をかけた感じに仕上がる。大型器を作る場合は、台碗の上に粘土板を2枚継ぎ足し、上部と左

右に伸ばしていく。エイボムの陶器村の製品を見ると、こうしたマンガアシ土器の用途は圧倒的にサゴ貯蔵用のカメと水ガメ、他にコンロ、吊り蚊やり、それにフライパンもある。しかし器形分化は発達していない。イモの料理には、やはり土器をほとんど必要としないだろうし、もし必要が生じてこの地域では天然の代替品が多い。

ラピタとマンガアシの両土器文化の関係は専門家も結局判らないようだ。私は次のように想像している。大陸部やフィリピンから航海者がもたらしたラピタ土器が無土器文化だったメラネシアのイモ・サゴ栽培者達を刺激し、作られたのがマンガアシ土器だ。彼らはその伝統的美術様式、つまり成人祭儀に使うかぶりもの、精霊やヤムマスクなどの凹凸の多い模様をその器面に刻んだと思われる。

II 東インドネシアの農耕

東インドネシアからジャワ、スマトラ、スラウェシ、フィリピンなどマライシアの火山地帯には、かつてイモ栽培が広がっていたと推定される。そうした過去の文化の遺存は雑穀や稲の伝播の波を受けながらもまだ根強く続いている。例えば19世紀のジャワの中心ソロ周辺の村々の栽培作物に関する記述[Scheltema 1936]は、サトイモ、ヤマイモ、アメリカサトイモ、イモジソ (*Coleus toberosus*) などが重要な食料として含まれ、野生のコンニャク (*Amorphophalus*) やクワズイモも盛んに採集されていたことを示している。南スラウェシやヌサ・トゥンガラの島々で行われる太い掘棒による大土塊耕起法などもかつて卓越していたイモ栽培文化の名残をとどめている。ルソン中央山地の水田農耕に特徴的な櫓型鋤もこの掘棒の延長線上に位置づけられよう。イモ栽培立地として火山山麓が適しているのは、土が厚く、ポクポク

として軽過ぎず、重過ぎず、水はけがよい一方で水持ちもよい。養分的にも肥えているからで、こうした火山性土は様々な種類のイモに好適な培地を提供する。例えば、ジャワの火山地帯はオセアニア、アンデスと並ぶイモ農耕圏の一大中心であったと推定される。しかし、ジャワにドンソン文化を介して大陸部の雑穀、米などの耕作が入り、続いてインドから文化移入が生じて緩やかな火山山麓斜面は一転、恵まれた穀作畑に転換したと思われる。ジャワ碑文の研究報告によれば、灌漑水田や、犁耕が8、9世紀には登場していたと推定されるし、グジャラートやスリランカの移民が多数渡来して、畑や水田を急速に開拓したことがわかる [Sarkar 1971]。それにとまって精神文化も新たなファッションが次々に移入され、ヒンズー教、仏教、ジャイナ教の寺院が多数建設され、多分、ジャワに従来多数あったと推定される段台ピラミッド、ドルメン、ポリネシアスタイルの石像、長大石棺などヒンズー到来以前の生活景観は破壊されてしまったと思われる。他方、ヌサ・トゥンガラ島、スンバ、フローレス、サヴ (Savu)、チモールなどにはこうしたヒンズー以前のジャワの生活と景観が保存されているという強い印象を受ける。巨視的にみたヌサ・トゥンガラの文化地理的な位置は大陸の穀作文化とオセアニアのイモ作文化の漸移帯だといえよう。イモ栽培そのものは今や希少文化になっているとはいえ、農法や儀礼はイモ農耕の系統を脈々と示している。その他の生活景観、例えば死体化生神話や稲作のための人身供犠を象徴する伝承、円形墓域や、ドルメン、大石棺墓などと、イモ農耕の関係は様々だろう。あるものは農耕文化の違いを越えて伝播した文化思想に根ざすだろうし、あるものはイモ農耕圏へ渡来した穀作文化のインパクトを記念しているだろう。しかし、どちらにしても農法と生活景観の総体

をみると、それはイモ農耕圏と穀作圏の漸移地域の特徴を示すと私は考えている。本章ではこの観点からヌサ・トゥンガラ島の農耕と生活景観を述べてみよう。

1. サヴ島

1-1 雑穀栽培と儀礼

サヴ島はチモール島の西約 200 km に浮かぶ島で、三畳紀の石灰岩、砂岩からなる褶曲山地の周りに隆起珊瑚礁が付着している。こうした地質基盤と、乾季の乾燥が厳しく、年雨量が 1,000 mm 以下という寡雨気候のため、水田は少なく、隆起珊瑚礁や斜面に棚畑が広く、ソルガム、トウモロコシ、緑豆など畑作物が卓越する。また沿岸部にはパルミラヤシが多数植栽されており、その花梗から抽出する汁液 (*duwe*)、さらにそれを煮つめたシロップや砂糖が重要な原料である。島には農作業に関連した儀礼が多い。農作業は儀礼をもとに進行する。サヴ島西南部のペダロ (Pedarro) 村小学校校長ブンガ氏に聞いた話はこうだ。島の第1月は太陽暦の6-7月に当たり、収穫月の後の月で大した儀礼はない。第2月にはパルミラヤシの収穫に感謝する儀式が行われる。乾季に入って8月にはパルミラヤシの花梗からの汁液採集が始まっている。第3月には水を掘るという儀礼が行われる。第4月にはパルミラヤシの砂糖をたく釜を閉じる儀式が行われる。儀礼の文字通りの意味は、パルミラヤシの収穫を与えてくれる神に船でお帰りくださいとのことだ。第5月には畑をきれいに片づけて植え付け準備を行う。畑仕事の道具を火で祓浄する儀礼が行われる。水田の準備も始まる。また乾季に蓄えられたパルミラヤシの糖蜜を初めて食べる儀礼も行う。第6月には畑や水田の植え付けが始まる。ドラを叩いて村をまわり、家畜を放牧してはいけないことを触れまわる。そして種子運びの儀礼が行われる。島中央部の山

に祀堂（実際は石）があり、そこに Devi Buniai と呼ばれる女神がいる。その女神から緑豆、ソルガム、米の種子をもらい、村へ運ぶ。但し全ては想像上の種子であって、実物の種ではない。村では斉囲で女性の司祭が、*batu turun* と呼ばれる石の周りに植える。石をココヤシミルクで洗い、浄化してから植える。第7月には *nyale* 漁が行われる。*nyale* は環形動物多毛類で、身体の手半分が切れて海面に浮き上がり、生殖を行う。それを採集して、ヌルヌルしたゴカイのような食べ物として供する。ポリネシアにも多く、サモアではパロポといわれる。浮き上がる時期に季節性が著しいので、季節の指標になる（吉田集而の教示による）。第8月は畑の斉囲を掃除する。コプラを供えて緑豆、ソルガムなどの作物の生育儀礼を行う。第9月には *nyale* 漁の儀礼、緑豆干しなどの儀礼が行われる。内容は闘鶏が主体である。第10月は作物の収穫月で多くの儀礼がある。まず、火と、畑、家畜の繁栄を祖先に感謝する儀礼がある。14日に畑で収穫前の予祝儀礼を行う。その際、豚を供儀する。15日、ここではトロブリアン島とは反対で、娘が嫁ぎ先から収穫物を兄弟の家へ贈与する。次の日、緑豆で団子をつくり、キンマと一緒にカゴに入れて家の柱につるして、祖霊に供える。同じ16日に墓を掃除し、緑豆に砂糖を混ぜた団子をつくり、タバコ、とうもろこしの束と団子をカゴに入れて、家のお供え柱に吊す。そして豚を供儀し、その血を人や家畜にかけて祓浄する。その後、年終わりの儀礼としてソルガムと緑豆を混ぜた団子を食べる。22日に、村人は各自パルミラヤシの葉で *ketupat*（葉で編んだ三角錐の小カゴ）をつくる。*ketupat* の中には白檀の木一切れと生のソルガム、米、緑豆、トウモロコシをいれる。その夜、ナダ・コレライ(Nada Kolerai)部落の慣習家屋に全村人が集まり、ヤップ島の石

貨に似た大きな丸石の周りで歌い、踊る。伴奏楽器はヤシの実をくり抜いた胴に豚の皮を張った太鼓である。次の日、23日に丸石の上に全戸の *ketupat* を持ち寄り、*ketupat* を四角に積み上げて、*kowahale* という船をつくる。人々はこの船をナダ・コレライ部落から見おろせるウバイ(Ubai)の港まで *buroho*（地下から立ち昇る霊気）という唄を歌いながらひいていく。船は *ketupat* でつくられているのだから現実には軽いのだが、豊富な食物と、白檀が象徴する人々の魂を沢山載せているので、その重さによるめき、時には倒れながら、この船をひく。ウバイの港に着くと、小さなサンパンに、*kowahale* の船、子犬、ニワトリを乗せ、赤黒縞の布で全体を覆って、サンパンを海へ流す。この後、人々は高地、低地の2グループに分かれ、サトウキビとソルガムの茎を槍代わりにして戦闘を行う。時々現実には死者が出るが、それは神への供儀とされる。勝利をおさめた側がウバイ湾の近くの丸石の周りをさらにぐるぐると右に左にまわる。その後、再び高地のナダ・コレライ部落近くの広場へ集まり、一晚祭宴を行う。ニワトリを供儀し、農作物と家畜の起源に関する伝説を一晚中吟誦し続けるのだという。これで1年が終わる。

隆起珊瑚礁の上にはあちこちにシンクホールがあり、海へ続いている。そのシンクホールからヨシ船を海に流す儀礼は他の村でも盛んに行われる。そうした隆起珊瑚礁には常畑的短期休閑畑が広がっている。その畑作は次のようなものだ。ディエホ(Dieho)村のロワリア(Lowariya)部落での聞き取りである。乾季の終わりにソルガム、緑豆、トウモロコシ、などの刈株を引き抜き、積み上げて焼く。地上にしゃがみこんで櫓型鋤(*periku*) (図4参照)を地表に平行に繰り出して表土を削る。この後、亀裂の間に太い掘棒を差し込んで土塊を反転する。畑には

wowado turuma という斉囲がある。4 個の支点の上に小さな盆石を置いたものだが、この上にパルミラヤシの糖蜜を垂らし、ソルガム 3 粒とキンマを置く。雨がきて、土塊が柔らかくなり崩れ始めるが、その頃、鍬で土塊打ちをする。そして斉囲 wowado turuma の脇に木を立て、それにパルミラヤシの葉で織った皿を吊し、飯を供える。満月の夜にヤギを 1 頭供犠し、その血を wowado turuma の盆石に注ぎ、脇で肉を炊き、心臓肉三切れ、飯三盛を供える。畑の四隅にも、舌、心臓の肉をおき、この後、植え付ける。道具は kekuja (図 4 参照) という長さ 1.8 m くらいの掘棒で、下端には小さな鉄製のヘラがついている。これを斜めに構え、斜めに土をはねとばすように穴を掘る。植え付けは斉囲の周りから始める。一つの植穴に緑豆、ソルガム、トウモロコシを混播する。所々にダイジョ (ubi) も植える。このヤムイモは丸いコイモが多数つく品種で、まっすぐ深く地中へ伸びる品種ではない。草取りは緑豆が 20 cm 伸びた時に 1 回行う。櫛型鋤をやはり水平に繰り出して草を削る。約 2 カ月後に収穫が緑豆から始まるが、収穫始めの儀式を次のように行う。斉囲の盆石の下にコプラを 3 片ずつ 4 カ所に置き、さらに畑をぐるぐる回り、先に植え付け時の供物を置いた四隅にやはりコプラをおき、パルミラヤシの砂糖水を注ぐ。その次の日に畑の中から緑豆の収穫を始める。株ごと引き抜くのである。初めの収穫を wurikatu といい、斉囲脇から収穫された 3-4 株を束にして家の供物柱に吊す。ソルガムでも wurikatu の束をつくり、それも家に吊す。wurikatu 用のソルガムは小刀で穂を積むが、残りは手で折る。時には実を直接手でしごき取ることもある。

ソルガムの品種は 3 種に大別される。実が白い裸のもの、赤い皮付き、白い皮付きである。皮付きソルガムの脱稈は縦長の丸い木製

臼にいれ、杵でつく。開口部に杵穴を開けたムシロをかぶせて粒の飛散を防ぎ、両手で杵を持ち上げ、腰を折るようにして臼の中に杵を突き入れる。ソルガムは煮る。蒸し器は普通の食事には使わないが、祭礼時のソルガムは蒸し器で用意する。

水田は石灰岩の崖下で湧水を受ける谷底に少しある。丁度、沖縄の受水・走水の水田に似た立地である。地拵えは湛水した水田に 50 頭ほどの牛を追い込んで蹄耕を行う。1 回目はカヤツリグサが立っている水田を踏ませ、1 週間後に 2 回目の蹄耕を行う。植え始めに水田の四隅をまず植える。手移植を行い、植えた後、除草はいっさい行わない。収穫は小刀で穂摘みし、人間の足踏み脱穀を行う。収穫始めの際、飯に白檀の木片とショウガをまぜて炊き、共食する。粃はパルミラヤシの葉でつくったカゴにいれて高床家の床上に置く。その他注意をひく点は、モチ米がないこと、伝統種は円粒のウルチ米（長芒のいわゆるブル種）であること、煎り米をつくらないこと、タペ（粒酒）がないことなどである。モチ米、煎り米作り、粒酒作りなどは中国東南部から東南アジア大陸部、島嶼部の大部分に普通にみられることだが、ヌサ・トゥンガラでこれらが欠落することは稲作圏としては漸移域であることを示している。ロティ (Roti) 島の報告 [Fox 1977] では蹄耕した水田に粃を散播する慣行も記述されているので、雑穀栽培の影響が相当入っていることが考えられる。その報告は、またヨーロッパ侵入以前のロティ島の作物として、米、アワ、モロコシ、ジュズダマ、緑豆、キマメ、ゴマをあげており、相当インド的な作物構成である。緑豆が儀礼に重要な作物であることはサヴ島でみた通りで、雑穀、緑豆、キマメといったサバンナ的な栽培デザインが確立していたと考えられる。

1-2 パルミラヤシの利用

乾燥の著しいヌサ・トゥンガラ島々にはパルミラヤシ(*Borassus flabellifer*)とゲバンヤシ(*Corypha elata*)が多い。パルミラヤシの実の直径15 cmほどの球形で、中には3個の内胚乳が詰まっており、ジェリー状で食用にされる。ゲバンヤシの実の直径2 cmほどの小さいもので、若い内胚乳は食用になるが、熟すと毒がある。また幹からはサゴヤシ同様、大量のデンプンが採れる。しかし、両方のヤシに共通な、そしてヌサ・トゥンガラで最も重要な用途は花梗から汁液を採取し、糖蜜や砂糖をつくることである。サヴ島にはパルミラヤシが多く、乾季の8月から10月にかけて汁液(*duwe*)とりが盛んに行われる。1本の花梗には2-3本の花柄(*mayang*)が出る。汁液採取は次のように行う。採集者は腰にベルトを絞め、鋭いナイフ、パルミラヤシの葉でつくった汁液受けの籠(*haba*)、*haba*洗い用のブラシをぶら下げてヤシに昇る。花柄は中途から鋭いナイフで切りとばしてある。洗濯バサミを大きくしたような*feto*、あるいは*mane*という道具で花柄を挟み、揉んでやる。それぞれの用途は明瞭に分かれていて、*feto*は雌花の花柄を、*mane*は雄花の花柄を揉む。毎日採取時に揉んだ後、花柄を5 mmほど切り、束ねた花柄毎に*haba*をとりかえる。毎回新鮮な軸面を切り出すのは意味があり、これを切らないと分泌量が減って酢になってしまう。*haba*の中に溜った汁液は腰に吊した*haba*にかけ、その*haba*をロープで下におろす。採採用カゴは水を入れてブラシでごしごしと洗い、ヤシの樹冠の中に伏せて少し乾かす。この操作は酢酸発酵を抑える重要な意味がある。順次上記の作業を繰り返して木から下る前に、*haba*を花柄にあてがい、汁を受ける。採取は朝夕2回行い、1本の花梗で合計2リットルほど採取できる。雄花柄、雌花柄と

も分泌量は同程度である。木からおろした汁液は近くの木や崖につけてある大きな容器に移す。この場所は一旦決めたのち、変えてはいけない。家にもって帰った汁液をヒョウタン容器にいれ、苦い味付け用の根を加えて半日置くと発酵酒(*tuak*)が得られる。シロップにする場合は汁液を釜で濃縮する。体積で半分ぐらいにする。つくられたシロップ(*donafu*)はカメに貯える。これはそのまま飲用にし、また水で薄めて砂糖水に戻したりする。これは乾季の間の重要な食事である。病気のヤギに飲ませることもある。汁液を煮つめて、砂糖もつくる。ほぼ煮詰まった砂糖をヤシ殻に移して練り、型枠にいれて直径10 cmほどの煎餅状砂糖に仕上げる。雨季も汁液採取は行うが、雨水が混じるのでよいシロップができない。それで*tuak*のままで消費してしまう。人間だけでは消費できないので豚の餌にもする。時には雌花柄に着生した内胚乳を食わせることもある。

雑穀や緑豆の卓越、パルミラヤシやゲバンヤシの利用など、サヴ、ロティ両島の農耕には、乾燥サバンナの農業要素が目立つ。土地肥沃度の保障のために豚の糞を多量に利用するという記述[Fox 1977]や、大土塊耕起法、櫓型鋤の卓越なども考え合わせると、イモ(多分ヤムイモ主体)栽培圏に雑穀栽培が侵入し、イモに置き変わったと想定できよう。同時に乾燥地帯のヤシ類が導入されている。ヤシ汁液(*duwe*)採取の道具や糖蜜、砂糖作りは、インドのタミルナドのパルミラヤシ地帯と全く同じである。

2. スンバ島

スンバ島の基盤は山地では凝灰岩、安山岩、流紋岩などの火山岩種があるが、島の地形を特徴づける数段の平坦な海岸段丘や開析高原には、第三紀の石灰質砂岩やチョーク、隆起珊瑚礁など石灰質堆積物が広く分布す

る。気候的には東部のメロロ (Melolo) やワインガプ (Waingapu) は年雨量 800 mm 前後の乾燥気候だが、西部のワイカブバック (Waikabubak) は 1,900 mm と相当雨量が増える。環境の違いを反映して東半分は短草草原が平坦な海岸段丘上に広がり、川辺林がある程度だが、西半分は高さ 20 m ほどの林が斜面下部や谷に残っている。また、シンクホールが東部に比べて多い。スンバ島東部はかつてインドネシアで最良の白檀を産したことで有名だが、いまは切り尽くされて全くない。19 世紀半ばの輸出品は白檀と奴隷で、輸入品は米、絹、木綿などであった。いまは牛、水牛、馬の放牧地が広く、水田もあるけれども、東部の農地の主体は一部に点々と開かれた畑作である。他方西部には水田が広く、それも儀礼と結び付いた歴史の古い水田と考えられる。

2-1 スンバの畑

ワインガプ周辺の畑の作物はピーナツ、その後作に緑豆、トウモロコシ、ソルガムなどで種類も面積も少ない。そのかわり家畜は多い。ワインガプのラジャの臣下達には数千頭の牛持ちがいた。メロロのラジャによると 1800 年代は山の上の石づみ壁で囲まれた砦のような村に住んでいた。その頃はアワ (*ufukani*) が多量に栽培され、儀礼上もアワが最も重要であった。米が 1900 年代の始めに移入されてから、アワの相対的重要性が低下したという。戦前まで短期休閑の畑でアワやオカボ、ソルガムを栽培していたが、政府の規制で常畑化してしまったという。

ワインガプからワイカブバックへ通じる道が高い高原を越えたあたりには小さなシンクホールがいくつもあり、黒い粘土が表面を覆う。そこには常畑的な短期休閑畑が多い。その耕作の様子は次のようである。9 月ごろ、乾季終わりの草を切り、焼いて耕耘にかかる。1 人が 2 本ずつ背丈ほどの太い掘棒

(*kahonga*) を持ち、4 人が 1 列に並ぶ。地表面に生じた亀裂に掘棒を深く差し込み、1, 2, 3, のかけ声で後退して掘棒を押し下げ、大土塊を起こす。立ち上がった土塊は足で蹴り倒す。後退しながらこうして土塊耕起列をつくる。列の間隔は 2 m ほど、土塊のサイズは幅 40 cm, 長さ 1 m, 高さ 25 cm ほどの大きいものだ。この操作で地表の草の根を地下に埋めてしまう。この作業は乾季に行うことが重要で、雨がくると土塊が小さくなってしまっているので、耕起の能率が落ちる。11 月に雨が始まり大土塊が少し細塊になる。そこで先の掘棒を垂直に差し込んで時計方向に 1 回転させ、植え穴をつくる。播種時に畑の真ん中に *katoda* という斉囲をつくる。30 cm ほどの立石を立て、周りに盆石を数個並べたものだ。そこにキンマ、白米、ニワトリの肉、ニワトリの心臓を供える。その後、ピーナツ、緑豆、ハトムギ、トウモロコシ、オカボ、ソルガム、長イモ型のダイジョ (*ubi*)、タロイモ、キャッサバを植える。ヤムイモは 80 cm ほどに伸びるので深い植え穴を掘る。植え付け後、リング状の除草具で草取りを 1-2 回行う。2 月ごろから緑豆、ついでピーナツ、トウモロコシ、ソルガムを収穫し、4 月にオカボを手でしごいて収穫する。これらの跡地には植え穴をうがち、再びトウモロコシを 4 月にまいて 7 月に収穫する。ハトムギは 7, 8 月に実り、ヤムイモ、キャッサバは 8, 9 月に収穫する。キャッサバは緩い斜面に井桁状の畝を盛り上げてそこに植える畑もある。畝で囲まれた内部にはゴマ、トウモロコシ、ウコン、サツマイモ、インゲンが植えられている。2 年目の畑にはトウモロコシを専ら栽培し、5-7 年目までトウモロコシ栽培を続ける。その後、畑の場所を他に移す。休閑期間は 3-4 年である。

ハトムギは米と同様に足踏み脱穀し、石皿において叩き石で殻を割り、臼と杵でつき、

水につけて赤い皮を洗い流す。こうして白米状にして炊くか蒸す。米よりも香りがよくてうまいという。貯蔵性もよい。3年経過しても虫がつかない。トウモロコシの食べ方もよく似ていて、石皿上でつぶし、臼杵でつき、篩をかけて碎米状の粒を炊く。他にトウモロコシの煎米法が残っている。老人が専ら好んで食べる方法で、トウモロコシ粒をまず煎り、臼杵でついてザラメぐらいに細かくして炊く。オートミール風になるらしい。ミルクコーヒーを飲みながら食う。主食はトウモロコシ、キャッサバ、ヤムイモで、ハトムギやタロイモ、アワ、ソルガムなどは補助的である。牛は多いが搾乳の習慣はないし、ミルクを飲むことはない。

2-2 水田耕作

西スンバの中心ワイカブバックと周辺の村々は巨石文化をいまでも保っている。村々は切り立った石灰岩の高い残丘上におかれ、かつては村入り口の扉を閉じて要塞と化し、部族戦争に備えた。狭い残丘上に昇ると、その中心には祖先霊への供儀を行うための広場があり、そこには巨大な石棺が何十も並ぶ。広場の床には敷石が敷き詰められる場合もある。そこに、かつては部族戦争で奪った生首を吊した塔 *kaduwatu* と、二股の先端に頭蓋骨をかけた木柱 *adung* が立っている。人々の家はこの広場の周りに崖から落ちそうな形で建てられている。死者霊が生者を圧倒して生きている。家々は高く伸び上がった屋根が特徴的だが、この突出屋根の空間も死者霊の居場所であり、またそれに守られて穀物を貯蔵する空間でもある。こうした村を闊歩する男達はサロンを腰にぐるぐる巻きに巻き、布端を尻の間に垂らしている。ニューギニア高地の人々が尻に緑のドラセナを垂らす様子に似ている。そして帯に広刃の剣を差している。人々の宗教はアニミズムと祖霊崇拜であり、独自の文化を守っている。タイムト

ンネルをくぐってヒンズー教侵入以前のジャワに降り立った感じを強く受ける。

ワイカブバック周辺には盆地が開け、そこには水田が広い。水田耕作の歴史がいつ始まるのか不明だが、系譜的に、牧畜と穀作の結合形態である蹄耕が一般的に行われている。農作業はサヴ島の畑作同様、儀礼と結び付いて進行する。そうした水田農耕と村の様子を述べよう。まずワイカブバックの南にあるプライバクル(Plaibakul)村マフ(Mafu)部落を訪れた。主なインフォーマントはマフ部落に住むスンバ島議会議員のジャクス・ウェル氏である。この村の暦では太陽暦の2月が第1月であり、田植えを2月に行う。この月には南のリーフで *nyale* が沢山浮き上がる。*Nyale* は先に述べた通りで、毎年決まった時期に浮き上がるので重要な自然時計である。浜で祖先に多数のニワトリを供儀し、*nyale* 小屋をつくり、リーフに浮き立った *nyale* をココヤシの毛でつくったタモですくう。その漁獲量や外観で米の豊凶を占う。この後、水田の地拵えを蹄耕 (*kareka tanah*) で行う。村には月を見て暦を決める司祭役がおり、集会場に保管されている太鼓をこの司祭が打ち鳴らすのが蹄耕始めの合図である。太鼓は人身御供の腹の皮を張ったもので、ズンズンと重い音が近在7村に響きわたるといふ。人腹太鼓が鳴り始めると全ての活動が停止される。炊事も、米つきも、子供の遊びも止める。そして翌朝、水牛を水田におろす。既に雨季が始まり、水田は湛水し、カエルが盛んに鳴いている。40-50頭の水牛を数十人で追い回す。水牛はロープで縛らず、バラバラだが、一つの群をつくるように竹棒で叩きながら追う。水牛の蹄で草は土に踏み込まれ、田面が泥になる。1週間おいてもう一度蹄耕を繰り返して地拵えは終わる。この後、水牛を冷やす儀礼を行う。蹄耕の際に水牛は叩かれ、熱くなった。また多くのけがれが水牛に

ついた。水牛を冷やし、祓淨し、感謝する目的である。水牛柵の外に仮小屋を建て、柵の脇の立石の傍らで豚、ニワトリ、犬を供犠し、石に血を注ぎ、肉を供える。

地拵えがすむと田植えを始める。苗代は12月に雨が降り始めると田の一部を鋤で起こし、足で踏んで用意し、芽出し粃をばらまいてつくられている。苗代作りの際も儀礼がある。ヤシ殻に粃、ワタ、コプラをいれ、苗代に運んで司祭がまく。苗代作りの司祭は稲作期間中、野菜を食べてはならない。水田に草が殖えるからである。また意味はわからないが、渡り鳥のカモが苗を食わないように、苗代期間中この司祭は米飯が禁忌で、お粥だけが許される。苗代の中心にはココヤシの葉飾り(*weiri*)を立てる。それは作物の保護を司る神 *ubu bewi* が降りる場所である。

田植え始めの儀礼は村全体の斉囲田と各自の田につくられた斉囲で行う。斉囲は *muri tanah* といわれ、*merapu katoda* という祭壇がある。立石とその前に置いた盤石、そのそばの小石、立石の脇に立てた2本の小枝からなる。*muri tanah* は祖先がいる土地の意味であり、*merapu katoda* は人間の祖先霊や霊界を結び付ける供犠石である。ここでは、ニワトリを供犠し、立石にその血を注ぎ、盆石にそれらの肉と、キンマ、飯、ワタを供える。村全体の斉囲田は月を見て暦を決める司祭と司祭長が所有する。

この後、田植えを始める。男が苗取りをし、水田に運び、女が田植えをする。田植えは村全体の斉囲田から始まる。女達は歌い、踊りながら苗を植える。田植え歌はラララ、ラーロ、ホラロと三拍子で単純なメロディーだが、時に、イエエエエエエと甲高い鳥の鳴き声に似たコロラトゥラソプラノ(*takalak*といわれる)が混じる。全体の斉囲田の田植えが終わると、各自の田植えを行う。この時ももちろん、各自の田の供犠石にお供えを

する。田植えが半分終了した時点で少年が水田をまわり歩きながら、トウモロコシの葉でつくった籠にいれた米を水田の水口に置き、供犠石に再びニワトリの肉を供える。

稲が出穂するころ、*regga pare* という儀礼を行う。これは虫バライの意味を込めて行われる。ニワトリを供犠し、供犠石に血を注ぎ、ニワトリを焼いて供える。出穂した稲にネズミ害が生じないように、シイナにならずよく実るように祈る。この後、順調に進むと、稲は *pawe'e susu* (乳熟期)、*pakamorarana* (糊熟期)、*pakamorawarana* (半黄半緑)、そして *rara* (黄熟期) と生育段階が進む。

収穫始めにも別の *regga pare* 儀礼を行う。ニワトリを供犠し、供犠石に血を注ぐ。そして女の司祭が前日に水浴祓淨し、次の日の夕方淨衣を着て、パンダナスのカゴを右肩にかけ、静かに斉囲の水田をまわりながら、稲穂を摘んでカゴに入れる。この稲穂で *pare merapu* つまり祖霊に供える稲束(*daewa*)をつくり、村へもって帰る。女司祭は家の入口で停止せねばならない。そこで男の司祭に稲穂束を渡す。男の司祭は黒いサロンをつけ、受け取った稲穂を家の供え柱に吊す。この柱は家の主柱4本柱の内、男の入口から入ってすぐ左にある柱である。この柱は農作物の守護神を祀る柱なのである。この後、各自の田の収穫が始まる。

7月、8月に行う収穫は刃渡り15cmのナイフで根刈をし、田面に刈束を置く。根刈が終わると稲穂は方形の稲積みに積み上げる。その後、ニワトリを供犠して稲づみを開く儀礼(*weisauri*という)を行う。更に脱穀始めの儀礼を村で行う。各家で稲穂を吊す柱のネズミ返しの上に保管している聖なるカゴを取り出す。この中には人をつくった神 *nukusala* がおり、古い粃が入れてある。斉囲では豚、ニワトリを供犠し、供犠石に血を注ぎ、肉を供える。脱穀は足踏み脱穀である。斉囲田に

暦を決める司祭が兜のような頭布をかぶり、剣をつけ、槍をもって立ち、男達が4人ずつ2列に並び、4拍子のはやし歌を歌いながら、2歩後退、2歩前進の動きを行い、両足の足裏をこすりつけるようにして脱穀する。儀礼的脱穀を5分ほど続けた後、通常の作業になる。4人列の先頭が稲づみから稲穂を少しずつ取り、足で踏む。順次後ろの男に踏んだ稲穂をまわす。

脱穀が終わると葉、茎を取り去り、粳づみをつくる。そして丸カゴを使って男が風選する。粳殻の山をもう一度風選し終わると、次の日少女が聖なるカゴをもち、少年が槍をもって齊囲田に行き、古い粳の上に今年の新しい粳を加え、更に小刀、キンマ、白檀を混ぜたココヤシミルク、をいれる。その聖なるカゴをお供えの稲束(*daewa*)を吊した柱上部のネズミ返しの上に置く。聖カゴを置き終わると、柱に吊した初穂(*daewa*)を村の広場の供儀所 *mata merapu* に移す。その場所は小さな社の脇に植えられた豊凶占いの木 *pohon lakala* で、この木に初穂束を吊す。

倉は4本の柱で支えられる反り上がった屋根裏で、したがって4本の柱には天井の高さにネズミ返しがつけてある。粳の収納は男が行う。倉入れした粳は1カ月間は休ませ、その間は取り出せない。倉出しの初日にはニワトリか豚を広場の供儀所で供儀する。

収穫、倉入れが完了した後、太陽暦の10月半ばから11月半ばまでが年の終わりをしめくくる聖なる1カ月で、*podu* 儀礼と総称される多くの行事が行われる。これについては小野の報告[小野 1976]があり、それ以上詳しい情報もえられなかったので、簡単にふれるにとどめる。来歴の異なる種々の要素が重なっているが、その主な内容は4点だろう。儀礼は野豚狩りで始まる。第二は祖先霊の供養である。村の広場の供儀所で供儀を行い、石棺墓で祈る。第三に祓浄の儀礼であ

る。村中を聖なる太鼓を叩きながらまわり歩いて、人間や家畜の作り出した不浄を浄める。この際、村の広場で木の槍を投げ合う模擬戦が行われる。サヴ島の例と同様、かつては祓浄の為の人身御供の習慣があったと思われる。最後は村の歴史の吟誦である。*Kanuga* といわれる語り部が、祖先の来歴と移動、米など農作物の由来について一晚中語りあかし、新年を迎える。もう一つ重要な祭礼がある。太陽暦の2月から3月、つまり水田の田植えを行う頃、*pasora* と言われる大規模な模擬戦が行われる。これを行うのは各部族の発祥地と伝えられる来歴の古い村である。ワラカカ(Walakaka) 郡では、プライバクル村やラムボヤ(Lamboya)村のものが有名である。*Pasora* の前に、村の慣習家屋に保管している木馬を広場に飾り、*kandang merapu* といわれる社(大きな3個の自然石のまわりに柵をめぐらした斉域で、自然石崇拜の伝統を示している)で司祭長が祈る。祖先霊の長は普通は丘上の村の *kaduwatu* (かつて生首を吊した石柱) にとどまっているのだが、司祭長がこの社で供儀を行うと、社に移り2日間とどまる。日本でいえば御旅所である。水牛、ニワトリを供儀し、その肉とココヤシ、キンマ、ニワトリの肉入り飯をお供えするのである。そして、このあと、低地の海岸平野で、数百人の村人が2陣に分かれて馬に乗り、木槍で模擬戦を行う。司祭達は本物の槍を持って観戦する。模擬戦だが、普通多数の負傷者が出、時には死者も生じる。

農業に関して少し付言したい。稲の品種は水稻、オカボとも、ウルチとモチの品種がある。長芒、大粒のブル品種が多いが、無芒大粒品種や赤米もある。水田の収穫が終わり、乾季終わりの12月には畑の耕起を始める。殆ど常畑である。やはり長い掘棒を2本ずつもち、大土塊耕起法を行う。雨で土塊が細塊に砕けると、キャッサバ、ピーナッツ、緑

豆、トウモロコシ、オカボを植える。トウモロコシもウルチとモチがあり、モチ品種は赤いものと白い waxy 品種がある。他にソルガム、アワ、ハトムギも栽培されるが、小量である。畑にも斉圃を作り、水田同様の供犠石と木を立てる。しかし祈願の対象は祖先霊というよりも *tuan tanah* (土地神) が重要である。

西スンバには水田が広いが、その中には畑から天水田への転換が最近に生じたものも多い。ワイカブバックから西のコディ (Kodi) へ向かう途中の緩波状台地の天水田はそうした水田で、1930 年代には畑であった。これらの天水田にも立石と盆石からなる供犠所を設け、キンマ、豚、ニワトリの肉を仕事始めに供えて、*palopapado* (土地神) に畑仕事の開始を知らせる。この構図は、インドネシアに多い焼畑伐開を土地神に知らせて立ち退いてもらうようお願いする儀式に似ている。こういう次第で全体に畑、ないし、焼畑慣行の性格が強い。そのことは *sawah pemali* つまり斉圃田がないことにも現れている。儀礼形態と宗教観念上からはこれらの水田は畑と同じ扱いで、灌漑水田とは接し方が異なる。灌漑水路を引いて灌漑水田を作りあげた祖先への尊崇という要素が欠落してしまうのは面白い。コディやワイカトキ (Waikatoki) の石灰岩台地になると、天水田も姿を消し、畑作と、ヤギ、牛、水牛、馬などの家畜飼養が主要生業となる。畑には、トウモロコシ、ソルガム、オカボ、ハトムギ、キャッサバ、緑豆が栽培され、家まわりでは、タバコ、バナナ、アメリカサトイモが目立つ。やはり大土塊耕起法で畝を立てる。畝立てには、掘棒と櫓型鋤の両方が使われる。斉圃田はないが、*pasora* 儀礼はコディやワイカトキでも 200 頭程の馬を使って行われる。模擬戦争が水田耕作以前の習俗の中に在ることは疑いない。

食べ方だが、ここには煎り米の習慣があ

る。未熟米を摘み、煎って搗き、熱湯を加えておかゆ風に食べる。米、アワの調理法は炊飯用土鍋に入れて炊き干しをする。途中、竹べらでかきまぜる。他の雑穀は杵臼で搗いて碎米風にして炊く。ヤムイモは蒸すことが多い。キャッサバは収穫後、畑ですぐ皮をむき、薄く輪切りにして干す。この干しイモを臼で搗いてやはり碎米風に炊く。ジャワのキドゥル台地などと同じ方法である。酒はない。普通の清酒も、粒酒も、ココヤシの *tuak* もない。ココヤシはコプラとココヤシミルク用に使うのみである。パルミラシの *tuak* もない。ポリネシア、メラネシアのイモ農耕圏に酒がないのは既述の通りだが、稲作圏で酒がないのは、ヌサ・トゥンガラやマダガスカルなどいわば辺縁の稲作圏である。マダガスカルは米の酒はないもののバナナやサトウキビを材料にした酒があるので、酒の概念そのものはあるし、技術もある。ヌサ・トゥンガラにおける酒の欠如はイモ農耕圏の文化伝統をひきついでいる印象を受ける。

ヌサ・トゥンガラやマルクを中心に作物の死体化生神話が多いが、ワラカカ郡のプライバクル村やワイフラ (Waihula) 村にもある。前者の伝承はこうだ。月と日が結婚して 4 男 3 女が生まれた。息子と娘達は次々に結婚したが、末の息子は結婚する相手がいなかった。地上で相手を探すうちにいい相手を見つけた。女を誘って穴に入ろうとしたがネズミの穴だったので頭が入っただけで、窒息して死んでしまった。その死体の血管から米、頭からヤシ、耳から白檀、頭髮から家畜、心臓から金が化生したというのである。この神話の導入部分はポリネシアの天と地の結婚に似ているが、死体化生の部分はセラム島のハイヌヴェレ型である。元々ココヤシから生まれたハイヌヴェレの切断され、埋められた身体からはイモが化生したのだが、スンバ島の化生譚で生じた作物ではコメが重要視されてい

る。ワイフラ村の稲起源神話だと、天から子供が湿地に落ちて化生して芽を出したものが稲苗である。水稻を陸稲に変える祈禱文もあるという。この構図だと稲作は水稻から始まり、陸稲は水稻から変化したという文脈である点が面白い。これはジャワ島の水稲、陸稲起源神話で示唆される変化形態と逆である。ジャワの稲作に関する Bie の報告 [Bie 1901: 19-22] だとジャワの至高神バタラ・グールーの娘ニャイ・スリまたはトゥリスナワティの死体から化生した作物は頭髮から稲、頭からヤシ、胴体からサトウヤシ、歯からトウモロコシ、両足から竹、である。それにひき続いてヴィシュヌーの妻、デヴィ・スリの死体からも稲やその他の作物が化生した。ここでジャワのニャイ・スリから生じた稲とインドのデヴィ・スリから生じた稲には違いが認められ、前者は陸稲、後者は水稻であると述べられている。このジャワの伝承はインド移民の高級文化意識による色付けの可能性があることも考えられ、スンバ島の伝承は面白い意味をもっている。

2-3 巨石墓と葬儀

スンバ島は巨石墓が多数あり、その葬送儀礼は極めて発達している。両者合いまって、過去に伝播したなんらかの原始宗教の姿を伝えている。農耕技術には直接関係ないが、農耕系譜を考える時には無視しえない生活文化なので、我々が見聞した範囲で述べてみたい。実際に見た葬儀の様子はプライバクル村のマフ部落、インフォーマントはそこに住む地方議会議員のジャクス・ウェル氏と、タルン(Tarung)村の *uma mavine* (暦を決める司祭) の奥さんマウォ・ムデ夫人である。

マフ部落は平地から 20 m ばかり立ち上がった石灰岩残丘の上にある。広場に面した慣習家屋は 10 戸、くり抜き巨石石棺墓は広場に新旧二つと、比較的小さい集落である。我々が訪れた時、明日使う新しい石棺墓をま

だくり抜き製作中であつた。くり抜き石棺の石材は数 km 離れた海岸の石切り場から運んだものである。長さ 1.8 m, 幅 1 m, 高さ 1 m, それに厚さ 20 cm の蓋がのる。スンバ島の石棺の中では比較的小さいクラスだが、それでも運ばれた石材は重さが 6 トン程度だろう。これの下にコロを敷き、ロープで数 km の道のりを牽き、部落へ上がる急坂を運ぶのは大変だろう。1 カ月を要したという巨石運びの光景を我々は見ていないが、多分 Schnitger の本にみられるニアス島の石引きの光景 [Schnitger 1939] がそれだろう。村の広場に据えつけて、内部をくり抜く。さて葬儀の行われる村へ入ると接待役の老婆がキンマを何度もすすめる。明日葬送予定の遺体は 2 体あり、1 体は 2 カ月前に亡くなり、くり抜き木棺に伸展位で仮葬されていた。これは既に殆ど死臭を出さないが、奥の家に仮葬されている遺体は 10 日前の死者で、まだ強い死臭を発している。家内での仮葬遺体の保管場所は男の入口を入った客間におく。この間、毎日生者同様に食物をお供えする。

夜に入ると太鼓とドラの伴奏で踊りが始まる。男達の踊りは水牛の皮を張った丸い楯をもち、高く跳躍して剣を振りおろす。女達は長い黒ドレスに白帯を巻き、額のバンドに 2 本の角を立てて青と白のスカーフを長く垂らし、横列で前後に歩む。そして頻繁に、*イエエエエエ*..... という甲高い喉音を発する。この儀礼の目的は何かと聞くと、墓石を冷やす為のものであるという。墓石は石切り山の父から切り離され、石工に内部をくり抜かれる仕打ちを受けた。その為に熱くなっている。熱い石は死者に受け入れられない。そこで、まず子の石を父のいる石切り山へ戻す。子の石が父の石に会い、慰められて気持ちを冷たくして戻って来る為行われるのが初めの儀礼である。

午前零時をまわると葬儀の司祭 2 人が何か呼びかける。魂よ、子の石は既に戻った、どうか子の石を受け入れてくれという内容だという。そして踊りの所作が変わる。男達は足首に鈴をつけて踏みならし、女達は両腕を 1 回振る間に 4 歩前進し、同様に 4 歩後退する。この儀礼の意味を聞くと、新しい死者の魂が死者の林へ旅立ったのだという。石を打ち鳴らし、水牛を連れて、休みつつ、また歩く。村に居る全 *merapu* (祖先霊) も一緒に死者の林へ旅立った。この儀礼が夜中続く。明け方、司祭が大きな声で呼ぶ。魂よ戻って来い、霊よ戻って来いと呼ぶ。司祭が新しい死者の霊と全ての祖先霊を呼び戻すのだという。呼び声に応じて男の霊は家の男柱、女の霊は女柱にあるねずみ返しへ戻る。重要な祖先霊は客間の奥にある祖先柱のねずみ返しの上に戻る。この段階では、しかし、新しい死者の霊はまだ祖先霊になっておらず、ねずみ返しの上へ戻るのではない。ともかく、村へ戻って来ているのだという。

葬送は夕方に行われるが、それ迄に種々の準備がいる。死者の口にマモリ(*mamori*)を入れる。これは女性のシンボルである。この行為は死者の再生を祈る意味がある。女性の場合は象牙の腕輪を手にはめる。他に石棺に副葬する品々を用意する。白米、キンマ、タバコ、白檀、金、ドラなどである。それにハマボウ(*Hibiscus hamabo*)の葉を搗いてかまどの灰とまぜ、充填剤をつくる。これは遺体を納棺後、臭いがもれないよう蓋と棺の隙間をぬりこめる為である。この間も、男達と女達の踊りは、死者の 1 人旅を勇気づける為に続けられる。夕方近くなると、水牛が供犠される。村の広場脇の水牛柵にはその為の水牛が数頭入れられている。男達が 1 頭の水牛を柵から広場へ連れ出し、両足と首に 2 本のロープを結び、6 人ずつでロープを引く。水牛は最後の逃亡を試みてあばれる。男達と引

合いになり、水牛は疲れて、じっと立つ。1 人の男が腰の刀を抜いて水牛の頸部下部にたたきつける。水牛は皮下脂肪が厚いので一挙に致命傷にはならず、次の男が再び切りつける。血管に達する切りが入ると血がどっとふき出る。水牛は動きが止まり、じっと立ちつくすが、それをさらに 2 人が切りつける。水牛は倒れ、一度立ち上がるが、血がどくどく流れ出て、どっと倒れる。脚を突っ張って死後硬直に入った処で、更に傷口に刀をさしこんでとどめがさされる。次々と水牛、豚が犠牲に供されて、石棺のあたりは血の海である。

供儀が終わると仮葬用の木棺の蓋を開け、布で包まれた遺体の上から更にカインイカット(緋織物)をかけ、遺体を包みこむ。これを運んで石棺の中に入れ、もう一体も同様にして同じ石棺内へ入れる。そして副葬品が運びこまれる。石棺の蓋は石棺のまわりに組まれた足場にわたした横木で支えられているが、納棺が終わると横木の上に梃子をさしこんで、そろそろと棺上にずらし、閉じる。隙間には先述の充填剤をぬりこめる。

納棺は終わったが葬送儀礼はまだ完成しない。数日内に *air mata* (涙を干す) という儀礼を行う。たそがれ時、3 枚の木の葉に小石を包み、石棺の蓋の上、丁度、死者の頭の上の部分にこれを置く。夜 9 時頃、2 人の司祭が石棺の周りを 3 回まわり、この石包みを小カゴに入れてサロンで覆う。小石は死者の魂を表わす。司祭が弔歌を歌い、小カゴの上にキンマをおき、白檀をまぜたココヤシミルクを注いで小カゴを洗う。1 羽の鶏を供犠し、キンマと油を小カゴに入れる。そして人々は鶏の心臓と飯を食べる。この時、同時に死者の魂と祖先霊も食べるという。その間に水牛の内臓と、鶏、犬の心臓を土と一緒に茶碗に入れ、村の広場の社にお供えする。同じ供物を水牛柵にも供える。更に、同様の供

物と御飯、死者の魂（つまり小石）の入ったカゴを、彼の家客間の奥の柱のねずみ返しの上へ供える。この儀礼が終わると、全祖先霊が呼ばれて共食し、柱のねずみ返しの上にとどまり、死者の魂も祖先霊の一員となったのである。

祖先霊はこの世の人間と同様の生活を送っていると考えられている。水牛を供犠するのは、祖先霊が水田を耕作し、牛車で運搬し、婚資に使い、供犠をするのに必要だからで、供犠された水牛は死者の魂と一緒に祖先霊の世界へ行くと考えられている。

スンバの巨石遺物はそのサイズ、数において驚くべきものがある。特に注目されるのはその構造や刻まれた文様(図11参照)である。図には2例を示したが、タルン部落のものは水牛の頭とその上に立つ人物像というデザイン、そして、水牛の角や巨石に刻まれた綾杉文、三角鋸歯文、四つの渦巻文、などが注目される。葬墓の形としてはここに示したものの以外に、くり抜き石棺のみのもの、巨石の下に土壌墓を設けるもの、石積み円形墓域、この2者を組み合わせたもの、側面に入口をもつくり抜き石棺、四脚の代わりに石をおいて台石を支えるドルメン型のもの、小規模な段台ピラミッド型など様々である。プライキキ部落の村のシンボル、*kaduwatu* は透かし彫り風の複雑な曲面を持つ石柱の角が鶏頭形を示し、頂部には人物座像がのり、その下にトカゲ像、2重帯状文様などが彫りこまれている。こうした文様はドンソンドラムに見られる文様に極めてよく似ている。他方、水牛角間に立つ人物像やトカゲ像の意匠はハイネゲルデルンのいう記念の様式[1978: 9-47]を表わしているし、メラネシアの祭祀家屋におかれるトーテムや彫刻にもよく似ている。ハイネゲルデルンはこの記念の様式とドンソン文様を主とする装飾的文様の間に1,000年の年代差を認めている。その推定の妥当性は吟

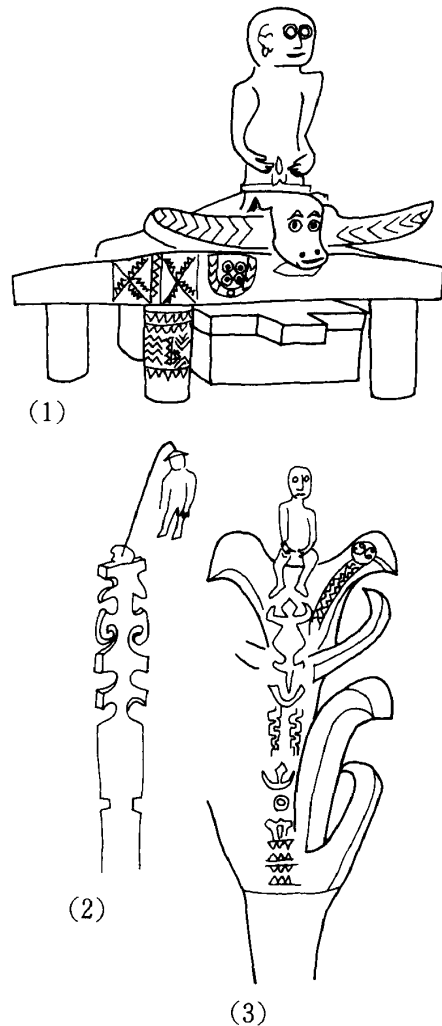


図11 スンバ島の巨石遺物

- (1) タルン村の巨石墓
- (2) プライバクル村のカドゥ・ワトゥ
- (3) プライキキ村の供犠石柱

味しえないが、相当年代の異なる文化が重なり融合しているのは確かだろう。農耕技術の面からも、イモ栽培と、雑穀や稲のような穀作文化が重なって融合、混在している状況がある。

3. 漸移帯の農耕法——小結

いささか難しい袋小路に迷い込んだ感じなので、私なりに整理をしておきたい。漸移帯の意味は本章の初めに言ったように、イモ農耕圏と穀作圏の漸移帯ということである。畑

ではイモ農耕圏の伝統を示す掘棒大土塊耕起法が卓越し、權型鋤も使われる。また常畑の短期休閑畑が卓越する。短期休閑畑は乾燥気候と石灰岩基盤という生態的環境によって保存されている面もあるが、イモ農耕の伝統のほうが強く利いていると思う。しかしイモ栽培の排水という要素は、乾燥気候で欠落してしまった。作物を見ると、イモそのものは稀少作物となり、雑穀が卓越する。また乾燥気候のヤシ類利用が盛んである。これらのヤシはインドや中東からの伝播を示唆するが、雑穀はインドやアフリカのサバンナから直接来たのか、穀作二次センターとしての中国から来たのかは留保せざるをえない。

水田では移植栽培と蹄耕法が見られる。移植法は前章で述べたように、イモの子育て栽培思想を受けつぐ技術であると考えている。これは穀作の基本にある大量生産思想からは決して生じない技術で、穀作がイモ農耕圏に入って生じた最も本質的な変化である。稲作圏の中でもスリランカやマダガスカルで散播が卓越するのは畑作穀作文化圏の影響が強いからだ。整理し直すと、農耕思想には子育て栽培思想のイモ農耕と大量生産思想の穀作農耕がある。穀作農耕がイモ農耕圏へ侵入したとき、稲の栽培化が起こり、そこに稲移植栽培法という本質的な変化が生じ、穀作農耕は三つの亜型に分化した。①水田移植栽培法、②畑作散播栽培法と③水田散播栽培法である。水田移植栽培法は狭義のマライシア圏の核的技法であり、畑作散播栽培法は華北やデカン高原の畑作地帯に受容された稲作技法であり、水田散播栽培法は畑作穀作圏の周辺域に分布する。以上が大局的に見た時の稲作圏の構図だ。つまり、稲作圏は穀作対イモ栽培という二元対立の構図の中では漸移帯だが、その後3亜型の分化と稲生産技術の発展により稲作圏という第三の地域を確立した。

この構図の時空的透視図を描いてみると、

ヌサ・トゥンガラはイモ農耕圏と穀作農耕圏の現在における漸移帯であるが、稲栽培の生じた始源的漸移帯として早期新石器時代の中国華南を思い描くことができよう。長江中・下流域には紀元前五、六千年紀と年代づけられている河姆渡、羅家角、大溪文化などがあり、炭化粳や稲が出土している。掘棒や權型鋤が存在したのかという点だが、河姆渡遺跡最下層出土の骨耜や木鏟は權型鋤と考えてもよさそうだ。骨耜は柄と鋤身に少し角度がつくスコップ型だが、木鏟は明らかに權型鋤だ。耒は元来掘棒に足踏み用横木をとりつけたもの、耜は權型鋤に同様の踏み板をとりつけたものである。どちらも土塊起こし(中国では翻地という)用の農具である。これは例えば、チベットの門巴族や珞巴族が現在も使っている[宋兆麟 1981; 杜耀西 1982]。木鏟や木耜はその後江南では継続して出土し、周代になると銅鏟といわれる鋤身先端に銅刃をつけるものが現れる。春秋期には鉄刃をつけた二股の耒耜が出現する。双齒耒耜になると用法も系譜も權型鋤と異なるかもしれない。以上のように中国には古くから広域に權型鋤があったと考えるのだが、しかし、今の処、これらの骨耜、木鏟、それに石耜、などがイモ耕作農具かどうか確証はない。水稻移植法が華南で成立した背景にイモ農耕法の存在を推定して演繹しているのみである。稲移植法が河姆渡や羅家角の時代から存在したかどうか、これも確証はない。『農業考古』編集者の陳文華[1987]のように陶田模型などの資料に基づいて、移植法の始まったのは漢代以降という見方すらある。しかし、これには考古資料に基づけばという前提がつく。

イモそのものが華南にあったのかという問題だが、堀田[1983]によると、少なくともヤムイモは相当北まで栽培されている。タロイモ野生種群の分布は北限が中国東南部から日本西南部にあるが、栽培圏をとればこれも

もう少し北まで及ぶだろう。六世紀の農書『齊民要術』は山東地域が対象と考えられるが、その中にイモ栽培法が述べられている。西山、熊代の研究書で見るとコイモ型、オヤイモ型のタロイモ、ヤムイモなどが述べられている。「広志にいう、蜀漢には芋多し、民此を常食とす。およそ14種あり。君子芋というのはその大なること一斗枴の如く、魁（オヤイモ）は杵か簇の如くである。（中略）この4種類の芋は子芋をたくさんつける。談善芋というのはその魁の大なること瓶の如くであるが、子芋は少ない。（中略）蔓芋というのがあり。樹枝を伝って伸びる。大者は二斗枴なるもあり」。栽培法は「汜勝之書に言う、芋をつくる区は、方、深ともに三尺。豆がらを区中にいれて足で踏む。その厚さは一尺五寸。区上の湿土を糞と和して区中の豆がらの上にかける。その厚さは一尺二寸。水を注ぎ足で踏んで澤を保たせる。芋子五個を四隅と中央とに置いて足で踏む。早には再三水を注ぐ。豆がらの腐爛するにつれ子芋ができるが、その長さはみな三尺もあり」とある〔西山・熊代 1969: 124-125〕。甘土の作り方は異なるが、深い穴を掘って甘土を入れる考え方はメラネシア、ポリネシアと同じだ。漢書にもイモの記述がある。貨殖列伝第六十一に「岷山の麓の沃野は、土の下に跽鴟（サトイモ）があって一生餓えないですむ」とある。岷山は岷江上流、文山にある山で、したがって、漢書の記載は成都平原で漢代にはイモ栽培があったことを示している。生態環境的には、新石器時代は四川、雲南から、華南一帯、更に華北の一部までもイモ農耕圏に含まれたと考えられる。そこに穀作が入ってきて水田移植栽培法が成立したという構図を考えている。

次に蹄耕だが、水牛や牛に草を踏ませ、その後何もせず、あるいはエブリで均等にする位で移植したり、散播する。蹄耕、散播はマ

ダガスカル、スリランカに一般的で、一部南スラウェシ、チモールにもある。こうした分布と蹄耕を可能にするのは湿潤気候であるとの思いこみから、田中耕司との共著論文「蹄耕の系譜」〔田中・古川 1982〕において、マレー型農耕の代表的技術要素であると扱えた。現在の分布は圧倒的にマレー圏に卓越するので、マレー圏に分布する農耕技術の代表と考えるのは今も変わらない。しかし、その系譜となると私の意見は全く変わってしまった。今の私の仮説は、蹄耕が西アジアの牧畜・灌漑穀作地帯に発生し、環赤道地帯一帯に古く伝播したというものだ。それは島嶼域へ入る前にどこかに二次センターを作った可能性も否定し切れない。例えば雲南の石寨山からドンソンへつらなる紀元前一千年紀後半から紀元後数世紀へかけての農耕文化の中に存在したかもしれない。文献の中には雲南で牛、水牛による蹄耕は現れない。ただ象による蹄耕は記載がある。唐代の蛮書名類第四に「象大如水牛，土俗養象以耕田，仍燒其糞」，また同書雲南管内物産第七に「象開南己南多有之，凡捉得，人家多養之，代代耕田也」という記載である。以上は尹紹亭の教示による。更に尹の教示によれば民俗例の中に水牛による蹄耕と見なせる方法がある。それは、低い畦の深田の場合、まず犂耕を行い、その後、多くの水牛を水田にいれて泥を踏ませ、代掻きを行わせ、水田を均平にするという習俗である。私はこれはまぎれもなく蹄耕だと思うが、尹は慎重で詳しい調査を行う必要があると考えている。石寨山やドンソン文化の中に蹄耕があったとする仮説は魅力的である。というのは、大陸部からカイ島まで東南アジアに広く伝播したこの文化が同時に稲作と蹄耕を広めたとなれば、文化の年代をはかるひとつの広域時計がえられるからである。そうである可能性は高いが、雲南や中国華南部の農耕習俗調査が必要ということにしてお

こう。

蹄耕が南中国を経て、稲作と共に東南アジアへ伝播した可能性はこのように高いが、その系譜はやはり農牧複合に由来すると思う。蹄耕など簡単なことで、どこでも発生しうるだろうと実は私も思っていた。しかし、マダガスカルで見た光景が実に鮮明に思い出される。若牛を3頭、成牛と一緒に泥田に入れて蹄耕の調教を行っていたのである。若牛達は深い泥田を嫌って男達に突きかかり、何度も逃げ出す。成牛はその都度立ちどまって、若牛達が連れ戻されるのを待っている。つまり、蹄耕は牛の合意があって初めて可能なのだ。家畜飼育というのは諸々の合意を動物に教えこむ技術体系を備えていなければ成立しない。それは深い木陰に熊や鹿が潜む森の生業ではない。広範な見通しの利く平原で人間が動物と競争的共存で暮らすサバンナや乾燥ステップの生業だ。蹄耕は牧畜と農耕が複合した西アジア乾燥平原で発生したという系譜論を私は抱いている。その東への伝播は何回かの波で生じた。そうした波の中には石塞山・ドンソン文化に二次センターを作るものもあり、そこから東南アジアへの伝播は大きく時代を画した。しかし、それ以外に一次センターからの直接伝播も否定し切れない。というのは段台ピラミッドや、巨石遺物、くりぬき木棺、精緻な葬送儀礼や、魂よ戻ってこい、戻ってこいと呼びかける再生思想と結びついて、ドンソン文化以前に古代エジプトから環赤道帯へ伝播した可能性があるからだ。段台ピラミッドや巨石遺物はメラネシアからポリネシアにも広く分布する。ただそこでは穀作栽培法は根つかず、蹄耕はそのための家畜がいなかったので入らなかったと考えられる。

ヌサ・トゥンガラは穀作農耕圏とイモ農耕圏の漸移帯であると書いた。狭義のマライシア全域が結局同じ漸移帯として特徴づけられ

る。細かい差異は捨象するとイフガオ、ボントック、トラジャ、バタック、ニアスなどの地域にサヴやスンバと同じ文化層の露出が見られる。そこにある農耕法と生活景観がヒンズーやイスラム渡来以前の狭義のマライシアの核心を作っていると考えられる。サヴやスンバを材料にその要素を整理すると農耕では短期休閑畑や焼畑での掘棒、櫛型鋤による耕起、畑の作物としてはオカボ、アワ、ソルガム、ハトムギ、それに最近ではトウモロコシなどの雑穀、緑豆、タロイモ類とヤムイモ、それに最近ではサツマイモとキャッサバ。水田では蹄耕と移植栽培、穂摘み、時にナイフによる根刈り、足踏み脱穀、杵臼脱穀・精米、高床米倉、生活文化では土地神と祖先神を畏怖する農耕儀礼とそこでのショウガの魔力信仰、穀神ないし稲穂の崇拜、精緻な葬送儀礼と再生思想や水牛供犠、女達の *takalak* (イエエエエ.....)、くりぬき木棺、巨石墓とそれに刻まれたハイネゲルデルンの言う記念の様式と装飾の様式、太鼓の聖物化、模擬部族戦闘と首狩り、といったところだ。これらの要素はひとつひとつをとると、狭義のマライシアに独自のものは何もなく、イモ農耕圏や畑作穀作圏にも存在する。それにも拘らずサヴやスンバ、トラジャやニアスが狭義のマライシアの核心だと言うのは、時間軸で切るとおよそ紀元前後までに狭義のマライシアに堆積した文化層がそこに露出しているということである。

Ⅲ 湿地の無耕起移植稲作

1. 古代中国の下湿地水田

稲作農耕法の系譜を考える上で重要な農法として更に二つの方法を述べておきたい。その一つは湿地の無耕起移植稲作であり、もう一つは蹄耕散播水田である。この章では湿地の無耕起移植稲作を、次章で蹄耕散播水田を

述べよう。

移植を基幹技術とする水田稲作はイモ農耕と穀作農耕が接触した地域で始まったとする仮説は既に述べた。そして東南アジアの稲作に関係の深い稲作の発生地域として中国の長江中下流域を想定した。移植はイモの子育て栽培思想を受け継いだ技術であるという仮説は先述したが、水田という耕地デザインは雑草処理の必要上、創出されたと考えている。この考えは既に高谷〔1986〕が述べている。雑草処理を狙った水田農耕の様子は先にふれた『齊民要術』〔西山・熊代 1969: 102〕に周礼からの引用として見られる。下湿地稲作法だ。詳細は省略するが、溜池を作り、水路で田に水を引き、畦に切った水口から田に水をはり、雑草を切り倒して水中で腐らせ、その草を揚げて捨て、整地して稲を播くという方法である。随分と灌漑に注意を払って水田を作る状況が描写されている。この方法の狙いが雑草退治にあることは明瞭だ。というのは精密な灌漑の様子とは裏腹に、耕耘つまり土の耕起については不思議な程全く記述していないからである。『齊民要術』には華北高原の稲作も記述をしており、それだと、稲田に放水して10日後に有齒ローラーを10回曳きまわし、土を十分に耕耘・吸水させた後、発芽粃を散播する。そして多分草抑えの休閒耕を行う為に1年毎に休閒する。この方法は畑作的散播法にとりこまれた稲作で、その記述と先の周礼の下湿地稲作を比較すると、下湿地稲作は水をためて草を刈り倒し、積み上げて、腐った草を捨てる雑草処理が基幹的技術であることはいっそう明瞭だ。長江中下流で発生した稲作はこの下湿地稲作であったと考えられないだろうか。

浙江省余姚県河姆渡の遺跡は余姚江の川沿いにあり、その一部は小丘の高み上にある。7,000年前の余姚江は遺跡の東で北に大きく蛇行しており、その近くには沼沢地があり、

魚介類の採集が行われたと推定されている。遺跡には鯨の骨が出土するので、今よりも杭州湾の海にもっと近い低湿地に遺跡は面していただろう。沼沢地の西にはそれに引き続いて小高い湿地があり、そこが水田だったと推定されている。ところでこの余姚川だが杭州湾に面する地域の他の河川同様、潮の干満が相当大きく、最大4～5mに達するという。現在の田面に掘られた水路は明らかに感潮し、逆潮灌漑が可能である。要するに河姆渡遺跡の観察は水田の立地が感潮河川沿いの低湿地にあったことを示している。

感潮河川沿いの水田、雑草退治を根幹とする農作業、この組み合わせを我々は実はよく知っていると思っている。というのは島嶼部の低湿地に広い無耕起稲作がこれによく似ているからだ。その内容は後に詳述するが、使用する道具は *parang* という刃渡り60 cm程の山刀や、*tajak* というゴルフクラブに似た草刈り鎌のみで、水浸かりの田の草を刈り倒し、草塚を積み、腐るとばらまいて肥料とする。植え付けは苗を植え棒で植える。粃を播く方法だと水中で粃が窒息死するからである。

下湿地水田農耕において、草を刈るだけの耨耕無耕起、そして移植という技術が核心だったことを推察する材料は漢代の墓に副葬された明器や画像磚に見られる。中国の農業考古学者、陳文華の論文〔1987〕はそうした資料を集めたもので、いくつかの例がその農具や方法を示している。四川省成都出土の漁獵收穫画像磚は稲穂を刈る人物と大きな鍬鎌を振り回して稲藁を刈り倒す様子を示す。四川省新都県出土の画像磚にも、同様の鎌を振るって水田の草を刈る人と、杖に身を寄せて田植えされた水田の草を足で踏み込む図が描かれている。四川省峨眉県出土の石刻水田模型は溜池と、田ごし灌漑用の溝を切った畦で画された2枚の水田を示す。水田では2人の

農夫が除草を行い、草を塚状に積み上げている。鋤鎌を振り回す様子、草を塚状に積み上げる様子など、今日のスマトラ、ボルネオの低湿地の作業と実によく似ている。中国江南の紀元前四千年紀の稲作遺跡には石犁先や、破土器と云われる農具が出土する。破土器はロープで牽いて土を切る用法が推定されているが、私は破土器で土を切ったのではなく、草の網状根層を切ったのだらうと想定している。そういう方法が実際に今の低湿地で行われているからだ。

2. 島嶼部の湿地無耕起移植稲作

島嶼部の無耕起移植稲作はマレー半島、スマトラ、ボルネオ、ルソン島などの低湿地に広く分布している。その中でも南カリマンタンのバリト川流域は草処理方法の徹底すること、苗の多回移植、棒移植などの特徴的技術を維持している点で多地域を断然圧している。バリト・カプアス・トラフの湿地環境が卓越していることと、接近が比較的容易で古くから稲作伝統が確立していたことによると思う。湿地は感潮帯の沿岸湿地と川水があふれる内陸の氾濫湿地の2区に分けられる。開拓の歴史が古いのは内陸の氾濫湿地である。湿地稲作の代表としてまずバリト川中流域のアムンタイ付近の稲作を見てみよう。

2-1 バリト川の湿地稲作

支川のネガラ川やマルタプラ川の深水氾濫帯の水田は雨季になると水深2m程の広大な湖沼地帯になる。しかし4月から7月の乾季には減水して地表が露出し、水田耕作ができる。

水田がまだ深く湛水している頃に苗代準備を始める。水田といっても湖沼と同じで、畦も水路も何もない。本移植までに苗の移植を繰り返すので、苗代は1回きりではなく数次段階にわたる。最初の苗代の作り方は二通りある。一つは筏苗代、もう一つは、村の道や

庭などの高みに作る畑苗代である。バリト川氾濫帯の例を述べてみよう。水田の水深と農作業暦は図12のようなものだ。各種の苗代配置を図13に示した。

筏苗代 (*rantin*) は四月に作る。バナナの茎を並べてその上にホテ草を敷き、その上に細い藻を置き、土を2-3cm 敷く。そこに発芽粃をばら播く。筏の大きさは2m×8m程のもので、これを水面に浮かべ、鳥に喰われないように覆いをする。水位の高い年は、筏苗代が増える。筏苗代の変形は陸地にも作る。これは水位が低くて水田まわりの大畦が露出している年には増える。その作り方がなかなか手がこんでいる。まず、パンダヌス

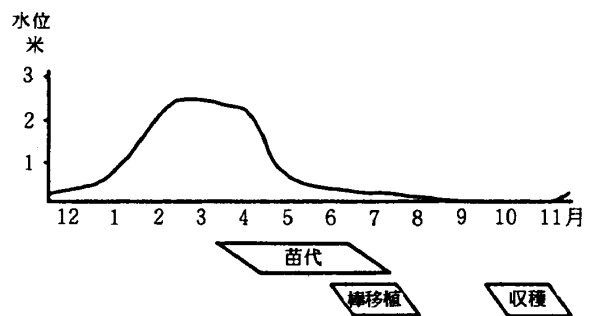


図12 バリト川氾濫帯の水深と稲作作業暦

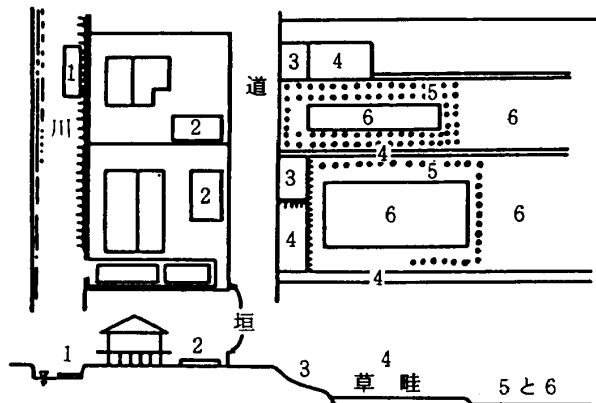


図13 バリト川氾濫帯の苗代と本田

1. 筏 (第一) 苗代
2. 変形筏苗代
3. 畑 (第一) 苗代
4. 草畦上の第二苗代
5. 本田の第三苗代
6. 本田

籠に粃を入れ三晩水漬けし、水から揚げて、水路沿いの水浴台の上に5日間置く。毎日水をかけてやると芽と根が少し伸び出す。そうすると、ゴザを庭や大畦などの高みに広げ、そこにホテー草と藻、その上に更に土を薄く敷き、芽と根の出た粃をばら播く。

畑苗代(*teradak*)は村道の路肩に作られる。これは掘棒(*tatujak* という、図14参照)で穿った穴に粃を播いたものだ。一握りの粃を5個の穴に分けて播き、足で軽く覆土するだけの簡単な作り方である。

上に述べた各種の第一苗代(*palaian*と総称する)の苗は3-4週間後に第二苗代に移植する。第二苗代は *ampak* という。どこに作るかは、その年の水位によって異なる。再び筏の上に作る場合がある。今度は土を厚く置き、掘棒で穴を穿ち、第一筏苗代の苗株を適当な大きさに分けて植える。これは水位が予想した程下がらず、第二苗代の適当な場所が得られないと、やむをえず行う。こういう時には路肩の高みに作られた第一苗代の少し下あたりに、*ampak* を作ることもある。適当な高さに水位が下がった場合は、水面に浮い

ているホテー草や、水中の藻をかき集め、水田の中に長く列状に積み上げる。草積みの大畦を長く伸ばすわけだ。この上に *ampak* が作られる。やはり掘棒で穴を穿ち、第一苗代から移植する。第二苗代の期間は本田の水位によって2週間から6週間位で、期間の変動が大きい。この間に苗は分蘖を始める。

5月の末から6月初めには、高みの水田が一部露出し始める。そうすると第三苗代の準備を始める。これは *lacak* という。*Lacak* の準備は草の有無で全く異なる。雨季に2mを超える深水が湛水するような所では、ホテー草をかき集めるだけでよい。露出した地表に草は全く生えていない。従って *ampak* から引き抜いた苗を、直径10cm位の束に分けて植える。このとき、葉身は半分に切り縮め、長く延びた古い根を切り捨てて、掘棒で穿った穴に植える。

しかし、雨季も湛水が1m前後で経過する少し高みの場合、ホテー草以外に、イネ科の草や、カヤツリ、アメリカセンダンなどが丈高く繁っている。そこに第三苗代を作るにはまず草を刈る。水はくるぶし位の深さだ。次のような順序で進める。

①まず水田の周囲部分、3~4m幅だけ、*tajak* で草刈をする(図13の5の部分がこれに当たる)。土の中の根を切り払う程度に *tajak* を振り回す。切った草は50cm程の高さの畦状に積む。

②1週間おいて、草畦を反転する。このときまず山刀で、草畦を切り刻み、反転する。

③更に1週間おいて、腐ってきた草畦をほぐし、直径50cm程の低い塚(*puntarang*)状に積む。

④塚積み作業が終わると、その隙間が第三苗代になる。従って、この時期の田面には草塚と太い苗株が交互に入り交じっている。

第三苗代期間は約4週間であるが、これも水深の推移によって変動する。この期間に分

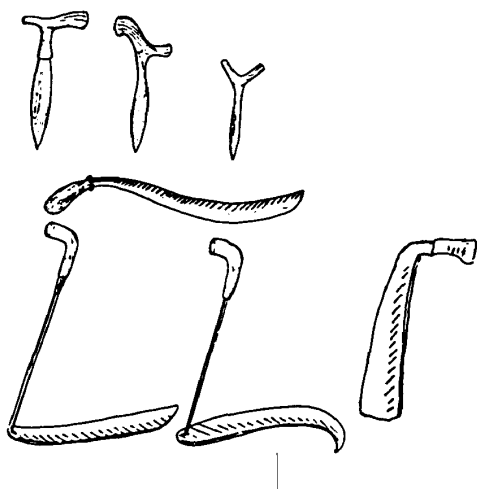


図14 湿地稲作の農具

上段は苗移植用掘棒(タトゥジャ)、中段は山刀(パラン)、下段左二つは南カリマンタンのタジャック、右端はメコンデルタのパン

薺はどんどん進み、苗株は直径 20 cm 位に成長する。中央部の本田（図 13 の 6 の部分）準備をこの間に行う。ホテー草卓越区では、簡単にすむが、草卓越区では上述の方法で、草を塚に積む。

本移植は 6 月から 7 月に行うことになる。本移植前に、草塚は田面にばらまく。緑肥にするのだ。第三苗代から引き抜いた大苗は再び半分に切り縮め、二段根や三段根部分も切り捨て、ごく僅かの新しい根芽のみ残す。茎の下に僅かの白い根芽を残しただけの苗の姿は、ちょうどタロイモの head-set 方式のイモ苗に酷似している。分薺を引き裂いて植え苗を作り、2, 3 本ずつ、掘棒で根元を抑えるようにして穴に差し込む。移植を 2 人で行う場合もある。1 人が穴あけを専門に行い、別の 1 人が苗を穴に差し込む分業を行うのだ。

何回も移植を繰り返す理由は、第一に水深の不安定性がある。そのために、安全期間の確定が難しい。早く植えすぎると、時期外れの高水で冠水する危険がある。また遅く植えると、収穫期が増水期にかかって冠水の危険がある。この危険は季節性の強い、つまり収穫期が 10 月と決まった品種を使うことで避けているが、しかし、非季節性の品種もあるので、収穫目前の冠水害も時に生ずる。こうした状況なので、苗代期間がどうしても長期化する。過密の線香苗にならないように、成長に合わせて苗代空間を大きくしてやる必要があるのだ。

第二に、深水地帯だから、広い苗代を最初に確保できない。だから、減水に応じて苗代を広げていく必要があるという説明で、これはわかり易い。第三に植えかえることで発根力が強まるという。第四に播種量が節約できるという。実際、分薺した苗を引き裂いて植えるので、これは多分言う通りの効果があるだろう。ヘクタールあたりの播種量は

10 kg 程度で済む。もし 1 回移植ならば、4, 5 倍は必要だという。しかし、多回移植の最大の理由は、イモ農耕の各種の移植方式の継承にあると私には見える。イモの成長と萌芽の出葉状況を見て移植をする方法はイモ農耕では極めて当たり前のことである。例えば *Alocasia* の地上部を収穫後、残された地下部のイモから多数のコイモが群がって出葉している様子は点播畑苗代(*teradak*)と同じだ。その一群の萌芽を数株ずつ移植し、更にそれが成長すると 1 株ずつ移植する方法、これは *teradak* (第一苗代), *ampak* (第二苗代), *lacak* (第三苗代) という多回苗代方式に最も直接的動機づけを与えているだろう。Head-set 方式のイモの植え苗と、古根を切りとばされて僅かな根芽をつけたイネ苗の類似性は先にふれた。多回苗代はイモ農耕の継承だ。

さて、生育期間に 1 回は除草を行う。山刀で根を切り、かき集める程度で済む。9, 10 月に穂積み具(*rangaman* という。ジャワの *ani-ani* と同じ)で収穫する。品種は長粒の伝統種で、インディカ型であるが、中に小円粒・有芒種がある。この味は IR 品種に似てまずいという。刈穂はカゴに入れて直ちに家へ運び、簀の子の上で足踏み脱穀をする。籾は大カゴに納め、家の中に置く。収穫後、藁はそのまま水田に残す。雨季の雨でやがて倒れた藁は翌年かき集めるか、タジャック整地の際に草と一緒に緑肥に積む。

低湿地帯では農耕儀礼の類を殆どみない。ただ、バンジャール人のみが、少しばかり儀礼を行う。次のような移植始めの儀礼と収穫儀礼がある。移植始めの日、田の真ん中にムライ（始めの意）の稲を植える。6×6, 36 株を植え、真ん中の 1 株は竹 3 本の叉で囲まれている。1 日目はムライの稲を植えるだけ、移植は翌日から始める。収穫儀礼は次のように行う。収穫前日、一部の田を飾る。竹柱を立て、それから数本のロープを張りわた

し、そのロープに種々の色の布を垂らす。そしてその下で共食を行う。それにはモチ米で作った菓子がつきものだ。また、この時、初穂束を作る。長老が最もよい稲穂7本を撰んで摘み、束の下端を泥で封印する。この穂束を新しいサロンでくるみ、香油を注ぎ、ランプで3日間照らした後、その水田所有者の家に持ち帰り、米カゴの上に吊す。儀礼といっても簡単なもので、スンバやトロブリアンドの儀礼に比べると、明らかに大量生産栽培思考の影響を受けて退化してしまっている。

こうした内陸の氾濫帯は半年は完全に全面が水びたしになる土地だから、稲作以外に、内水漁業が盛んである。水田には筌をあちこちに置く。また四手網を小型にしたようなすくい網で川岸の水中をすくう。川岸や水路沿いには刺網を張る。垂直に張る刺網と斜めに張るものがある。湖沼には漁柵をジグザグに数 km も張る。ツボに入った魚をタモですくう。

これら以外に釣りや投げ網も勿論行われる。獲物の川魚は干魚、塩干魚に加工する。燻製魚やトゥラッシー（蝦醬）作りはしない。

サンパンを漕いで水面の葉陰を行く人々は夜昼となく蚊やりを焚いている。蚊が多いのだ。蚊やりにはグンボルという木の樹皮を焚く。これは水で練るとぬるぬるになり、乾くと多孔質な燃焼材になるので、シンガポール製の蚊とり線香にも大量に使われる。このグンボル集めも、村人の重要な収入源の一つだ。

2-2 バタンハリ川の湿地稲作

バリト川の氾濫帯で自然の湛水条件を生かした雑草抑制が行われているのに比べ、スマトラのバタンハリ川の氾濫帯や中流域の内陸低湿地では、後背湿地の排水水位を制御して、雨季の湛水域を拡大し、*sawah payo* という一種のベースン灌漑で雑草抑制を行う。

これはスマトラ東岸一帯からマレー半島に広く分布する。その特徴をかいつまんで次に述べよう。

バタンハリ川中流域の主谷域では、河岸段丘の川岸が高い。乾季だと、6, 7 m の崖が露出する。河岸段丘の上には自然堤防が発達し、村はそこに並ぶ。後背湿地(*payo*)の水田を *sawah payo* という。*Sawah payo* の模式図を図 15 に示した。河岸段丘には自然堤防から後背湿地へかけて皿状にくぼんだ地形があり、丘陵脚部で再び高くなる。雨季に空から見ると、河と後背湿地は水面でつながり、自然堤防の集落が水に浮いているように見える。雨季の *sawah payo* は深水にすぎるので稲作は不可能である。乾季に、水位が下がり始めると、高みから土が露出してくる。その泥地を追って稲を植える。これが自然のままの湿地稲作で、先述のボルネオの場合はほとんどが、この形態である。

ところが、スマトラでは 1920 年代にちょっとした改良が行われた。それは後背湿地を排水する小川に水門を設けたことである。雨季の間、水門を閉じておくので後背湿地の水位は従来よりも高くなり、その分、湛水域を広げる効果がある。12 月に収穫が済むと、藁を刈り倒し、水門を閉じる。後背湿地には雨水が溜まり始め、最深部では 2 m に湛水する。周辺部の高みの水田も湛水する。高みの水田は高い畦で囲われており、高

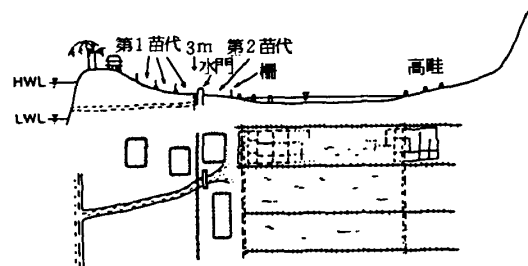


図15 スマトラ島バタンハリ川の氾濫帯のサワー・パヨ

水期に水が十分溜まると、水口（ミナクチ）を閉じる。要するに、後背湿地全体も、一筆毎の水田も、できるだけ深い湛水状態を実現するデザインだ。その狙いは深水で草を殺すことである。

6 月頃、後背湿地の水門を開いて排水する。1 カ月程で最深部の水田迄排水が進む。深水のために草は殆どない。しかし土を泥にするため、水牛蹄耕(*renca*)を行う。5 月には自然堤防地帯に第一苗代を作る。掘棒で孔を穿ち、一握りの粃を 4, 5 穴に播いた陸苗代だ。この掘棒は先述の短い植え棒ではなくて、太くて長い、イモ農耕用の掘棒に似ている。ここで 30 ~ 40 日成育した苗は、高みの水田の第二苗代に移す。第一苗代の 1 株を 3 株に分け、やはり掘棒で穿った穴に挿しこむ。ここに 20 日おく。

蹄耕が終わると水牛はまわりのヤブや村の中で放牧する。水田は全体を柵で囲う。各自の水田は川岸から後背湿地へ向かって短冊状に区切られ、20 × 100 ドゥパ(1 ドゥパは約 1.8 m) 単位に柵で囲う。苗代も柵で囲う。そして田植えを、まず高みから始める。高みの水田は第一苗代から直接、本移植を行う。低みの水田はまだ水が深いので、移植が遅れる。その間、第二苗代に苗を置く。減水が進むと、やはり掘棒で穴を穿ち、第二苗代から大苗を移植する。低みの水田に植える品種はパディ・サイゴンのような長稈晩生型だ。移植後、除草の必要はない。11 月、雨季が始まって、*sawah payo* が増水し始める頃、穂摘具で収穫する。播種量がヘクタール当たり 2 カレン(約 30kg)に対して、収穫量が 2,000 カレン(約 3 トン)である。

要するに水門つき *sawah payo* は水田と溜池を一体化した構造であり、溜池の目的は雑草抑制、つまり周礼に言うように、草を耨り、芟死せしめることなのだ。

こういう構造だから、*sawah payo* は同時

に魚池でもある。竹筒を 3, 4 本束ねた筥に重りをつけて沈めておくとタイワンナマズ、ウナギ、ドジョウなどが入り込み、獲物は多い。

3. 湿地無耕起移植稲作——小結

ここで述べたボルネオ、スマトラの湿地無耕起移植稲作は要するに中国の長江中下流域で発生した稲作の原型を示していると私は考えている。長江流域の考古学的確証は多い。感潮河川沿い、氾濫帯など、湿地の環境に立地する稲作遺跡と、長江沿い湿地に野生稲が自生していた可能性〔巖文明 1982〕が知られており、これにイモ農耕の思想を継承した移植法の成立を重ね合わせると、その仮説に辿りつく。地理的距離と、6,000 年という長い時間の差を考えると、その仮説は成立しないのではという反論があるだろうが、生活文化と環境の本質に根ざした技術の息の長さは想像を絶しているものだ。ただ残念ながら、その原初形態がスマトラ、ボルネオへ伝播した途中経過と時期を明らかにする材料はない。

ところで、上述した氾濫帯の湿地稲作は確立した技法であり、連作を行い、水田地帯は林が姿を消した開けた空間だ。林を伐って焼くといった風景ではない。他方、現在の沿岸帯感潮湿地は最近迄、多雨林におおわれたフロンティアだった。その開拓が今、進行中である。そうした開拓地の景色は丘の焼畑と同じで、焼け焦げた高木が残り、倒木があり、木株が残っている。湿地焼畑である。密林を開いて 3, 4 年は草が生えないからこれは理想的な水田になる。しかしその内多年性カヤツリが一面に生える。それを湿地稲作の方法で草を切り、水づけにして殺して水田を続けていると、やがて一年性のカヤツリ原になる。住民はそこで二つの選択肢に当面する。休憩して林に戻すか、湿地稲作の連作田にし

てしまうかである。要するに林だったフロンティアに湿地稲作が侵入しつつある状況だ。

この状況はやはり中国の江南で、漢代の記録に現れる火耕水耨を思い起こさせる。火耕水耨は記録を行なった華北の人間にとっては辺境の農業で、短い記述で終わる為に実態がはっきりしない。例えば「江南は火耕水耨す」（史記平準書）、「江南の地は火耕水耨す」（漢書武帝記）「楚越の地は、地広く人稀にして、稲を飯いて、魚を羹にす。或いは火耕して水耨す」（史記貨殖列伝）、「楚に江漢の川沢山林の饒有り。江南は池広く、或いは火耕水耨す。民は魚稻を食らい、漁獵山伐を以て業と為す」（漢書地理志下）などである。簡単な記述なので種々の解釈がされている。最も早く行われた注釈で有名なものは後漢の応劭による。それによると、草を焼いて水を入れ、稲を播き、草と稲が7、8寸に伸びたところで全部刈り去り、また水を入れると草は死んで稲だけが伸びるという解釈だ。これは乾季に厳しく乾き、雨季は一面の水面になる大陸部デルタの稲作を思わせる解釈だが、果してそうしたものだっただろうか。周年の湿地では草を焼くだけでは草抑えはなかなか難しい。最近翻訳された彭世奨の論文は火耕水耨についての論議を簡潔に要約し、次のようなイメージを出している〔彭世奨 1987〕。①漢代に江淮、嶺南、ベトナム地域で行われていた、②河川・湖・海などの臨水地方で行われた、③当時の人口希薄な開拓地の農法である、④犁耕は行わず、直播だった、⑤水で雑草を淹死させた。彭の四つ迄は賛成だ。現在の島嶼部の沿岸感潮帯に開拓が侵入する状況と往時の江南、嶺南の沿岸湿地の開拓とが歴史的過程として本質的によく似ている。しかし、植え方が直播かどうかは尚疑問がある。彭は広東新語を引いているが、その中でも「沙田の低みは秧蒔す」とある。これは苗の移植か、直播か疑問がある。また、漢代の

文献にしても、当時先進地域の華北の役人が、江南に対する優越感から一部の直播を過大に報告したこともありうる。

広東新語の舞台となった珠江デルタは我々も訪れたが、明らかに感潮湿地である。番禺県の沙湾で聞いた話では、沙田は3種に分かれ、珠江の水位からの高さが1.2～0.8 mのものが高沙田と呼ばれるが、高沙田も潮汐による自動灌漑が可能である。今は輪中集落になり、水田は輪中堤で囲まれて、内水をポンプで排水するが、解放前は堤防も土盛りの小さなものだったというから、満潮時の高水位で湛水する水田も広がっただろう。人々は小土堤の上に藁葺きの干欄家を建てて住んでいたという。木榔という二又鍬で土を反転し、早稲の苗を清明節の頃に手植えし、半月後、麻釧という先端に鉄片をつけた掘棒で穴をあけて晩生種の苗を植えたという。沙田は一作のみだったが、解放前から民田という高みの水田もあり、これは水利制御が可能だったので二期作を行っていたという。

これから考えると、感潮帯の沙田は水利制御が難しく、年一作の湿地移植稲作地域が相当広がったと考えられる。島嶼部の氾濫帯に湿地稲作が入り、それが感潮帯湿地へ火耕水耨型の稲作で拡大していつている現在の状況は、かつての中国江南、嶺南地方の開拓過程の一面を示しているのではなかろうか。

ところでスンバヤサグ島の蹄耕移植法と、スマトラ、ボルネオの草を切るだけの無耕起移植法の関係はどうなのか。私は先述のように蹄耕を牧畜・穀作複合の系譜で考え、無耕起湿地稲作をイモ農耕と穀作の会合から生じた、家畜も犁も持たない農耕形態と考えているので、両者は農耕の系統が異なると見ている。これらを厳密に分けるのは難しいけれども、蹄耕移植法における家畜の利用、再生信仰を軸とした原始宗教の保持、巨石文化の根強い維持などは、例えばマライシア圏の西端

にあるマダガスカルにも見られ、マダガスカル文化は更にナイロート系の部族にも共有される。例えばスーダンのナイロート系部族にはストーン・サークルやドルメン、犠牲牛の首をかける柱、彫刻を施した墓柱、葬儀における大量の牛供犠などが一般的に見られる [Seligman and Seligman 1932]。巨石文化はクシュ族ももつが、ナイロート系やクシュ族系の文化は牧畜と雑穀農耕を行い、段畑、灌漑、厩肥利用の技術を紀元前一千年紀にはエチオピアから南下してケニア高原迄もたらしたと考えられている [Murdock 1959: 193-203]。スンバの文化がすべてドンソンから来たと考え、巨石文化がドンソン文化には欠落している、それは他の文化の伝播に求めざるをえず、直ちにアフリカ東岸とヌサ・トゥンガラを結び付けられないにしても、その吟味は今後を開いておかれるべきだろう。要するにヌサ・トゥンガラとナイロート系諸部族やクシュ族の間に何らかの関係を予想しておく方がよいので、現時点では蹄耕移植稲作と湿地の無耕起移植稲作は系統がちがうと考えている。

IV 牧畜・穀作複合の中の稲作

麦や雑穀を主体とする畑作地帯の農耕はこれまで述べた稲作と相当異なる様相を持つ。西アジアの麦作の様子は紀元前三千年紀の農耕指南書に述べられた方法が今もほとんど変わらない形で例えばイラン高原で行われる。その方法を Kramer の訳 [1963: 340-342] から私なりに抄訳してみると次のようになる。(1)水路から灌漑水を導水し、数日間湛水して、土にたっぷり吸水させる。(2)牛を追い込んで蹄耕を行かせた後、まぐわで碎土し、均平にする。(3)牛2頭曳きで犁耕を行う。2種類の犁で交互に行い、エブリを3回かける。(4)犁で6mに8本の溝を切り、播種器

で条播する。(5)播種後、再び犁で交差耕を行い、覆土する。(6)芽がでると、ニンキリム女神に祈り、鳥をシッと追う。(7)オオムギが播き溝一杯に生え揃うと、灌漑をする。(8)オオムギがマツト程の高さに伸びると2回目の灌漑をする。(9)3回目の灌漑を行い、オオムギを赤枯れさせるサマナ病に気を配る。(10)穀粒が多く付くと4回目の灌漑を行う。(11)刈手、束ね役、脱穀場へ運ぶ者3人1組で収穫を行う。(12)オオムギを脱穀場に積み上げ、脱穀車を曳いた牛を歩き回らせる。(13)風選後、ムギを大ガメに貯える。記述はないが収穫は大鎌による。

現在行われる方法はこの規範からいくつかの点でむしろ退歩している場合も見られる。天水畑地帯では条播の代わりに散播が一般的だし、脱穀車を曳かないで、単に牛を歩き回らせる牛蹄脱穀も西アジアからインドに広い。だから家畜をもつ麦作の最小限の特徴は何回も行う犁耙耕、散播、鎌による根刈り、牛蹄脱穀、穀実のカメ貯蔵とまとめられる。貯蔵法には変化が多く、窖穴、ビン、倉用建物、なども使われる、こうした農法の分布は広く、西アジア、西インドからデカン高原、華北にまで広がる大量生産思想に基づく穀作農耕の基本型になっている。

1. マダガスカル概観

この畑作穀作地帯に近い地域の稲作はこれらの技術を受け入れて、畑作的変形をこうむっている。そうした例はスリランカやマダガスカルに見いだせる。その特徴を端的に言う、蹄耕・散播・鎌による根刈り・牛蹄脱穀である。例えばスリランカでは水牛蹄耕・散播・鎌刈り・牛蹄脱穀が基本的農法になっている。湿潤地帯南端のマタラ付近で、蹄耕後の水田に入った人々が鋤柄で身体を支え、足を左右に振りつつ泥を均平にする情景は、例えば後漢の四川省新都県出土の蔴秧農作画

像磚に描かれた様子や、アッサムのアパタニ族の踏耕の状況 [Fürier-Haimendorf 1962] に酷似している。これらの例も畑作体系の中にとりこまれた稲作だ。こうした畑作的稲作の例を豊富にもつマダガスカルを以下にのべてみよう。

マダガスカルの農耕はアフリカ大陸要素とアジア島嶼要素の両者をもち、しかもその下に古層のイモ農耕が見えかくれする興味ある複合体を作っている。アフリカ大陸要素とは草原景観、雑穀・肉食、牧畜民、アジア島嶼要素とは森林景観、米・魚食、農耕民と扱っている。マダガスカルにはこうした文化を

担って次々と種々の人々が渡来しており、図16に示した中央高地、東部雨林、西部サバンナに多様な部族が住み分けている。まず主要な部族の農耕要素を簡単にまとめてみよう。

中央高地。高原に草原が広く、牧畜と畑を組み合わせる。谷に水田を開く。

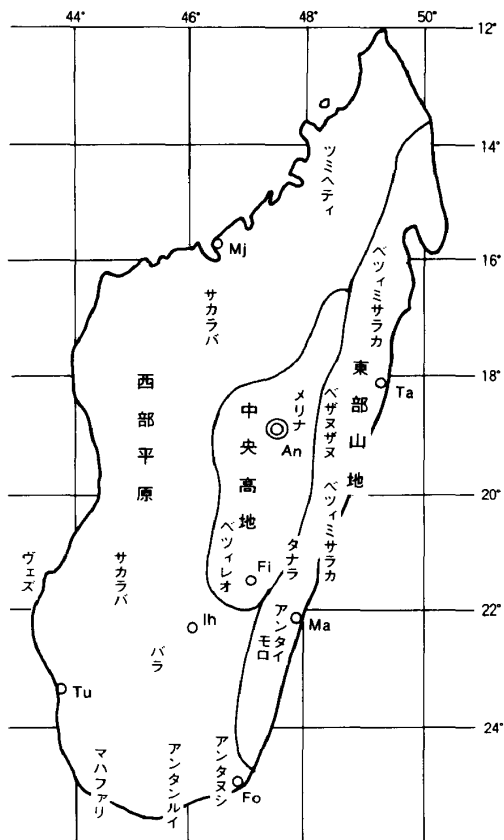
〈メリナ (Merina)・ベツィレオ (Betsileo)〉

水田は昔は牛の蹄耕で、今は *angady* と呼ばれる橇型鋤で耕起して湛水する方法が卓越するが、犁耙耕が入りつつある。谷の水田は、溪流の水を受けて草の斜面を長い細い水路で導水して灌漑を行う。見事な棚田も広い。植え付けは移植、その後鎌刈り、打付け脱穀を行い、家内に貯蔵する。高原の上の畑は牛柵を設けて牛糞施肥を行い、*angady* で穴をあけて、キャッサバ、トウモロコシを植える。下の畑は *angady* で大土塊を反転し、雨で細塊になると種々の作物を植える。メリナ、ベツィレオ地域の中心、アンツィラベには40 km程の幅でカルク・アルカリ系火山岩と火山灰の噴出が見られ、そこにはタロイモ畑が広い。

東部雨林。東岸に落ち込む急斜面の多雨林に焼畑が広く、谷と、東岸の砂丘背後の湿地に水田がある。

〈ベツィミサラカ (Betsimisaraka)〉

谷の盆地の水田は蹄耕で地寄せをするが、フランス植民地時代に入った鋤耕起も行う。植え付けは散播、点播、移植で行われる。ナイフで穂を摘み、足踏み脱穀をし、粃を高床倉に貯える。少し古い村だと蹄耕前に、飯、蜂蜜、ラム、タバコなどを水田の斉囲にお供えする。東岸沿いには *via* (*Alocasia*) の密生した湿地が長く伸び、今その水田転換が始まっている。こうした湿地水田は山刀で *via*、カヤツリを切り倒し、水づけにして腐



An : アンタナナリブ	Ma : マナカラ
Fi : フィアナランツァ	Mj : マジュンガ
Fo : フォート・ドーファン	Ta : タマタブ
Ih : イホシ	Tu : トリアール

図16 マダガスカル位置図と主要民族分布

らせる。2回移植、点播、散播などが行われる。*via* は食用にもなる。長い太い掘棒を使って周りを掘り、イモの下に差し込んでテコで掘り出す。地上部は捨て、下部の膨らんだ球部の皮を剥き、おろして団子にし、煮るかフライにする。焼畑地はマレー地域と同じだが、繰り返し使われた焼畑は旅人木のヤブに変わっているところがマダガスカルらしい。太い掘棒で穴をあけ、米、トウモロコシ、緑豆、キビ、タロイモなどを植える。米はナイフで穂摘みをし、足踏み脱穀を行う。山麓や赤土の丘には丁字、ライチ、バナナなどのプランテーションがフランス時代に開かれている。

〈タナラ (Tanala)〉

典型的焼畑景観を示し、長い斜面に高木林、ヤブ、焼畑地が入り交じる。伐開時には *vazymba* に通知する儀礼がある。*vazymba* はマダガスカルの伝説上の先住民で、神と同等と意識されている。林の中へ裸の男が入り、籾の皮をむいて植えたり、バナナの苗を逆さまに植えるなどバカな仕草をする。すると *vazymba* がこの男の夢に現れて、こんなバカな者共と一緒に居れないから、ワシは出ていくよと告げる。これで伐開・火入れが許される。防火帯を設けてきれいな火入れを行う。播種は太い掘棒をまっすぐ打下ろして穴をあけ、籾を点播する。穂摘みナイフで収穫し、野小屋に積み上げて1カ月乾燥後、ねずみ返しの円盤のついた立派な高床倉に入れる。谷底には水田もあり、従来は蹄耕後、主に散播を行なったが、点播や移植植え付けもあり、最近では犁耕も始まった。

〈アンタイモロ (Antaimoro)〉

ベツィミサラカと似た環境と焼畑、水田耕作を行うが、高床米倉はより立派である。コーヒー、油ヤシ、丁字などのプランテーションも広い。アンタイモロの一派アンタイラオチャは8世紀頃アラビアからアフリカ東

岸を経由して移動して来たと伝えられ、航海術、占星術、薬物学、魔術に詳しく、ヴォヒペヌ (Vohipeno) には書記が居り、今もマダガスカル語の年代記をアラビア語で記録している。イヴァト (Ivato) にはこうしたアラビア系移動民の王が居り、高床宮殿がある。

〈アンタヌシ (Antanosy)〉

東岸南端部に居る部族で、水田はやはり湿田だ。蹄耕を行い、鋤で地均しをし、草、大土塊は畦に積み、牛糞施肥をして田植えか散播をする。鎌刈り後、石にたたきつけ、脱穀を行い、籾をカゴに入れて家内に置く。焼畑は頑丈な柵で囲い、掘棒点播を行い、2年目は鋤で耕起してサツマイモを植える。ライチ、ジャンブルジャン (インドネシアのチャンプー)、コーヒーなどの常畑も広い。

〈ベザヌザヌ (Bezanozano)〉

谷地田で行う水稻耕作はスリランカ湿润帯の方法に極めてよく似ている。方法は後述するが、蹄耕・散播・鎌刈り・窖穴貯蔵を行う。低い丘で焼畑も行い、*angady* を突き立てて軽く押して穴をあけ、点播をする。タロイモ、*via* の利用、多種のヤマイモを栽培する。

西部サバンナ。雨緑林、サバンナ、草原が広く、牧畜の重要度が東岸に比べて高い。生業、食物、霊観念などにアフリカの影響が強い。

〈ツィミヘティ (Tsimihety)〉

島北部の雨緑林地帯に住み、水田と焼畑、常畑耕作を行う。伝統的水田は草山下部の緩斜面にあり、傾斜変換線に引いた水路にスリットを切り、放水し、吸水した土に牛を追いついで蹄耕をさせる。全く畦のない傾斜水田である。そこに乾燥籾を散播する。収穫は鋸歯鎌で根刈りをし、牛糞で固めた脱穀場で牛蹄脱穀を行う。柵囲いの焼畑耕作では

angady を斜めに突き立て前方へ押して開けた穴に粃を点播する。同時に、豆類を植え付けるが、キマメ、緑豆、インゲン、その他数種の豆、ウリ、カボチャ、トウモロコシを一つの穴に混播する。他にバナナ、サトウキビ、イモ類も植える。米はやはり鋸齒鎌で根刈りをし、水田とちがって棒叩き脱穀を行う。粃は枝条土壁ぬりの米倉に収める。倉は少し床を上げている。

〈サカラヴァ (Sakalava)〉

サカラヴァは中央高原から西岸へ下るゆるやかな草原とサバンナ林に居住し、彼らにとっては圧倒的に牧畜が重要な生業である。広大な草原は牧畜景観である。乾季の終わり10月中旬、草原に火を放つ。古い禾本科の草は黄色く枯れ、堅くなって牛が食わない。また家畜の目を突く。それで、草焼きをし、雨季に新芽を出させる。次ぎに述べるバラ族もそうだが、1人で数千頭の牛持ちがいる。こういう状況だから農業は精彩を欠いているが、水田もある。伝統的な水田農耕が発達していないだけにかえて近代的水田農耕がある。例えばマハジャンガ (Mahajanga) 近くのマルヴァイ (Marovoay) にはそうした巨大な農場がある。小規模な水田では灌漑・蹄耕・移植・鎌刈り・牛蹄脱穀が標準的だが、蹄耕後の水田に掘棒点播も行われる。伝統的農耕としては水田よりもバオバブの多い雨緑林を開いた畑が目立ち、キャッサバ、サツマイモ、トウモロコシの他にワタが広い。野生のイモ類の利用も目立つ。*Balo* という野生のヤマイモを林で掘り、ゆがく。*tari* というヤマイモは水につけて干し、粉を団子にする。テンナンショウの類の *tavolo* はすりおろして、布で漉し、乾燥粉を団子にする。こうしたウガリ系の食い方、牧畜景観、槍をもって牛を追う長身の人々など、サカラヴァ族はアフリカ東岸の影響が最も強い。

〈マハファリ (Mahafaly) ・マシュクール (Mashkor)〉

西南部の乾燥地帯にいる部族の中では最も農耕に重点をおくのがこの2部族である。両方共、水田は殆んどもたず、矮性のサバンナに開いた畑に依存するが、マハファリ族の方がより移動焼畑的で、村の家は簡単且つ小さい。枝条壁や草編屋根は折り畳んで牛車に載せ、移動することができる。マシュクール族はより常畑的で、家も少し大きい。畑は *angady* で低い畝を立て、中耕除草の時は畑に座り込んで *angady* を水平にくりだし、草を削る。作物は現在はキャッサバ、トウモロコシと各種のマメ、特にアフリカの指標作物であるバンバラマメも相当量栽培される。商品作物としてのワタ栽培も広い。トウモロコシ以外の雑穀として、多分、モロコシが栽培されている。結局商品作物と焼畑を組合わせたローテーションが今は広がっている。伐開した畑に1年目はトウモロコシ、2年目はトウモロコシとキャッサバ、3年目は施肥をしてワタを栽培後、3、4年の短期休閑を行う。

〈ヴェズ (Vezo)〉

サカラヴァ族、マシュクール族と言葉が同じで、両部族に関係が深いと考えられているのがヴェズ族である。しかし、ヴェズはアウトリッガーを使った漁業に特化していて、農耕、牧畜は行わない。漁民であるにも拘らず、彼らの霊観念の中では牛のもつ意味が大きい。それに少し触れておきたい。モロンダヴァ (Morondava) の北の海岸近くに、ヴェズ族の病気治療儀礼を行う聖地がある。タマリンドの大木の周りに病気治療用の床机が並んでいる。彼らの観念では、森には横死を遂げて葬儀を受けず、うろうろしている死霊がいる。死霊は年に1回は生きている人にとりつき、とりつかれた人は病気になる。医者が診てもその原因が判らない。呪術師が病

人をこの床机の上に上げて踊らせる内に、トランス状態になった病人は来年の大雨、収穫などについて語る。これはとりついた死霊が語っているのである。人々が準備しておいた牛の中から1頭の牛を病人つまり死霊が選ぶ。その牛は *dabara* と言われる。人々は *dabara* を槍で刺す。刺すべき場所も病人つまり死霊が教える。吹き出た血を病人が飲むと、死霊は病人から出て *dabara* の牛に入る。*dabara* の牛は狂ってあばれまわるが、人々がそれを取り抑え、鎮める。牛が鎮まると病人の病気は終わり、時には1週間も続いたこの儀礼も終わる。その間、人々は病人の提供する食事にありついていたのである。この後、病気の癒えた人と *dabara* 牛は同体であり、その人が病気になるると牛も病気になり、その人がなくなると牛も死ぬ。この儀礼で、牛を槍で刺してその血を飲む行為や、死霊が人から牛に移るといった観念は、東南アジアのものではなくてアフリカに現に見られるものだし、その系譜は明確には判らないが、ナイトーロやクシュ系部族に由来すると推定される。要するにマダガスカル西部サバンナの動物と人間の関係は東南アジアのマライシア地域の要素と違って、東アフリカの要素だろう。

〈タンルイ (Tanroy)〉

タンルイ族は南岸のトゲサバンナに住み、牧畜と畑作を行う部族である。畑はサボテンや鋭いトゲをもつ多種のユーホルビア属の低木で囲まれている。タンルイの居るトゲ林では草の株が連続していないので火入れをしても火が走らない。そういう乾燥地だから、サボテンも乾燥年には牛の餌として重要である。畑の耕作法、作物はサカラヴァ族などと似るが重要な違いが一点ある。牛の数が多いので、畑に繋牧をして牛糞施肥をすることである。これはマハファリ族も同じ慣行がある。メリナ・ベツィレオも牛糞施肥慣行が

あるが、石囲い牛舎で牛糞を集めるのが主である。タンルイ族はこの牛糞施肥のおかげで、常畑耕作が主体である。

〈バラ (Bara)〉

サバンナに火入れして作りだした広大な草原地帯で、最も牧畜に依存した生活をするのがバラ族である。中には数千頭の牛持ちがいる。しかしバラ族はたいへんユニークな水田耕作も行う。その内容は後述するが、ツミヘティ族同様、傾斜水田、蹄耕、散播、更に散播後の種子踏みこみ用蹄耕も行う。そしてツミヘティ族より遙かに牧畜要素が強く、傾斜水田も大規模である。バラ族の農耕法は牧畜と稲作の遭遇であるといえよう。

以上の如く、東岸雨林の農耕は雨林マレーの稲作と類似点が多く、他方西岸サバンナはアフリカ東岸の牧畜およびサバンナ農耕との類似点が多いといえる。西岸サバンナの農・牧複合は、農を主とするか、牧を主とするか重点の置き方によって、多くの変異形が生ずるが、アフリカ東岸のみならず、マライシアの古層を保持する核心域、例えばヌサ・トゥンガラに分布する農・牧形態にも類似点が多々指摘できる。これらの類似性はマダガスカル以外の生活文化、例えば巨石を立石に使い、多数の牛を供犠する葬制、また村の広場に建てられた尖った二又の供犠柱、鳥をモチーフにした墓柱や段台ピラミッド、などを見るといっそう強められる。同様の生活文化要素はほとんどがイモ農耕圏のメラネシア、ポリネシアにも見られる。こうした状況に着目すると東アフリカからメラネシア、ポリネシア迄、環赤道海域にいくつかの文化のリンクが連なり合っていて続いていると考えたい訳だ。全ての要素が一つのリンクで直接結び付けられている状況でないことは明らかだが、要素によっては、例えば段台ピラミッドのように東アフリカからポリネシア迄、高い類似

性が見られるものがあるし、櫛型鋤による大土塊耕起法、蹄耕など、マダガスカルと東部インドネシア地域の間には密接な関係を想定させるものがある。

環赤道海域農耕帯を想定すると、大きな構図は、両端にイモ農耕圏（西端部は穀作が相当厚くイモ農耕を覆ってしまっているが）があり、中間にクサビ状に雑穀及び稲の栽培圏が割り込んでいる形だ。そして稲のクサビが入り込んだ地域つまり狭義のマライシア圏はサバンナが牛・稲、雨林が林・稲の複合を示し、東西に押しやられたイモ農耕圏は豚・イモの複合を保存している。

2. 畑作的稲作の2類型

マダガスカルとスリランカの稲作には畑作的要素が濃厚である。その例を二つ取り上げておこう。一つは東部雨林の谷にいたベザヌザヌ族の稲作、もう一つは西部サバンナで牧畜を行うバラ族の稲作である。ベザヌザヌの稲作はスリランカのものに酷似し、多分密接な系譜関係を相互に辿れるだろう。バラ族の稲作はツミヘティ族もそうだが、系譜的な同根関係を明確に指摘できる他の地域を知らない。しかしその稲作の特徴は湿地雑穀としての稲の特性を牧畜の技術の中に実に巧妙にとりこんでいることで、そこに農・牧複合地域の農耕思想の根幹が鮮明に現れている。

ベザヌザヌ族の稲作は次のようだ。見聞した地点はモラマンガ(Moramanga)の北、アンボヒブラケリ(Ambohibolakely)村である。地拵えは乾いた水田表土を乾季に犁耕して雨を待つ。雨季の雨で水田に水がたまり始めるとマグワをかける。その後牛糞で集めた厩肥を水田に運び、水田面に点々と塚状に積み、程なく田面全体に撒く。水田地帯の中には灌漑排水兼用の水路が通り、これを使って水田を排水し、蹄耕を行う。蹄耕は10頭前後のコブ牛を一群れに密集させ、長楕円形の

時計まわりに追う。スリランカではこの時、3, 4頭ずつ首をロープで繋ぎ合わせた牛群(*angiya*といわれる)を3~4群追い込み、各群に1人ずつ追い手がついて、丁度犁のない牛耕の形で整然と蹄耕を行う。いかにも犁耕地帯の変形牛耕を形成しているが、マダガスカルではもっと素朴な形の蹄耕だ。長楕円形でぐるぐる回った後、牛を横列に広げて、同じ場所を往復させる。一区画がこうして泥になると、横へ移る。区画といったが、畦で仕切らせた一筆単位にとらわれてはいないで、畦を越えて何筆も横断的に行う。蹄耕が終わると今度は人間が *angady* を支柱にして足を左右に振り泥を均す。そして水田の中に何本もの浅い排水溝を掘る。これは田面の水深を出来るだけ均一にして出芽率を高める狙いがある。スリランカの水田も同じ目的と形態の排水溝を掘る。準備が整うと発芽粃を散播する。この時田面は落水してある。芽立ちして3 cm 程に苗立ちすると水を入れる。稲が30 cm 程成長する迄は湛水を続け、一旦水を落とした後、再び湛水して除草を1回行う。この後は除草は一切しない。4月、5月に落水して、鎌で根刈りして、稲束を牛糞(蹄耕用の牛を入れていた糞)に運び、ムシロを敷いて、その上に稲束を積み上げて牛蹄脱穀を行う。風選した粃は牛糞の中で干し、カゴに入れて村へ運ぶ。貯蔵法が面白い。3種の方法がある。第一は窖穴貯蔵である。家の床か庭に深さ2 mの穴を掘り、シダの葉を底、壁面に敷き詰める。そこに粃を入れ、シダの葉で覆い、板で蓋をする。その上を牛糞で塗り、更に土で塗りこめる。第二はカゴ貯蔵だ。高さ3 mのカゴを作り、ムシロで蓋をして家の中に置く。スリランカでは戸外に低い小屋を作り、その中に牛糞塗りのカゴをおく方法があるが、ここではその方法を行わないという。しかし、以前は行われていた印象を受ける。第三は、家の天井に板を張

り、ムシロを敷いて粃をバラ積みする方法だ。これが盗難よけ、粃の保存性の点から最も良いという。

ここで述べた窖穴貯蔵はスリランカのみならず、インドに広く見られるし、元はと言えば西アジアに穀作以前からある。だからそれだけではベザヌザヌの稲作がスリランカ由来とは言えないが、蹄耕、踏耕、散播、牛蹄脱穀、窖穴貯蔵の組み合わせはスリランカ湿潤帯の基本稲作法であり、その特徴を端的に言うに犁耕・麦作農法に組み込まれ、犁耕が欠落した稲作法だ。多分、スリランカで組み合わされたこの農法がベザヌザヌ族によってマダガスカルへ持ち込まれたものだろう。

次にバラ族の稲作について述べよう。見聞地点はイホシ (Ihosi) の西南約 40 km を南へ 5 km 下ったイヴァル (Ivaro) 村である。この付近は高度約 1,000 m の平坦な準平地帯に見渡す限り禾本科草原が広がり、牛の群が点々と草を食っている。見張りの男達は白い長布をまとい槍を持って牛を追う。アフリカのステップと見まがう景色である。準平原には樹枝状に谷が刻まれている。谷の両側には平原面から下る緩い斜面が伸びている。ここがバラ族の *vary tsipy* といわれる稲作を行う場である。乾季にヴァリ・ツィピを見てもそこが水田だとは全然気がつかないだろう。緩い斜面は草地のままで、畦で仕切られた棚田など全くないからだ。ただ、斜面の肩の部分に幅 1.5 m、深さ 50 cm 程の小さな水路が一本走っているだけである。この水路は谷川の数 km 上流に堰上げ堤を作り、水を引いている。そしてこの水路の谷側に幅 2 m 程の細長い棚田が 1 段だけ張りついて伸びている。それは約 15 m おきに小さな畦で仕切られている。牛があちこちで草を喰み、牧畜風景が広がっているので、乾季に見れば、牛に水を飲ませる為の施設かと思うことだろう。ところが雨季にはこの水路から川までの

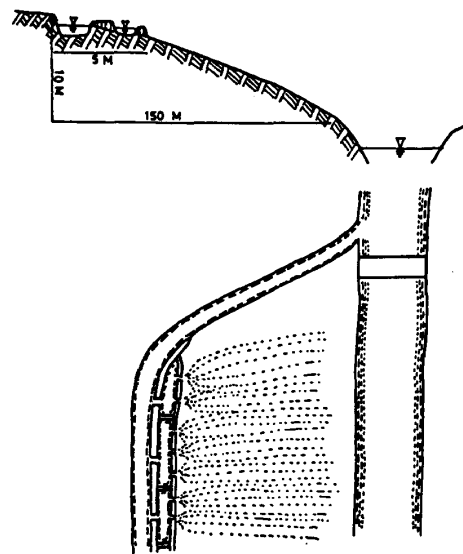


図17 バラ族のヴァリ・ツィピ田模式図 (イホシ西のイヴァル村)

傾斜草地が一面にかけ流し水田に変貌する。先述の 1 段だけ作られた棚田の水路側に水口を 1 枚に 1 個ずつ切り、斜面側には 2, 3 m 間隔で水口を切る。水路から細い棚田に入った水は谷側の水口から勢いよく草斜面に吹き出して、斜面を扇状に広がりながら流れ下る。つまり、この 1 段だけ作られた棚田はジョロのノズルの役目をはたしている。草斜面の土は黒いグルムゾルだが、半日灌水される間に吸水が進む。灌水前に草を刈ってはいけない。草の根は土を保持するので侵食防止の積極的な意味がある。水路沿いに歩くとやがて水路は草原の中で唐突に終わる。ノズルも切られていないので、水流は草斜面を細い水流で流れ下るだけだ。

さて、土がたっぷり水を吸って膨らんでくると、まわりの草原に放牧してある牛を集める。それも 10 頭、20 頭ではなく、200 頭、300 頭を集める。10 人程の男がこの牛を 5 列縦隊に編成し、隊列が整うと牛の編隊を灌水した草斜面に入れて追う。100 m 程進行すると、方向を返して戻る。何回か往復すると、蹄耕地を下げていく。こうして 3 ha 位の蹄

耕は1時間足らずで終わってしまう。1時間前迄の草斜面は300頭の牛の編隊に踏まれて、草と黒い土が練り合わされた泥に変わってしまっている。牛の編隊を草斜面にあげてこれで地拵えは完了である。

次にカゴに入れた乾燥粃を男達が散播する。粃は長手のインディカタイプである。ゆっくりと歩きながら横投げで粃を散播するので、これも忽ち終わる。しかし、まだ終わりではない。粃散播の終わった *vary tsipy* 田にもう一度牛の編隊を入れる。つまり、粃踏みこみを蹄耕で行う。

この後、除草も虫退治も何もしない。時々、水路のノズルからかけ流し灌漑を行う。そして4月に鎌で根刈りを行う。水路の上側の草原の一角に、草を刈り、牛糞を塗り固めて脱穀場を作る。刈り取った稲はそこに運び積みあげて、やはり牛に踏ませ、牛蹄脱穀を行う。粃は大カゴに入れて米倉に置く。米倉は高床があり、平床があるが、窖穴貯蔵は行わない。

3. 畑作的稲作——小結

バラ族の *vary tsipy* 稲作をまとめると、畦作りも平坦化も行わない山成りの傾斜草地、1本の水路からのかけ流し灌漑、蹄耕、散播、牛蹄覆土、鎌刈り、牛蹄脱穀、ということになる。これらの要素は基本的に牛耕麦作農法で作られただけのものといえてよい。その中から犁だけが欠落している。このことはベザヌザヌ族やツミヘティ族、スリランカ湿潤帯の伝統的稲作でも同じだ。麦作農耕的な稲作が行われるこれらの諸例で、麦作の犁が欠落することはいろいろなことを考えさせてくれる。犁欠落の最も簡単な説明は、犁の機能を環境的必然性と関連づけることだ。西アジアの乾燥農法では、地表に生じる薄い皮殻を破っておくことが、僅かな雨水を貯溜し、毛管上昇による水分損失を防ぐ上に決定

的に重要だ。だから雑草のないこの環境では土の反転は不必要で、表面の皮殻を破りさえすればよい。その為には尖棒を牛に牽引させるのが最も簡単で能率的である。紀元前四千年紀のザグロス西麓ではそうした犁が使われていた [Oats and Oats 1976]。紀元前三千年紀になるとエジプトの壁画や、メソポタミアの印章にそうした犁の絵がたくさん描かれている。ところが、イモや稲の育つ環境はより湿潤で、雑草がはびこる。それでイモ農耕だと大土塊耕起法で草を殺す操作が生じ、また稲作だと深い湛水によって草を殺す。草殺しには尖棒をひっぱるような犁では役に立たず、むしろ牛から犁を外して、牛だけを歩き回らせる方がはるかに効果的だろう。

そうすると蹄耕は稲作地帯で始まったのか。可能性は否定しきれないけれども、先に述べた如く、どうも農牧複合社会の発想という感じが強い。データとしても、先に触れたが、紀元前三千年紀のメソポタミアの麦作指南書に蹄耕が現れる。そしてバラ族の稲作で面白いのは散播後の種子の覆土にも蹄耕が行われることだが、種子覆土用の蹄耕は古代エジプトの絵にヤギで行わせるものがあるし、ヘロドトスの記述によると、ナイルのデルタで水の氾濫が退いたあと耕地に種子をまいて豚を入れ、豚に種子の踏みつけをさせると、あとは収穫を待つばかり、豚を使って穀物を脱穀するという [松平訳 1971: 上, 170]。こういう次第で、蹄耕の系譜は西アジアの農・牧複合社会に発生したと現時点では考えている。そして更に憶測を進めると、天水に頼る乾燥農法では尖棒型の犁に必然性があるが、超乾燥平原へ麦作が進出してオアシス灌漑農耕が始められた時点では、灌漑した畑の蹄耕・散播、覆土用蹄耕、つまりバラ族の稲作と同様の方法が穀作農耕の標準法として成立し、一般的に行われたのではなかろうか。この技術体系の蹄耕は麦作核心域では次

第に他の方法つまりより格好よく見える犁耕で置き換えられ、姿を消したが、周縁域では生き残り、稲作圏へ伝えられたのだろう。バラ族の稲作は東アフリカや、アラビア半島のどこかの技術ストックにまだ残っている可能性もある。例えばケニアのポコット族は傾斜地にやはり掛け流し灌漑を行なって雑穀栽培を行うが、これなども蹄耕を加えれば、バラ族の稲作と似たものになろう。ケニア、スーダン、エチオピアなど東アフリカとアラビア半島南岸は我々にとって未調査の宝庫といえよう。

参考文献

- Barrau, J. 1958. *Subsistence Agriculture in Melanesia*. Bernice P. Bishop Museum.
- ベルウッド, P. 1989. 『太平洋 東南アジアとオセアニアの人類史』植木 武; 服部研二 (訳). 法政大学出版局.
- Bie, H. C. H. de. 1901. De landbouw der inlandsche bevolking op Java. *Med. Plantentuin* 45: 1-95. Batavia.
- 陳文華. 1987. 「中国漢代長江流域水稻的栽培技術と有関農具の成就」『農業考古』1987(1): 90-114.
- 杜耀西. 1982. 「門巴族農業生産概況」『農業考古』1982(2): 144-151.
- Fox, J. J. 1977. *Harvest of the Palm. Ecological Change in Eastern Indonesia*. Harvard Univ. Press.
- フレイザー, J. 1951. 『金枝篇』永橋卓介 (訳). 岩波書店.
- Fürer-Haimendorf, C. von. 1962. *The Apas and Their Neighbours. A Primitive Civilization of the Eastern Himalayas*. London: Routledge & Kegan Paul.
- 古川久雄. 1990. 「農耕文化の伝播と適応」『東南アジア学の手法』矢野 暢 (編), 49-71ページ所収. 弘文堂.
- Golson, J. 1977. No Room at the Top: Agricultural Intensification in the New Guinea High-lands. In *Sunda and Sahul*, edited by J. Aleen *et al.*, pp. 601-638. Academic Press.
- ハイネゲルデルン, R. 1978. 『東南アジア・太平洋の美術』古橋政治 (訳). 弘文堂.
- 堀田 満. 1983. 「イモ型有用植物の起源と系統——東アジアを中心に」『日本農耕文化の源流』佐々木高明 (編), 17-58ページ所収. 日本放送出版協会.
- Izikowitz, K. G. 1951. *Lamet: Hill Peasants in French Indochina*. New York: AMS Press.
- 鹿野忠雄. 1946. 『東南亜細亜民族学先史学研究』第1巻. 矢島書房.
- King, F. H. 1911. *Farmers of Forty Centuries or Permanent Agriculture in China, Korea and Japan*. Pennsylvania: Rodale Press Inc.
- Kramer, S. N. 1963. *The Sumerians. Their History, Culture, and Character*. The Univ. of Chicago Press.
- Ledyard, P. 1982. *The Tongan Past*. Vava'u Press, Government Printing Office.
- Malinowski, B. 1935. *Coral Gardens and Their Magic*. Republished by Dover Publications, New York.
- マリノフスキー, B. 1971. 『未開人の性生活』泉靖一・蒲生正男・島 澄 (訳). 新泉社.
- 松平千秋 (訳). 1971. 『ヘロドトス 歴史』岩波文庫.
- Murdock, G. P. 1959. *Africa: Its Peoples and Their Culture History*. New York: McGraw-Hill Inc.
- 西山武一; 熊代幸雄. 1969. 『後魏賈思勰撰齊民要術』アジア経済出版会.
- Oats, D.; and Oats, J. 1976. *The Rise of Civilization*. Elsevier.
- 小野明子. 1976. 「スンバ島西部における氏族とムラ」『民族学研究』40(4): 299-326.
- 彭世樊. 1987. 「火耕水耨弁析」『中国農史』1987(2). (邦訳. 1989. 「火耕水耨」新考)『中国の稲作起源』陳文華; 渡部 武 (編), 255-278ページ所収. 六興出版).
- Sarkar, H. B. 1971. *Corpus of the Inscriptions of Java*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.
- Scheltema, A. M. P. A. 1936. *The Food Consumption of the Native Inhabitants of Java and Madura*. Batavia: National Council for the Netherlands and the Netherlands Indies.
- シュミットヒューゼン, P. J. 1968. 『植生地理学』宮脇 昭 (訳). 朝倉書店.

- Schnitger, F. M. 1939. *Forgotten Kingdoms in Sumatra*. Reprinted in 1964, Leiden: Brill.
- Seligman, C. G.; and Seligman, B. Z. 1932. *Pagan Tribes of the Nilotic Sudan*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- Serpenti, L. M. 1977. *Cultivators in the Swamps: Social Structure and Horticulture in a New Guinea Society*. Van Gocum & Comp.
- 宋兆麟. 1981. 「我国古代踏犁考」『農業考古』1981(1): 63-69.
- 高谷好一. 1986. 「水田が拓かれるとき」『豊饒の大地』佐原 真 (編), 221-253ページ所収. 集英社.
- 高谷好一ほか. 1989. 「マダガスカルの農耕」『東南アジア研究』26(4): 430-454.
- 田中耕司; 古川久雄. 1982. 「踏耕の系譜」『南西諸島農耕における南方的要素』渡部忠世 (編), 23-52ページ所収. 京都大学東南アジア研究センター.
- 宇野円空. 1940. 『マライシアに於ける稲米儀礼』東洋文庫.
- 巖文明. 1982. 「中国稲作農業的起源 (続)」『農業考古』1982(2): 50-54.
- Woensdregt, J. 1928. De Landbouw bij de To Bada in Midden Selebes. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 68: 125-255.
- 吉田集而. 1988. 『不死身のナイティ ニューギニア・イワム族の戦いと食人』平凡社.